Zum Kampfe der drei Weltreligionen.

Von

Robert Falke.

獨逸 ロベルト、ファルケ原著

日本 青木律彦飜譯

神學叢書 第六編

三大世界教 全

東京 眞理社藏版

013589-000-2

87-8

三大世界教

ロベルト・ファルケ／著

M36

ABA-0057

「若し善く三教を論せば當さに略ぼ其糠粃を去りて別に轉身一着を覓むべくして可なり、吁我れ之を知れり甕を運ぶ者は必ず甕外に在り若し甕中に坐せば甕を運ぶ事能はじ既に自ら是非の境中に埋沒せば終に之を善く三教を論ずる者と謂ふ可らざる也、須らく是れ長鯨を活捉する底の手段猛虎を生擒する底の機鋒を具ふ可し、迥然として獨り三教の表に脫し始めて坎井を出で、東海を語る可き也、苟くも區々として前人の喀唾を拾ひ紙上の陳言を竊んで而して此を是とし彼を非とせんと欲す、其れ大方に笑はれざる者鮮なし」

三教由來古有之
休將黃葉止兒啼
衝開碧落松千尺
載斷紅塵水一溪
一元

あしの葉の
かたちは舟に
にたれども
なにはの人を
にこそわた
されー

三大世界教序

吾人が此に翻譯して諸彦の閲覽に供せんと欲する小册子の原本は獨逸プロシヤの軍隊附教法官たるフアルケ氏の近業にして實に昨一千九百二年の出版に懸り、題して『三大世界教(佛教、回々教、基督教)の法戰』[Zum Kampfe der drei Weltreligionen (Buddhismus, Islam, Christentum)] と云ふ者即ち是れなり、著者フアルケ氏が筆を三教比較論に染めたるは敢て此編を以て初めと爲すに非ず既に去る一千八百九十六年に於ても之に關する一大著述あり題して『三大教祖の性格と其宗教の比較』と云ふ氏自ら其書の卷頭に序して曰く

予が此編に於て研究の歩を容れんと欲する田地は實に我が獨逸の學叢に於ても尚未だ曾て之を企てたる者あるを聞かざる處、蓋し渉獵引照す可き書籍の浩瀚なる、はた考證に關す

る異說の區々として一定の確論なき、人をして五里霧中、殆んど其眞相の所在を知るに難からしむる者あるが故のみ、然れども現代思想海の深底に流るゝ暗潮の聲を聞け、是れ實に外は衆敎林立して其孰れに適歸す可きやを定むるに苦しみ、內は敎義渾沌複雜にして安然自ら止住する事を得ず、而かも尙は且つ無妄確實の眞理を發見し以て安心立命の基礎を其上に建立せんと欲して止まざる靈的渴望の煩悶に非ずや、不肖予非才淺學を顧みず茲に此著を公にせんとする聊か以て其要求の絕叫に答へんと欲して也、豈他あらんや諸子幸に予が微衷のある處を察して徒らに大膽己を計らざるの迂を笑ふ事勿れ、書中時に科學的見解の斬新奇拔にして一顧の價ありとなす可き者之ある可からんも而かもそは一として予の發明に懸るに非ず多くは是れ碩學先輩の功に歸せざる可らざ

る也予は茲に告白せん予の論議の基礎は皆信據するに足る可き當代斯學專門家の所說なる事を、即ち佛敎に關しては、オルデンベルグ、ケーッペン、バスチヤン、ノイマン等の如き諸家に據り、『イスラム』敎に就てはスプレンガー、ワイル、ブオンクレヱマー、ガイゲル、ビスヒョン等の諸氏に從へり予不肖なりと雖も何んぞ他人の錦繡を竊んで己れを粉飾し衒學以て虛名を馳するが如き者流を學んや若し夫れ强て此著書中前人の未だ曾て手を着けざる業として稱するに足る者ありとせば、そは僅かに三敎開祖師の人格と其宗敎との優劣を通俗的に比較評判したる一點のみ、而かも予の之を爲す虛心聊かも私無き公平の筆を以て爲したりしは憚からずして公言するを得る也、故に三者批較評論の結果假令基督敎の祖師を以て最高第一たるの觀あらしむるに至るも讀者之に依りて予が基督敎

徒たるの故に殊更らに我田引水の附會を爲す者と即斷する事なく新約書使徒行傳四章十二節にペテロの所謂『此ほか別に救ある事なし蓋天下の人の中に我儕の依賴て救るべき他の名を賜ざればなり』の眞理が遂に此結論に到達せざる可らざらしめたるの所以を知れ云々

著者が其前著の大部書に序したる此等の數言は直ちに移して此小冊子の序と爲すを得可き也吾人さきに此書和譯の着手せんとするに當り、先づ著者の同意を求めたりしに著者は快よく之を諾認したるのみならず更らに注意して其内容と體裁とを多少變更してより日本的ならしむるは、却て日本の讀者に一層の興味を與ふる所以なる可きを以てせり、吾人即ち此注文に從ひ時々改竄の筆を加ふるも責めは固より吾人にあり、蓋し其三大宗教のうち佛耶の二大宗教が兩々相對峙して毫も相降らざる壯觀は獨逸に於てよりも寧ろ日本の精神界に盛んなる者あるを見る從て之を叙するの筆法に多少の相違ある可きは亦正さに止むを得ざる處也、讀者のうち若し此飜譯の一書と原本とを對照して時に黑白の相違あるを發見する者請ふ以上吾人が陳述したる處を諒し原著者の筆意を革むるの甚だしきを深く咎むる處無くんば幸なり

明治三十六年六月

小石川の寓居に於て

發行者識

三大世界教

目次

第一章　緒言

第一　地球上最も廣く流演瀰布する宗教は何ぞや……一頁

第二　孰れか是れ三中の最勝教……五

第三　天下の信仰は遂に能く一法に歸向す可き者なる乎……七

第二章　教祖の名號並に開教の年時……八

第一　佛教の肇祖釋迦文佛……八

第二　回教の開祖馬哈默……九

第三　基教の始祖耶蘇基督……九

第三章　三教所依の歴史的證典……一一

第一　其教祖の生涯と教理とに關して吾人の信據をおくに足る可き實傳を收むる經典は何ぞや……一一

第二　是等の諸書果して能く歴史的事相を傳ゆる者として信をおくの價値を存するや否や……一一
一　『ツリピタカ』……一二
二　『コーラン』……一四
三　『バイブル』……一八
第三　耶蘇初め道を釋氏に學ぶ其自家創見の宗教なりと稱する所のもの實は佛者所談の法義を剽竊したるに過ぎずとの臆說二一
第四　耶蘇は足嘗て印度の地を踏まず、耳曾て浮圖氏の說法に觸れざりしとするに果して證ありや……二七
第五　四福音書と佛教文學との關係……二九
第六　福音書所載の記事は一も佛教文學の剽竊を交すべからざるを論す……三〇
第七　福音書中所載の記事は斷じて佛教傳說の剽竊に非らざるを論す……三三

第四章　三祖の小傳

第一　吾人が知り得る三祖師の實傳……三八
一　釋迦……三八
二　馬合默……四七
三　耶蘇……五〇
第二　三祖師の預言者的救世事業に關する歴史的實況……五七
一　釋迦……五七
二　馬合默……六一
三　耶蘇……六四
第三　三教祖師の終焉……七一
一　釋迦の入滅……七一
二　馬氏の臨終……七三
三　耶蘇の永眠……七五
第四　三教祖の歴史的性格……七九
一　釋迦の性格……七九
二　馬氏の性格……八二

三　耶蘇の性格……八六
第五　耶蘇を以て人類社界の模範唯一眞實の救濟者たりと爲す果して當を得たるか……八九

第五章　三教祖宣揚の教義と之より生ずる道德的結果……九一

第一　三教は各由來根源の母教を有す……九一
第二　各源教の教義一班……九一
一　婆羅門教……九一
二　回々教所出の本地……九五
三　基督教の母教……九五
第三　三教交互の關係……九七
第四　馬氏の耶蘇觀……九七
第五　三教所立の根本義諦……九九
一　佛教教義の要點……九九
二　回教の重要義……一〇一
三　基督教の骨髓……一〇一
第六　佛陀は何故に神を說かざりしか……一〇二
第七　馬耶兩祖師の神觀異同……一〇四
第八　斯の如き無上者の觀念が神人感應の宗教的意識に及ぼす影響……一〇六
第九　三教祖の罪惡觀……一一五
第十　三教祖の救濟思想……一二一
第十一　三教祖の來生觀……一二七
第十二　三祖所望の最大幸福……一三一
第十三　最高の幸福を獲得するの道……一三二
第十四　三教教徒の德性に及ぼせる祖教義の影響……一三二
一　佛教徒の道德……一三二
二　回教の教義と其道德……一三八
三　基督教と道德……一四二
第十五　三教の中孰れか最も善く其徒弟を教化する力ありや……一四八

第十六　三教の中孰れか是れ最勝至善の宗教たる可き……一五〇
第十七　三教々相の變遷……一五一
第十八　三教中孰れか最後の勝利者なる可き……一五四

三大世界教目次終

三大世界教

獨逸　ロバルト、フアルケ氏原著
日本　青木律彦　飜譯

第一章　緒言

第一、地球上最も廣く流演瀰布する宗教は何ぞや

曾て惟ふ五大洲の中、邦として教法を有せざるの土なく、民として神靈に事へざるの族なし、故を以て宗教星羅、普く法界に散周す、千門の慈日遠く連陸の邊土を照らし、萬派の法水流れて隔海の群生を潤はす、其數蓋し枚舉に遑あらずと雖も就中最も廣く傳通流行する者に三教あり、三教とは曰く佛教、回々教、及び基督教即ち是れ也

一、佛教

鹿野苑裏の清泉漸く東流して震旦に入り、又注いで日域に至り其化澤の及ぶ處頗る廣き者を佛教となす、而してセイロン、シヤム、ビルマの諸國は今日に至る迄尚ほ

能く立教當初の原形を保存するが故に、苟くも釋氏が說法の原始的教相を知らんと欲する者は須らく此等諸國の所傳に就て研究する處あるを要す、西藏、蒙古等の國に行はるゝ彼の『ダライラマ』教も亦實に佛教の變形したる者に外ならず、所謂『ダライラマ』は『僧』と『海』との二字より形成す、蓋し『僧は是れ權勢威嚴の海』との義也、其他支那の如き日本の如き所謂大乘の教法盛んに弘通すと雖も而かも之を以て教祖の眞意を傳ゆる者となすは過ち也、或は儒と混し、道と化し、はた神道と兩部合體して第二、若くは第三の法門を形成するに至れるもの、固より斷じて釋尊所說の宗教に非ざる也、朝に孔子の廟に詣する者にして暮に如來の堂に謁するものあるを見ても亦以て其が自ら佛教に異なる特殊の性質を具ふる者たるを知るに足らむ、事狀既に斯の如くなるか故に純然たる佛徒の數を精細に統計せむとするは固より容易の業に非ざる也、チー、ダブリユー、リス、デビッツ氏は其數を五億萬人即ち世界人口の三分一と爲せども、之に反してモニーヤ、ウイルヤム氏の如きは僅々一千萬を出でざる可しと爲すが如き、何ぞ其差の甚だしきや、是やがて佛徒計算の至難たるを示すもの也

二、回々教

回々教、即ち『イスラム』はトルコ帝國を中心としてアラビヤ、パレスタイン、シリヤ、小亞細亞、ペルシヤ、印度、エジプト、及び中北アフリカ等の諸國に傳播して其信徒殆んど二億の上に出づるの大宗教なり、

三、基督教

基督教は彼のトルコ帝國を除くの外全歐及び兩米の國土を以て化力能達の領地となせり、啻に歐米の二方に限らず世界各處、其佛教國たり、回教國たるとに關はらず、はた、言語風俗を同じうせざる絶域と雖も未だ嘗て多少歸廻の徒を有せずんば非ざる也、佛國の統計學者フォルニー氏の所表に從へば去る一千九百年の年末に於ける基督教徒の現在數は實に五億五千五百萬なりしと云へり、此統計表をして大差なからしめば、其信徒者を有するの點に於ては正さに基督教を以て第一位に置かざる可からず、過ぐる一世紀の間、新舊兩教の宣教師によりて改宗せしめられたる異教者の數は實に無量七百萬人の多きに達したりき、之を基督教の進取的元氣あるに比すれば他の二大宗教の傳道的熱神は寧ろ皆無なりと云ふも敢て過言に非ざる也、其領土の著しき擴張を見ざるも亦怪しむに足らず、佛徒が教祖の遺訓を將て飛錫東西に教化を試みたりしは既に上古の事に屬す、爾來涅槃の福音を以

て進歩開明の國民間に布かんと欲するものあるを聞かず、今日にありては其形勢は僅かに既得の地歩を保全せんと勤むるに止るのみならず、更らに往々識者をして其信仰の根蔕の漸く動搖するものあらざるやを疑はしむるに至れり、之れに反して回教は尚多少の元氣を有するが如し、近時アフリカ内部の一種族に對して傳道の功果を收め得たりと傳へらる、而かも異教より『イスラム』に轉宗するの方法は最も簡單にして必ずしも復雜多樣の威儀をもはた精神の革新變更をも要せず、只アラー大神の外に禮拜崇敬す可き者なく、馬哈默は即ち其預言者なりとの信文を暗記して之を口誦し、且つ二三の儀式を守れば足るを以て其改宗は又困難の業に非ざる也、基督教其傳道を回教國に試むる茲に年ありと雖も未だ何等の功果を見ず、又以て其信城の堅固彼の佛教の比に非さるを知るに足らむ、

以上の三者や實に世界現在の大法統なり、各自所立の教義を以て天下の至理悉く此の一教に在りと爲す、而かも天下の至理豈三あらんや溪澗河水に合し、河水遂に海に入る、溪澗と河川と暫く名狀を異にすと雖も海に入れば即ち兩ながら亡ぶ、三教の至理亦斯の如し、他の二者は遂に彼の一教に歸し名形長へに亡びざる可らず、然り而して孰れか果して能く其一教たる可き、是れ長時の理爭法戰の後に非ざればば知る可らず、河水は溪流を亡ぼし、大洋は河水を呑む、宗教の野も亦生存競爭の戰場たり、優勝劣敗の數、適者生存の理は固より將さに免かる可らざる也、嗚呼三教の内孰れか能く遂に天下を一統するの優適者たり、無別大歸の眞如海たるを得ん、古人の曰く、眞理は最後の勝利者たりと、

第二、孰れか是れ三中の最勝教

未だ其眞相の一班をも究めずして既に先づ之が優劣の解決を與へんとせば人誰か其大早計を譏らざらんや、然り吾人は敢て茲に何等の斷案をも提出せんと欲する者に非ず、斯の如きは之を遂章順次の論證に讓りて今は只僅かに其斷案に到達する方法に就て概見を述べんと欲す、

吾人一度批評の眼を以て三教現在の狀態を通觀する時は、其教義上、其組織上、秀點長所の少からざるあると共に弊害の常に之と相伴ふものあるを發見せずんばあらざる也、之を例せば基督教の如き、宗派百裂、路衢紛然として嘗て統一ある事なし、斯の如きは固より完全の宗教と稱す可きに非ず、隨て對比の標準と爲すに足らざる也、彼の二教にありても亦然り、源流既に遠くして末派百分、種々の異端相混じて

眞實の法水又見るによしなきものあり、茲に於てか吾人の取る可き方法は只一あるのみ、即ち眞理の所示を標準として事相の判斷を爲す是れなり、抑も耶蘇創設垂示の宗教を知らんと要せば、之を羅馬の舊教に求めず、却て之を福音主義の教會に就て求めざる可らず、蓋し所謂福音主義の教會は前者よりも一層能く教祖の教勅を奉ずる原始的基督教なるを以てなり、

人若し三教中孰れか是れ最勝優等の宗旨なる乎の問題を解決せんと欲するも、三教今日の現狀を比較するの却て不可なる所以は右に述べたる處によりて明か也、故に吾人は三教現在の狀況に就て其長短を比較するの愚を學ばず、去て他の一法によりて其優劣の斷案地に到達せんと欲する者也、其所謂一法とは何ぞや、曰く

一、三教開祖師の優劣如何、

二、三教のうち孰れか最も多く人類社會に感化の活力を及ぼせるか、

三、三教のうち孰れが既に人類の世界的歸回を有するや、

若し夫れ三教祖師の一にして、其純潔圓滿の智德と、其自成化他の道品とを以て一日の長能く他の二者を凌ぐものあらば、其教義も亦自ら秀逸なるものたるは寧ろ自然の數に非ずや、且つ夫れ宗教の善惡如何はそが影響によりて現れ來る感應の善惡によりて判斷するを得る者なるか故に、若し歷史上、はた日常の經驗上、一教の力能く個人を教育して其品性を高め、國民を善導して其文化を助くる事他の二者より多きに居るを證せば是れ三中最勝の法たるものに非ずや、若し又其一教が萬人平等に同一不二の慰籍と平安とを與へ、總ての階級、總ての事情、及び境遇等の異同、政體團體の差別に關はらず、如何なる組織の社會にも、如何なる種類の文化にも嘗て凝滯する處なく、能く之に適合して而かも其本來の面目を失はず、益々其光輝を發揮して止まざる事諸餘の宗旨の企て及ぶ處に非ずんば是れ實に天下無二の法門たる可し、而して其法門の價値は諸他の教派が世道人心に向て比較的少量の利益を與ふる者たり、はた寧ろ危險の性質を帶ぶるものたる事の證明せらるゝに從ひて多々益々其光榮と尊貴とを增加するものたる也、

第三、天下の信仰は遂に能く一法に歸向す可き者なる乎

天下の大道は其至理一にして二三ある事なし、萬衆の信仰も亦遂に一實の眞觀に歸入せざる可らず、果して然らば三教豈久しく鼎立せん哉、彼の一實の眞觀を有す

る者遂に彼の二教を壓倒して法界を其教權の下に統一するに至るや必す、而して彼の三中孰れか得て此世界統一的大宗教かるに堪ゆべき、知らんと要せば各教開基當初の源頭に溯りて其由來の本末を調査せざる可らず、人若し一方に偏せざるの眼孔を將て過去歴史の大舞臺に後先出現したる三祖師の實歴と開教當時の世態とを比較對照し來らば其孰れが長にして孰れが短、孰れか優にして孰れか劣なるを知る又難からざる可し、

請ふ吾人をして公平無私の見地に立脚し、不偏不黨の批評眼を以て三教祖師の人格道品と及び彼等が歴史上、實際上社會人心の上に及ぼしたる感化影響の如何に就き徐々考究する處あらしめよ、

第二章　教祖の名號並に開教の年時

第一、佛教の肇祖釋迦文佛

佛教の遠祖は中天竺摩訶陀國迦比羅城主淨飯(スドダナ)大王の太子シッタルタ(悉達多)にして母を摩耶夫人とす、釋迦は其種族の名なり、彼れ其教法を開基するの後自ら稱して佛陀と云ふ、眞實の妙理に通達覺了する者なりとの義也、又之を圓覺者といふ、佛陀の外に尚多くの稱號あり、試みに其二三を擧げんか、曰く釋迦牟尼(釋迦種族中の聖者なりとの義)曰く「ゴータマ」(瞿曇)大隱士なり、曰く「タターガタ」(如來)涅槃證了者を意味す、曰く「シュラマナ」(沙門)は守獨者との義を有す、以下は略して茲に贅せず、

彼の誕生は紀元前五百六十年にして寳算八十、同紀元四百八十年に至りて入滅す、學者時に其生誕を紀元前七百四十二年と爲すものあれども正確ならず、日本の佛徒が教祖の在世時を紀元前一千〇二十七年より同九百八十七年と爲すは固より非なり、

第二、回教の開祖馬哈默

「イスラム」教の開祖は處の名門顯地たるコリーシ家に生る、族は尊貴なるも家固と貧、父をアブド、アラーと云ひ母をアミナと稱せり、教祖奔つてメヂナの地に退くや自ら稱してモハメット(馬吟默)と云ふ、蓋し賞讃嘆美せらるゝ者、尊崇畏敬を受くる者なりとの義なり、彼の在世は實に西歴五百七十一年より六百三十二年に至る一還曆の間なりとす、

第三、基教の始祖耶蘇基督

基督教の始祖はナザレの耶蘇なる者、父は木匠ヨセフにして、母の名はマリヤなり、時人彼を推敬し稱して『メシヤ』と呼べり『キリスト』は之をグリシヤの語に飜したる也、キリスト之を和譯すれば受膏者といふ王者若しくは救世主との義なり、聖書のうち時に彼を呼ぶに『神の子』を以てする事あるを見る是れ亦時人が其德の天品たるを感美して之に呈したるの尊號なり而かも彼れ辭退して此に居らず、却て自稱して『人の子』と云へり、

彼の在世時も亦其正鵠を得る頗る難し、然れど西暦紀元前四年若しくは五年に生れ、紀元後三十年に於て昇天したりと爲す蓋し當らずと雖も遠からざるの年次たらむか、

三教の祖師等しく生を亞細亞洲中に托し、而して上下相去る各五百年なりしは又一奇と云ふ可きか、彼等が搖籃を懸けたるの地も亦同しく紅塵萬丈の都門に非ずして却て幽荒邊鄙の僻地なりし也、ヒマラヤ山の南麓ヒンドスタンの迦比羅バスツーに圓覺正念の妙花は蕾み、パレスタインの北方ガリラヤの邊邑ナザレの郷に救世福音の呱聲は響きぬ、爾來桑海幾度か變遷して其生れたるの家は固より其郷邑の跡だに亦尋ぬるに由しなし、啻に其郷地の尋ぬ可らざるのみならず星移り物

變るに從ひ彼等が人品性格の眞相も亦種々怪誕なる傳說の荆棘雜草を以て之を蓋ひ隱すに至れり、只浮雲百重の上を遶觀超望する底の巨眼を具する者にして初めて能く歷史的眞相の明月を看取し得可き也、

第三章　三教所依の歷史的證典

第一、其教祖の生涯と教理とに關して吾人の信據をれくに足る可き實傳を收むる經典は何ぞや

其信徒が開教當初の時代より相繼ぎ相承けて各自信仰の源泉教義の所依として尊重する處の經典は三教等しく之を保持せり、佛にありては之を『ツリピタカ』と云ふ、漢譯して三藏經是れなり、回教徒の神典之を『コーラン』と稱す『必讀之書』との義なり、『バイブル』は單に『書籍』を意味し、基督教徒の寶典たり、

第二、是等の諸書果して能く歷史的事相を傳ゆる者として信をれくの價値を有するや否や

蓋し三教の依經皆其源を同じく宗祖師の在世時若しくは其死後久しからざる時

に發し、尊崇恭敬次々相傳へて今日に至れる者なり、故に開敎當時の事情と敎祖所垂の敎相とを知らんと欲す、須らく此等の諸書によらざる可らず、

一、佛書

釋尊入滅の後八十年の頃既に其門徒にして敎祖一代の言行を筆述せんと企つる者ありしは歴史の證する處なり、然れども其敎化事跡の大要部が書冊文字により て世間に流布するに至りしは實に降て數百年の後にありとす、其間は單に耳承口傳によりてのみ保持せられたり、其記憶の力も亦慨く可きからずや、後敎祖金口の說法に關して門内異義競ひ起り、黨を作り派を立て紛々たる事亂麻の如くなるに及び、時の國君にして佛法歸依の善男子なる大王アショカ、源頭彌遠くして末流の分派益多く、大法遂に滅して衆歸着の津を失ふに至らんを憂ひ、敕して多數の聖衆を招集し、其葉を精撰して金文を筆寫せしむ、口授無形の佛法は茲に初めて成文の經卷となれり、三藏經典の結集即ちこれ也、此一切經之を分つて三部と爲す、曰く經、律、論、各浩瀚を極む其前の一部は原始佛敎の敎相と事歴とを傳ゆる最古最良の書類にして獅子吼音の遺響多く此中に存す、第二の律部は沙門の戒行威儀の綱目を擧示し、最後の論部は斯敎所立根本の哲學特とに世界の歸趣極地に關する論議なり而かも此後の二部が前一部より後代の發達に出でたる者なる事は又蓋ふ可らざる事實なりとす、此等の經卷は、之を記述するに『サンスクリット』語流の一派たる『梵語』『パリ』を以てせり、然れど『パリ』は必ずしも釋尊金口の使用語に非ず、只之を以て釋氏所演の金言を飜譯したるに過ぎず、然らば釋氏常用の言語は果して何なりしかは吾人遂に之を知る能はざるなり、佛祖金口の說法と其所談の義理とを知らんと欲せば一つに此藏經に依りて覗ふの外別に道なし、藏經所載の文字が確かに佛敎の根本的にして且原始的の敎相を示すものたるや又疑を容れず、而かも是れ只比較的の言のみ、此藏經と雖も亦必しも完全正確の歴史的典據と爲すに足らざるものたる事を忘る可らず、如來が一代に履行せし生活の事跡として傳ふる記事に於ても往々後世の佛敎徒が彼の印度人的空想を恣にして徒らに小說的彩筆を奮ひ、諸多の口碑的奇蹟的傳說に加ふるに更らに誇大の潤飾を以てしたるの跡歴然として爭ふ可らざるものある也、例せば彼の家系に關し、彼が幼時の事跡に關し、特に彼が初發の宗敎的演說等に關して詳細に記述する『ラリタビスタラ』『佛說神通遊戯經』の如き、よし之が藏經中の一卷として數へらるゝに至りしは西暦早くも二十年以前に非ずとするも而かも其内容の傳奇的記事は確かに三藏結集時世間に流

布せし處の傳說と同一のものなりしや必せり、果して然らは三歲結集の諸聖たとへ智慧隨一多聞無雙の賢達なりしとするも此ら傳說の感化を受くる事毫末も是れなかりしとは吾人之を考ふる能はざる也、

二、『コーラン』

『コーラン』は回教の聖經にして其內容は悉く本師馬哈默が自ら著述する處、即ち彼が天帝より直受せしと稱する宣託啓示を口述し、尙書をして筆記せしめしもの也、而かも只其敎訓垂示を錄するに止まり馬氏の行爲に關しては一切之を載する事なし其文體は押韻的にして特とに最古の部に屬するの者の如き之を讀めば殆んど一篇の詩篇を誦するの感あり、

其後彼がメヂナに在るの時に就るものに至りては格調大に亂れ徒らに誇張炯華を事とするも而かも復た詩的の妙味なし、彼れ夙とに自ら其全篇を『スーラ』(章)別せん事を企圖したり然れど必ずしも嚴格なる規律ありて然りしに非ざるが故に往々一章のうち、內容の全く相異なれる別事件を包含するあり、時の後先、事の順序等に付いては一切頓着する處なく、其心地に映し來る影子は黑白相分たず、木頭竹尾錯然として一段の內に混雜せり、朝に一想を構へ、夕に他の事を記入す必ずしも其類を撰ばざりし也、新句又新句、斯の如くにして雜然たるの一章就る、夫れ然り故に此痂たる一大書籍も其內容を以て云ふ時は秩序なく、聯絡なき一大雜記帖たるに過ぎざる也、

西曆六百三十二年馬氏の齡盡きて黃泉に赴くや、此等の默示錄は或は貝葉に、或は白石に或は綿羊駱駝等の革片等の面に書寫したるもの、順序なく、整頓なく、漫然として此偉人が枕邊の文筥中に藏めたりしと云ふ、

彼の繼嗣、アブ、ベクルのカチファテの時に至り、オマルの建議を容れて一篇の謄寫を作らしむ、オマル則ち天下の衆民に告げて曰く『何人にても苟くも無忘眞實に『コラン』の章句若しくは之に類似の敎理を記憶する者あらば速かに表示せよ、當さに之を以て聖經の一節となさんとす』と、天下此敎令に應じ其所知所聞を獻する者四方に滿てり、則ち一尙書として此等雲集の句節、悉く取つて半言一詞も捨てず、或は之を既存の章中に附し、若しくは之が爲め更に一篇の新章を設けて保存せしむ、其結果は遂に同一の事件にして重復するあり、或は前後梧戈するあり、其然らざるも元來亂雜を極むるの經典は更らに一層の複雜を加ふるに至れり、斯の如くして全篇一百十四の章は成り一章にして殆んど二三百の節數を有する者すら之ある也、

而して各章の題目は大抵其章冒頭の文字を以て名とし、時には章中に記載する事件の一片を取て全篇の題目と爲するものある也、

オーマル此法典を將て之を其法嫡オートマンに與ふオートマン在位の時漸く典中難解の章句あるを發見し、部下をして熱心之が改訂に從事せしめ、更らに一新經書を得たり、而かも其新著も尙ほ且つ一個不整頓の者たるを免かれざりき、原本章を分つ年次的なりしに代ゆるに新編に於ては章の後先を定むる之が長短の制によりて之を分てり、即ち長章を以て卷首におき短編は卷尾に附するの法是れなり、世界書類多しと雖も斯の如き法によりて其內容の章別を爲すものは蓋し又其類之れなかるべきか、

然れども『コラン』は天啓の靈經、神聖にして犯す可らざるの法典なり、天帝が親しく教祖の馬氏に託宣附囑する宗教的理義は小大合藏皆て一も漏す處なき無上の妙卷なりとは其教義の示す處なりとす、馬氏は此神託の教義をして更らに尊嚴の威風を保たしめむが爲め、經中の諸事皆天帝發言の所談と爲す、即ち經中の文句は尊者馬氏に非ずして天帝其靈口を開き人世の大事を宣下し、馬氏は只之が即記者たるに過ぎずとなせり、

馬氏の以て完全絕對の妙典と稱する『コラン』も吾人よりして之を見れば又誤謬の點頗る多しとす是れ馬氏が智識の足らざりしによらずんば非ず、例せばアブラハムの子イサクを以てヤコブと爲し、アブラハム、イサクを獻ずるの條を叙するに當りてアブラハム、イスマエルを獻ずと云ひ、聖母マリヤをモーセの妹なりと爲すが如き無智も亦甚だしきものに非ずや、

此の如きの誤謬堆然として累積するあるにも關はらず、其徒弟の眼中に映ずる『コラン』は實に天下萬民の尊崇を受く可き無上の妙典なり、片言双語悉く靈活なる神明の靈息にして一々文々皆天來の神、敕なり、啻に宗教的信念の根據たるのみならず、更らに又一切の科學哲學、法律等百般の絕對的基礎たる也とは其教徒が平常揚言して憚らざる所なりとす、信徒の中偶ま之が批評的考窮を企つる者あれば直ちに之を禁じ加ふるに嚴罰を以てして一歩も假す處なし、然り『コラン』は神聖にして犯す可らざる眞言秘密の妙經なり、信徒は只戰々兢々として恰かも奴隷の嚴主に於ける如く其威勢に屈從し、其文句を棒讀的に暗誦して以て祈禱の用に宛つるを得ば即ち其能事了はれりとなさゞる可らず、

若し夫れ教祖の實傳に就ては爾來幾多回教神學者の手になるの書籍汗牛充棟も

當ならずと雖も而かも等しく荒誕不稽、徒らに空想を搆へて嘗て眞實の傳記を爲すものあるなし從て歴史的據典と爲すに足るものあるなし、

三、『バイブル』

『バイブル』は基督教徒の聖典にして通常新舊の兩約書を合はせ稱するの名目なり、然れど舊約書は直接基督教所產の書籍に非ず、基督教徒の聖書は單に新約全書をのみ指すを可とす特とに況んや此編に於て吾人の目的とする所のもの耶蘇の事跡に就て考究する材料を得るにあり、而して其史料として舊約は嘗て與からざるに於てをや、

新約全書は基督降世後五十年乃至百年内外にして完結したるの書籍なり、斯書が開教時を去る遠からざる原始期代に於て、特とに親しく教祖演說の法筵に侍したりし者の手になれりし部分多きに居る事は曾に基教神學者の主張する所たるのみならず、其弘通すると否とには敢て痛痒を感せざる學者、若しくは更らに却て基督教を非定する學者と雖も亦等しく其好史料たるを是認する所なり、之が完結を告ぐるに至りしは紀元後百年の上に出ると雖も其大部分は確かに半世紀以内に完成せられ、基教なる一新宗教の開基を目擊したる人が手自ら之を筆證する所あるも亦明白なりとす、彼の破耶蘇教學者として有名なる佛のレナンの如きも新約全書を以て「基督教の初代及び第二期時頭の事蹟と傳說とを集錄したる者也」云々と云ひしを見るも亦以て之が史料としての價値を知るべきなり、

彼の一時世人を驚倒したる奇說「四福音書は紀元後第三世紀の所產」なり云云は最も非科學的の考證にして今日の學者に之を信ずる者は又一人も之あらず、

教祖の死後殆んど三十年の間、耶蘇の言行は單に記憶として信徒の間に存したりき、而かも祖師に親侍聽法したりしもの曉星の如く漸く減じ、信隨歸廻の徒はた益々增加するに當り教祖の言行のうち重要の點を摘撰し、記錄して以て之を四方に配布するの輿望と必要とに迫まらるゝに至りたり、使徒ポーロ先づ宗教的消息の文を草し、之を諸所の教會に送り、同マタイ耶蘇の家語を集錄して『ロギヤ』(法語)と云ふ實に紀元六十乃至七十年の事なりとす、他の操筆者此『ロギヤ』に附加するに祖師の行事に關して信徒間に傳はる口碑を以てし、一新書を作り馬太の名を以て之れを公行せり、今の馬太傳即ち是れなり、此傳の一書がエルサレム城の陷落を去る前後久しからずして成りし書なる事は別に喋々を要せざる也而してエルサレムの落城は實に紀元七十年の事とおす、馬太を以て其福音書の卷頭に附する者は必す

しも「馬太の著」を意味するに非ずして實は「馬太の所證によりて編したる福音の書」との義たる也、

馬太傳と相前後して使徒ペテロの友人馬可、保羅の同僚たるルカ、各福音書の著あり、之によりて之を見れば、新約全書中最初の三卷は實に西歷八十年即ち耶蘇の死後僅かに五十年内外にして既に業に吾人が今日見る如き體裁と内容とを有する書冊として時人の間に流布したりし也、

新約の第四卷、即ちヨハネの福音書に關しては學者間未だ一定の考證なし、然れども假りに此書をして第二世紀中の著作にかゝる者たらしむるも而かも其筆者は必ずや耶蘇の門弟ヨハネに由來する傳說を基礎として之を祖述したる者たるべきを以てそが自ら使徒的性質を帶び、從て又歷史的事實の影象を寫するや固より言を俟たずして明らかなり、

近時斯學界の泰斗として有名なるベルリン大學の教授ハルナック博士の如きは、實に吾人の說を最も能く證明するの意見を抱持する者也、博士謂へらく「福音書は其内容の根本義に於てはた其叙事の歷史的價値に於て最も信をおくに足る最古唯一の基督教文學也」と、茲に於てか吾人は左の如く斷言することを得可し曰く、新約全書は教祖の死を去る甚だ遠からざるの時に於て成りたりし者なるが故に、教祖の人格と其開教當時の事情とを研究するに當り唯一の依典として最も信據するに足るものなりと、然り教祖師の人格を覗ふ可き歷史的典籍は此一書をおいて他に之あらざる也、

第三、耶蘇初め道を釋氏に學ぶ、其自家創見の宗教なりと稱する處のものの實は佛者所談の法義を剽竊したるに過ぎずとの憶說

耶蘇は夙とに佛陀の教を知り其徒に就て其道を學得會了したるの人なり、基督教の教義中自ら佛教的臭味を帶ぶる者あるは一に之が爲めのみとは嘗て一派の學者によりて唱道せられし所なり、泰西の論客は暫らくおきて曰はず之を日本人中に求むるに例せば鈴木某の如く然り、彼揚言して曰く

想ふにイエス若しくは初代の基教徒のうち多少佛教の感化を蒙りしものありたるや疑ひ無し、蓋し基教の本土猶太亞の地方に佛教宣教者が其足跡を印し、且つ熱心傳道的活動を試みたりし形跡を見るは實に耶蘇教開基以前の事に屬す

るを以てなり……予は此に於てか固く確信せざるを得ず、則ち基督教は實に猶太亞、グリシヤ、羅馬等諸國の傳說を綽とし、印度東來の佛法を經とし、以て粲然灼然たる宗教の錦繡を織り出だせしものなる事を、而かも其中自ら非佛教的性質を具するが如き觀あるは之を異方の外國に移植するに當り、其地味と氣候とに適合せしめんと欲して故らに變形したるに過ぎず云云(オプンコールト雜誌、千九百年第十四卷五十三頁參照)

又他に一例あり、寶永五年新井白石時の幕府の命をうけ、當時初めて渡來せし天主教の僧シドッチを糾問調査するや、則ち曰く、

按ずるに西人其法を說く所、荒誕淺陋辨ずるにも足らず、しかりと雖も其甚だしき者の如きは、また辨せざる事を得可らず、まづ其番語稱して『デウス』といふものを漢に飜して天主とす、これ彼と此と聲音相近きにとれる事、たとへば『エイズス』譯して耶蘇(ヒーズス)とするが如し、番字もと讀む可らず漢字を假りて其聲音をうつせるのみ、其義番語にありて漢語にはあらず、然るに明季の諸儒、利瑪竇初に天主の字を借り用ひて其番語を譯しつゐに其說を附會して經にいはゆる上帝これ也とす、諸儒其說に惑ひて其非を覺らずもし『デウス』譯して天主といふ、即ちこれ天の主宰、經

にいはゆる上帝なるべくは、エイズス譯して耶蘇といふ、耶蘇また何の義かあるべき、(此事我國にして日の神の御事を漢字を得るに及び大日如來(オホヒルメ)これなりといふ說の如し)のごときは、善書を讀むものゝ自ら知れる所なれば、今此に論ずる事を待たず、もし天主教法の字、梵典に出し所といはむには、我もとより知れる所にあらず(天主教法の字は富勝王經に出づ)今西人の說をきくに、番語デウスといふは、此に能造之主といふがごとく、だゞ其天地萬物を搬造れるものをさしいふ也、天地萬物自ら成る事なし、必ずこれを造れるものゝありといふ說のごとき、もし其說のごとくならむには、デウスまた何ものゝ造るによりて、天地未だあらざる時には生れぬらむ、デウスもしよく自ら生れたらむには、なぜか天地もまた自ら成らざらむ、又天地いまだ成らざる時、まづ善人のために天堂を造るの說、天地もいまだ生せずして、斯人すでに善惡の相わかれしも心得ず、凡そ其天地人物の始より、天堂地獄の說に至るまで、皆これ佛氏の說によりて、其說をつくれる所なれば、これ又ことゝ〳〵く論辨するに及ぶべからず(まづハライソを作るといふは、劫初の天地、風吹水減じて、次第に沐な結び、化して天宮となるといふがごとく、アンセルスの說は、光音天人の事にして、マサンを食ひしといふ事は、地味を食ひて、體重く、光滅び、また粳米を食ひて、男女の形わかれしといふに似たり)其天戒を破りしもの、罪大にして自贖ふべからずデウスこれをあはれむがために自ら誓ひて、三千年の後

に、エイズスと生れ、それに代りて、其罪を贖へりといふ説のごとき、いかむぞ、嬰兒の語に似たる、方サニ今刑をつかさどれるもの、猶よく其情のあはれむべきものを議して、其罪を赦し宥ダむ、其天戒といふものも、デウス自ら誡しところのごときもこれをして果を食ふことなからむのみ、あやまちてこれを食はむ罪、いかむぞ其食ひしもの、自ら贖ふ事あたはずして、其獄決せざる事三千餘年を經て、デウスそれに代りて、其罪をうくるにはおよぶべき、たとひデウスはアダンがために其罪をうくるとも、これを礫罪せし所の者、これまた誰に代りてか、つゐに其國を滅すには至りぬらむ、又デウス盡世界の人を溺殺し、ひとり其教にしたがふもの、海中に路開け、また其徇せし所の船、大水に漂ひ來りし所の螺殼の類、猶今にありと云ふ説の如き、デウス稱してみづからよく天地人物を生じ養ひて、大公の父無上の君といふ、さらばなぜ其人をして皆ことゞく善ならしめ、皆ことゞく其教にしたがはしむる事あたはずして、盡世界の人をしてことゞく皆絶滅せしむるには至れるにや、たとひまたデウスといへども、人をして皆ことゞく善ならしむる事あたはず、皆ことゞく教ふる事あたはずば、いかむぞまた天地能造の主とは稱すべき、また至愚にして、其教ある事をしらざるもの、何の罪かは、深く

咎むべき、しかるをつゐに盡世界の人をして、ことゞく皆絶滅に至らしむる事いかむぞまた、これを生じこれを養ふ大父大君とは稱すべきまた怪石の船の形に似たる、斷崖に螺の殼ある、いづれの地にかあかるべき、我國のある所もまたしかり、いかむぞ又デウスの事にあづかるべき其十誡といふもの、また佛氏の説によりて、たゞその他犯の戒を、二條にわかち出す、今其説をとふに、我教化の主より始て、凡ゞ其徒弟たるものゝごときは、ことゞく皆女子に近く事をゆるさず其他曾貴の人といへども、一妻の外に、他犯の事ある事なし、此故は、夫婦相和かざるは、必ず其邪淫による、世間父ありて、其世母の故に、其子をにくむあり、子ありて、其生母の故に、父を怨むるあり、其母を同じくするものは相愛し、其母を異にするものは相憎む、父子兄弟相和らがざるも、もとゝして他犯による、これによりて、其禁特に重しといふ、又古より以來、彼方諸國戰亂の事をきくに、皆これ其嗣絶ふるが故によれりといふ、其流弊のこゝに至れるも、またあはれむべし、エイズス降生之初種々瑞應あり、自らデウスと稱せしといふの類、釋迦文生れて種々瑞應を現じ、自ら稱して天中天といひし事のごとく、其礫殺せられし後に蘇生して、其母にみえしといふの類小瑠璃王賊せられ、木その身を貫き、立てゝ以て標となす、大瑠璃王その

血をとりて、人となせしといひし事のごとくシルウエステル聖水を以て、國君の頂に灌しは、大梵天王、四大海水を以て、其太子の頂上に灌きし事のごとく其君ローマンを施入して、精舍を建てしといふ類は餅沙王、迦蘭陀竹園を施して、僧伽藍摩となせし事のごとく、すべてこれらの說、番語ことゞくに通曉すべからずといへども、大約その敎の由來る所、西天浮圖の說に出づ、陰かに其粃糠を竊むの說、鐘子が言ひし所、また我を欺かず、即今其說によりて、ヲヽランド鏤板の地圖に據るに、そのデウス降生の地ジユデヨラのごときは西印度の地方を相去る事遠からず、又其說にエイズスいまだ生れざる以前、ジテヨラのみ、デウスの敎ある事をしる、其他はことゞく皆佛敎を尊信したりといふ、さらば西大浮圖の說、其地方に行はれし事、エイズスが法のさきにあり今エイズスが法をきくに、造像あり、受戒あり、灌頂あり、誦經あり、念珠あり、天堂地獄輪廻報應の說ある事、佛氏の言に相似ずといふ事なく、其淺陋の甚しきに至りては、同日の論とはなすべからず明季の人、其國の滅びし故を論せしに、天主の敎法、其一ッに居れり我國嚴に其敎を禁せられし事、過防にはあらず、幾を知るものにあらざらんには、誰かはこれをよくすべき、たゞ其夷を以て夷を治む、時の權宜には出ぬれども、虎をすゝめて狼を

驅る、またその畏なきにはあらず云云(西洋紀聞)

第四、耶蘇は足嘗て印度の地を踏まず耳嘗て浮圖氏の說法に觸れざりしとするに果して證ありや

世又前述の如き憶說に勝りて非科學的不合理の愚論あらむや、新約の全書一字一句と雖も嘗て佛陀の感化を受けてなりしものは非ざる也、管に聖書に佛化の見る可らざるのみならず、初代敎會の師父等にして佛敎なる宗敎の存在する事すら知悉せし者は一も是れなかりし也、『佛陀』の一語、之を知る者は初二世紀間基督敎文學者の中一人も之ある事なし、此言を使用したるは實に紀元二百二十年の頃アレキサンドリヤ敎會の師父クレメンスを以て嚆矢と爲す可し、彼謂へらく『瞿曇は一大宗敎を開基したる東方の聖人にして智德圓滿の相を具足す、徒弟其秀逸絕倫の道品に隨喜して崇敬供養殆んど神の如くせり』云云と然れども、クレメンス以前特とに敎祖の在世時若しくは新約全書結集の當時に生息せし敎徒は印度の大哲に就て毫末の智識をも有せず況んや其感化を受くるに於てをや、

加之佛の敎義とキリストの宗旨とは互に相衝突枘戈するもの也、其立敎根本の理

義に於て兩々氷炭相容れざる相違あるの點を見ても耶蘇が其教法を傳道するに當りて故らに印度の哲人瑆曇の哲學を加味するの要ありしとは何如にしても思はれざる也、佛は其信仰に神の觀念なく寧ろ無神の境地に一宗を建立したるものの而して耶蘇は然らず其立教の根底として天父存在の信念を勸めたり、佛は永遠無極の希望を非定し人の靈魂は遂に大忘無想の寂滅に歸す可きを教へ耶蘇は却て天上無究の圓滿淨刹あるを說けり佛は生死の苦海を厭ひ轉生輪廻の絆縛を脫するに非ざれば無生の眞趣を證する能はずと爲せども耶は却て罪惡の地を離れて善道に依り脩德以て此生を終らば、現生は固より未來と雖も永久不斷の樂刹に入るの權理あるものとなせり、佛は下劣鄙賤の身、例せば奴隸兵士等の入門を抗みたりしと雖も耶蘇は即ち萬民の爲めに嘗て偏頗の差別を立てず、廣く平等の門戸を開けり、一は死を厭ひて生を憎まし め他は生を望んで死を恐れざらしむ、一は暗黑を厭ふて虛無の空裏に消へさらしめ、他は光明を信じて實在の眞境に昇らしむ、如上の相違誰か之を少小なりと云はんや、況んや耶蘇を以て其幼時印度に至り佛者の教育を受けたりと爲すが如き固より無根據の憶測のみ、若し假りに此說をして眞實ならしめんか、其立教根本の教義中少くとも二三の類似點を發見する實に自

然の數たるへきを、其然らざる所以のものは是れ豈耶蘇入竺の歷史的事實なかりしは勿論其在世時中未だ嘗て一度も佛陀の名を耳にせざりしを證する者にあらずして果して何ぞや

第五、耶蘇が天竺の地と佛陀の宗教とを知らざりしは明らかなり、而かも果して四福音書と佛教文學との間には嘗て何等の關係もこれなしとするを得るか、

耶蘇氏一代の事跡に關して俗間の口碑に存する傳說が釋迦色身一期の事蹟に刻似するものあるの故を以て、論者のうち時に兩者の間に歷史上文學的に交互干涉の消息なくんばあらざる所以を云はんと欲する者あり是れ敢て不自然の事に非ず、彼の教授サイデル博士の如き然り、教授其著書に於て數ば之が學術的證明を與へんと欲し謂へらく、

福音書編纂の時に當りて之が史料據材としたるものの內、所謂『法語』(耶蘇の門弟マタイが其亡師の集めて教主の法話と名けたりし一書)、及び『ウルマルクス』(原形

馬可福音書)と稱する歴史的文書の二種以外更らに又一種の材料ありて福音記者の採用する所となれり、是れ豈に著者の名を失したる逸題の佛教文學書類の一たるおきを保す可けんや、福音記者其特有の思想と筆法とを以て釋氏の事歴を飜案し直ちに教祖の蹤に附會して遂に同衣同冠の二聖者を東西兩土に見るの奇觀を呈するに至りたるなり、只此の材料今は全く散逸して又見るを得ざるに至りしを遺憾とするのみ云云

教授をして斯の如き假定の説を爲さしむるに至りしものは、兩祖師の實歴として傳へらるるの口碑が兩々相類似し、はた往々期せずして互に相符合するものあるに歸因せすんばあらず、而かも其所謂類似の點と暗合の點とが果して皮相的ならずして能く精神的はた實質的なる可きや否や、請ふ吾人をして少しく此一點に付て考究する處あらしめよ

第六、福音書所載の記事は一も佛教文學の剽竊を交しべからざるを論ず

サイデル博士一流の學者が夙とに唱道したりし如く福音書所載の記事中には佛書所傳の釋氏の事跡と二者甚だしく其趣きを同うするものありて存する也、而して其符合の著しきや彼の二百年前の儒者新井白石をしても亦易すく之を認識するを得せしめたるを見ても知るべし否白石にして尚深く考究探索する所ありしならば更らに一層多くの類似點あるを發見して益々其持説の確證とおしたりしや論なく啻にエイズス降誕の初種々瑞應あり自ら『デウス』と稱せしと云ふの類釋迦文生れて種々瑞應を現じ自ら稱して天中天と云ひし事の如く、其磔殺せられし後に蘇生して其母にみえしといふの類、小猶曇賊せられ木その身を貫ぬき立てて以て標となす、大猶曇その血をとりて人となせしと云ひし事の如く『云云の言にとゞまらざりしや必せり、請ふ少しく其類似の點を説かん

佛書に八相成道なるものあり其第一に曰く、釋迦過去世に迦葉佛に値ひ其弟子となりて人間生を離れ即ち兜率天に生じて百劫の間諸の相好を種へ衆生の根熟する時を待てまた兜率より中天竺摩訶陀國の淨飯王宮に生る、と是れ豈に福音書中耶蘇降誕の次第に似たらずや其生を摩耶夫人の母胎に托するといふ者、處女マリヤ受胎の談と似たらずや、釋尊誕生の時諸天歡喜して空中に奏樂散華するは、耶蘇の降臨を雲漢に祝する天使神軍の讃歌にあらずや『バラモン』の僧アシタ仙人が悉

多太子の未來を相するは、長老シメオンが赤子耶蘇を抱いて宮中に爲せし預言に非すや、習曇の少時罪惡の塵に染まざりしを云へば耶蘇も亦然りし也、釋迦牟尼見失はれて踪跡を失し後直ちに發見せられし幼年の事跡を有すれば、耶蘇亦幼時父母に伴はれて神殿に參詣し歸途群衆の中に混雜して暫く見へざりしと云ふの條と相同じ釋尊尼連禪河の邊に至りて菩提の樹下に端座し思惟六年艱苦具さに嘗む、一夜忽焉として無上大覺の道を成す、而かも直ちに出て〻傳道の事に從はず、尙禪定三昧の座にあり、謂へらく我何等の法を說てか當さに衆生を度す可きと、此念を作して默止する事三七日なりき、是れ豈に耶蘇がヨルダン河畔に洗禮を受け、天音其神品を證して附囑するに生靈救濟の大任を以てしたるも尙直ちに宗敎的事業に從はず、暫く退いて冥想の野にありしと云ふに相應せずや、世尊成道の後三七日思惟の座にあるや諸の魔兵魔軍競ひ集つて種々の障碍を作す、如來時に大禪定に入て威神力を現じ八千億の魔衆を降して悉く退散せしむるは、耶蘇が受洗の後暫く退いて五八の晝夜冥想斷食の野にある時、魔將來て彼を誘ひ、利と欲とを以て其心を魅せんと欲したるも而かも耶蘇金剛の信力と敬虔の赤誠とを以て皆悉く之を退散せしめたると何ぞ夫れ事の相似たるや、十方の諸佛現前して善哉釋迦文第一の道師なりと讃嘆するは、一天之が爲めに開けて「是れ我心にかなふ、我愛子なり、衆生之に就て其敎を聞く可し」との神敕と何ぞ其趣きの相同じきや其他或は門弟を撰拔し之を遣はして傳道せしめ或は無妻孑然、貧困の形相を以て四方に流適し法を說き道を傳へ、善德を修め奇蹟を行ひ、時に病を醫し又時に死を蘇らす、斯の如き者を逐一數へ來らば日もまた足らざらんとす、佛罪障深重の淫婦と語を交へ、之を誨へて成佛せしむれば耶蘇また之と同一の事を爲して信仰の德を勸む耶蘇井邊にありて一女子に法を說けば、佛亦同處に女人を度す、特とに大慈の悲願、一切衆生の苦を拔て、萬民平等の樂を施すを以て開敎終局の目的とするが如き兩々皆て相もとる處なし只何を以て樂とおし、はた何を以て苦となすか、換言すれば其所謂拔苦與樂の救濟とは抑も何を意味するかの問題に至りて大に其趣を異にするのみそは後章說く處に於て自ら詳らかなるを得ん

第七、福音書中所載の記事は斷じて佛敎傳說の剽竊にあらざるを論ず、

福音書完結の時代、イタリヤと印度との間に通商貿易の關係は多少存在し居たり

しと雖も而かも羅馬の文學者中天竺の文化、特とに佛教に關する智識を有する者は殆んど之れなかりし也、當時文明の中心碩學の叢淵たりし羅馬府に於てすら印度の文物に關する智識斯の如く夫れ幼稚なり、況んやパレスタインの邊鄙に居住せし漁夫木工の輩に於てをや、其智識の度推して之を知るに難からず、天竺に於ける佛傳に關する口碑の所談豈彼等の得て知了する處ならむや、假令萬一多少の事を傳聞する處ありたりしとするも其が進歩したる羅馬の學者に比して自ら數等の下に位する者たるは無論なりとす、

然り印度文化の消息は彼等に向て固より緣外の事に屬す、果して然りとせば福音記者が其書を編するに當り典據採用したりし材料は自ら他に向て之を求めざる可らず、而して吾人が今日に於て知り得る歴史的原本は僅かに『ウルマルクス』と『ゥギャ』との二種に過ぎず、其他果して別本のなるありしや否やさへ一個の疑問にして、若し之れ有りしとするも今は全く散逸して又求むるによしなき也、

歴史的批判の眼晴を以て之を見る、彼の如き假定說の遂に立つ可らざるの理由は炳然として明らかあり、啻に是れのみならず更らに內部の見地より之を比較し來らば尙一增相互の關係の斷じて不可能ある所以を知るに足る者あらむ人若し兩

傳說の內容に於て互に相背馳椙戈する差違の度が、其外觀に於げる共通類似の度よりも更らに一層甚だしきものある事實に注目せば蓋し又其根源の二者自ら相異なる者たるを知らずんばあらざる可し況んや各物語の價値は其形式の品類に有らず却て之が內容の要領に存するに於てをや、內容にして若し互に黑白相反するものたらんか外形如何に類似の觀を呈すとも亦敢て云云するに足らざるあり、

吾人試みに的例を以て之を明さんか、彼の幼時失踪の傳說ある二祖共に同一なりとす然れど其相似たるは只一幼兒童が兩親の目を離れて暫時失踪し後幾くもなくして父母に復歸せりとなすの一點のみ、而かも年僅かに十二歳なる少童耶蘇が純白雪の如き心に邪氣一點の塵を留めず而かも尙稚氣を脫せざる口吻を以て將來彼が開基す可き大宗敎の萠芽たる偉大の信念を吐露し神宮殿裏の博士と學者とを驚倒せしめしといふの傳說と佛陀の夫れとを比較し來らば兩者の間實に雲泥の差あるを見る也且つ夫れ此等外形の類似も其然る所以の原因必ずしも歴史上交互の交涉の一途に出るのみならず、又他に勢ひ然らざるを得ずして然るの理法が東西兩所に行はれて遂に同一の結果兩所に現じ來りし也、我宗敎學の範圍內にありて一派の宗旨が其敎理の組織と敎祖の傳記中他敎中の夫れ等と同形同色

の者あるを發見する事ある敢て珍らしき事に非ず、雲煙千里、人種的地理學的に嘗て相交渉したる事なき絶境別種の民衆等が共に一形同觀の宗教的習慣を保持するの事實は常に吾人の遭遇する所なり東園の桃華桃果を結ぶ西陵の桃華豈又梨果を結ばんや、蓋し同一の原因は必ず同一の結果を生ず固より理の當然なり、二祖互に相似たる生涯の徑路を取る其相似たるの境界に到着するは寧ろ自然の數のみ、又怪しむを須ひざるなり、蓋し釋尊と基督と共に母教の藍より出でて更らに藍よりも青き一機軸を發揮したる者、共に舊思想の束縛を脱して新信仰の福音を傳へ、同じく立命自淨の法座に住して救世度生の寶幢を高揚したり、斯の如く兩者其出所と事業とを同うす受報の相似たる者ある何の怪しむ可き事かこれあらむ、其立教の當初法敵迫害の難に逢ふの相同じきも亦實に之が爲めのみ、苟くも破天荒の宗旨を宣揚せんと欲する者に未だ嘗て經營慘怛若虚煩悶の跡を遺さゞるもの稀れなり、モーゼ然りマホメット然り、釋尊基督豈獨り能く然らざらんや、彼等が時に斷食して以て精神を養ひ、時に閑處に退いて深く思惟す、彼は山上に祈禱して聖靈を天の一方に念じ、此は樹下に入定して三毒の魔軍を方寸の外に逐ふ、彼れ野邊に垂訓し、此れ園林に說法す、彼にペテロ、ヨハネ、ヤコブあれば此に阿難目連迦葉あり、

彼れ使徒を東西に遣はして傳道せしめ、此亦沙門を南北に派して法を說かしむ、其の斯の如きもの何ぞや、兩者の事情同一の原因ありて類似の結果を現じたるものに過ぎざる也、然して是れ曾に佛耶兩教に於て見る處たるのみならず、若し之を求め去らば、各宗各派續々として多々益々辨ず可き也、

而して若しキリストの門弟子にして故らに其祖師の經歷中神變奇怪の事跡を附會せんと欲したりとするも敢て佛教の所傳に倣ひ、はた其所說を剽竊するの愚と煩とを學ばざりしや疑ひなし何となれば彼等は遠く其範を印度の古譚に仰ぐを要せず、近く彼等が父祖傳來の聖經舊約全書中に充滿する、古預言者の言說若しくは猶太亞の國民的救濟主思想のうちに溢然として豐富なる材料を有すれば也、梅花庭前に發して馥郁たり豈又春を野外に向て遠く求め去るの愚を學はんや、

然り新約の一書は決して佛教の感化を受けて成りしものに非ざる也、其叙說論述する處悉く創設的にして耶蘇の生涯と其教義とに關しては最も憑據するに足る唯一無二の典經たるなり、果して然らば吾人今茲に斷言するを得ん、曰く福音書所載の記事に依りて教祖本師の實歷史と其教義の眞實相とを判定して之が正鵠を得んと欲する亦必すしも不可なかる可しと、

第四章　三祖の小傳

第一、三祖の歷史的實傳に就て吾人が知り得る處の者は何ぞや

一、釋迦

頃は西暦紀元を去るの前凡そ五百六十五年に當り南天竺加比羅の城主淨飯大王の宮殿に相好具足の太子生誕せり、正に是れ陽春四月第八日、早曉日初めて出でて千紫萬紅の露を昭らし諸鳥欣然として好音の樂を奏するの時なり父王大いに喜び名を悉達多（シッタルタ）と呼び又瞿曇（ゴータマ）と稱せり「ゴータマ」とは地最勝の義にして「シッタルタ」とは古來譯して財吉若くは頓吉又は成利となせ共而かも其本來の深義によれは成就と云ふを最も當れりとおす、蓋し此子將來必す絶世の大事業を成就せんとの幸福ある希望を屬して附したるの名なる可ければなり、其他尊號嘉稱數十の多きに達するも要するに後來の信徒か其德と功とを頌贊して附したる者に過きさる也、生れて金殿玉樓の中に長ず目を喜ばすの色耳を樂ましむるの聲一として完備せ

さるはなく世歡快樂の具悉く充備して心願求する所皆て成就滿足せざるはなかりき、春風秋雨彼漸く妙齡十五に達せるの時既に容顏花の如きの美妃嫣然たる其好配者たる也而も太子天性最も利發習はすして美術の神髓を會し學はすして天地の道理に通し侍人をして往々其の妙をいぶからしめたりき然れとも未た無上の菩提を得たるにはあらさりし也、

一夜忽然心大に感する處あり妻子珍寶、世歡王位乃至一切恩愛執着の羈絆を脫離し出家入道飄然として去つて寂靜安定の閑野に隱遁し去りぬ時に寶壽正に二十有九是れ蓋し彼は生死無常の理、解脫、成道の法を明らめて以て自他平等の大利益を發見せんと欲せしが故也

生死流轉の大苦輪を脫せんと欲するの念慮は即ち彼か出家の大動機なりしに相なきも而かも王城の華門外に於て遭遇したりと云ふ二三の實例は確かに彼の入道心を勵ましたる者たりしや必せり所謂二三の實例とは何ぞや曰く東門に蒼顏憔悴の老翁を見西門に苦悶惱亂の病者を見魂既に去つて肉身悉く糜爛するの屍體に南門に遇ひ三界無庵悠然として心外の天地を逍遙する乞食僧に北門に逢ひ即ち彼の苦を脫して此の安を得んと欲するの念勃然として禁する能はす斷然

王殿の榮光を棄てゝ樹下石上坐禪默想の修行者となりたりし也、生老病死常人にありては普通の事のみ而も悉達は之によりて人生無常觀の心眼を開くに至りぬ、悉達誕生の時「バラモン」の一僧彼の將來に就き預言して此子成長の後必ず出家入道すへしとなせり父王之を聞て心甚た其の世子を失はん事を憂ひ百方力を盡して之に無常悲歎の世相を見せさらしむ蓋し遠離の心を生せさらしめんか爲なり滿城の歡樂洋々として不盡の春の如く花園の紅白終歲替て馥郁の香を絶たす太子に侍へる者に命して老病死滅の談は固より苟くも悉達をして厭世隱遁の念を誘ふ行爲は悉く之を嚴禁せり而かも父王の苦慮遂に其の功を奏せす彼は世榮虛樂の牢獄より一躍して大願菩提の長程に上りたり、今や彼はカピラ大城の王子にあらすして孤影索寒の一沙門とならんと欲する也三更夜闌にして其の良人と其の慈父とか將に永生別の長途に赴かんとするを知らず悲眠喋夢春衾に暖かなる美妃と愛兒とを顧れは轉た恩愛千掬の紅涙なきにあらさるも而かも發心の足は停むるによしなく蹴然として王宮の外に出れは恰かもよし城門を守るの卒熟睡半は死する如く昏々として太子の逸出を覺らさりき

名馬に鞭つてカピラバスッーを發したる太子はアガーマ河畔に來て徐ろに馬より

下り寶及を拔て美髮を剃除し黃色の法衣を著して全く隱遁乞食の形裝となり劍馬衣玉悉く之を其父王に還附し孤影煢然去つてラジャグリハの山林に至り有識高德の善仙を訪ひ之を師として奉事したりき

バラモンの僧悉達に敎へて曰汝若し無上の大法を會得せんと欲せは須らくまさに苦難の功を積まさる可からす如說の戒を持せざる可からす悉達即ち其の敎へらるゝ處に從ひ萬行萬戒俯せすと云ふ事なく持たすと云ふ事なかりき然れと彼は遂に之によりて四苦の根因解脫の正道を了得する能はさりき其の法を求めて其の法を得す悶々として寔も滿足を心に得る能はさりき玆に於て彼れ同門の「バラモン」脩行者五人と共に此の敎林を辭し更らに無二一實の大法を求めて他の山林に遁れ苦行持戒更に深く觀念の三昧に入りぬ心無上の大法を求むるにあり身何んそ五慾の樂を貪るの遑あらんや、苟も思念を亂すものは之を近つけす之に近かす滿腔の熱誠は悉く之を入悟得道の一途に注き樹下又石上常に食を斷して疲勞起つ能はさる事しば〳〵なりき而して此の斷食の行も只空しく身體を勞するのみ未た能く內に正覺の燈を見る能はす懷疑の雲は尙依然として心の天地を掩ひたりき而も彼は勇を皷して尙且つ同一の行を繼續したりしも一夜疲勞の極遂

に昏然絶倒するに至りぬ覺めて後自ら謂へらく斷食苦行の法決して正道を求むるの道にあらずと即ち起て沐浴し自ら頭陀の袋を製して盛るに一貴族の處女スジャーターか贈れる食饌をもつてし之れを携へて荒野に去り若し無上の大菩提を成すに有らすんは死すとも再び斯坐を退かさる可しと決意嚴の如く猛然として菩提の樹下に端坐し沈思觀念の定に入りぬ

天惠なるかな彼の期望は成就したり彼か端坐の定に入りたるの翌日帶雲錦の如く東方正さに曙けなむとする時正覺の大日は昭然として彼れか心界を昭らし初めぬ

正覺とは何そや過去無量生に作れる宿業の因と苦圍現在の感應と慾惡煩惱の斷滅との妙識の現前即ち是れなり大圓智鏡四諦の理朗らかに映し、平等性池一切の法悉く通す、此に於てか彼は實に開悟已成の佛陀なり法界の群品皆同性の實相に沒せさるなし彼は知眼了然として衆苦の本源を察知せり是れ辛酸苦楚悉く嘗めつくして後初めて得たるの結果なりき

彼自ら既に之を得たり然れとも此の大法を將て一切の衆生に傳道すへきや否やは暫らく彼を躊躇せしむるの疑問なりき蓋し其の法の眞意至高至遠にして一般衆生の心耳に通達する事能はす遂に犬に投するの眞珠たらむを恐れたればなり

然りと雖も大慈悲の佛心豈常沒轉流の迷衆生を見て憫然之を濟度するの念慮起らすしてやむ能はむや即ち彼等の根氣性類に從ひ種々方便言說して所謂應症投藥の大醫王たらむことを決心せり然り彼は之れ以て平等一乘の法と思惟したる也假令へは溪と井と沼と湖と其の形は暫く相異なる處ありと雖も而も流下注入の末は平等一味の海水にして又沼井の別を見る能はさるか如けむ

彼は先づ彼の前友五人を敎化せむと思惟し即ち行て之れを試みたり彼等は彼か突然斷食の淨行を捨て單身群を去りたるの眞意を解する能はさりし者初めは喜んで彼に問く事を爲さゞりき而も日又一日其人品の秀高にして偉大温容の優和にして威樣ある其の言語の親切にして的實ありしを且つ見ん且つ聽くに從て遂には之れに薰花せらるゝに至りぬ其の中の高齡者なりしコンダンヤ先つ其最初の門弟となり他四波羅門亦コンダンヤの先例に倣ひ彼を以て大法傳授の道師と爲し彼に信從奉事するの人となりぬ

次に獅子哮の講坐に至りし者を富商ヤサの父子と爲す後漸く參聽の人數多きを加へ未た四ヶ月ならすして高識有爲の門弟六十を以て數ふるに至れり一日ヤサ

其妻と母とを携へ來り其門生たらしむ是れ蓋し佛門女人の嚆矢なり

佛此に於てか門弟を四方に派し以て救世の福音を天下に宣傳せしむ各派遣の僧には先豫め授くるに四諦の妙理と八正の大道を以てし懇に教養して濟度衆生の大願を遂ぐも念頭を去らさらしめたり

而して彼らは行つて外道拜火宗教の巣窟に入り其の宗僧に面しては辯難攻擊破邪顯正の舌刀威秋霜の如く遂に其の邪説の虚城を壞滅し無數の該信徒者を將て一同彼か法陣の幕下に降伏師入するに至らしめたり大王ビンビザラの如き亦實に其歸降者の一人なりき

越えて七年彼は其父の淨飯大王と及び妻子とに再會したり心法界の大を保つと雖も情豈俗緣の親を忘るゝを得んや況んや其慈悲非情草木にすら及ふの彼に於てをや彼は切實の至心を以て骨肉家族に一乘の妙法を傳へしに福なるかな彼等の心眼は忽然として開けたり往時別離の血涙を以て蒔きたるの種今や穫りたる充實の佛果となりぬ豈啻に長年無音の遊學と相見たるの喜のみならむや悉達出家の本懐半は報ひたりと云ふも蓋し又誇大の言に非らさらん

佛教といふ一宗教の組識は彼の熱心を以て成就されぬ大人は固より童男小女と

雖も兩親の承諾を得れは即ち其の門徒になると得たり法圍の中にダイバダッタある者あり陽に歸回の衣を着し私に逆法の魔計を畫し期を見て討佛の叛旗を揚けむと欲したり然も怪雲の黑影長く實證の月明を掩ふ事能はず遂に破邪風の吹き散する處となりぬ

爾來春秋四十有五年彼は門下の聖衆と共に國内を東西に飛錫し説法教化綽々として倦まず緣に隨ひ機に應し方便言説する八ヶ月天梅雨霖〻たるの四ヶ月は或は信法の家屋に於て或は靜寂の林中に於て人を集つめ法を説く實に年々の通例なりき

佛陀の法力を以ても遂に無常の陰風を免かるゝ事能はさりき高齡八十、四大漸く不調所謂方便現涅槃の月忽焉として鶴林の間に沒しぬ玉骸は之を荼毘の煙に附し殘る者は只皎々なる一椀の白骨のみ即ち佛舍利として彼を信心渴仰したる當時の八王に分配したり後二百年皇帝アシヨカ各王家に請ふて其舍利を集む恐らくは正眞の佛骨なりしからむ

是れ實に歴史上に於ける釋迦一代の事跡大畧なりとす、然るを世間往々にして異説を立つるものあり斷じて曰く佛陀は全然非歴史的人物なりとこれ恰も基督が

宗教小說的想像の餘に成れる一種の非歷史的假定の人物と爲すの論に似たり彼等謂らく佛は只時代思想の傾向を具體的に標示せん爲め假に作爲せられたる機械的偶像に過ぎず彼の一代の事跡として傳へらるゝ諸多の說話は悉く從來同國民間に行はれし神話の談片を經合附會したる者なり、故に佛敎なる宗敎の一系統は必ずしも一定の祖師より出でたりと云ふべからずして要するに當時行はれし思潮の一滴を組織的に叙述したる者と云ふを可とするなり云々と、如斯き憶測の說を以て佛敎の起源を說明せんと欲したる學者が遂に失敗の結果に到達するは固より其處たり、晩近に於ける歷史的批評學の進步は歷史上佛陀なる者が印度に於ける釋迦種族の中より起り佛敎てふ世界的大宗敎の開基の遠祖たりし事は明々白々又秋毫も疑を挿む事能はざる歷史的事實たるを證明するに至れり吾人若し婆羅門敎若しくは從來の發達にかゝる印度敎と我が佛敎とを比較對照する時は其間自から大なる懸隔あるを發見せずんばあらず、即ち其前者は由來する處茫漠として尋ぬ可らずと雖も而かも其後者に至りては然らず其が流れ出る處の源頭に於て一大活偉の人格在りと爲すに非ずんば吾人をして到底斯の如き敎義の深淵を來たす所以を知る能はざらしむる者あれば也然り之が資料として引用す

可き書籍は大抵廣漠なる小說的文書類多し彼の荒誕不稽の內容を考量して其中より祖師一代の正史を得んと欲す豈容易の業ならんや、而かも彼等は遂に釋迦の歷史的事跡が明白となりしは勿論其生誕入滅の年月をすら亦詳らかあらしむるに至れり、吾人は此等學者等の功を認むると共に其慘憺たる苦心を以て買ひ得たる歷史的考證に就ては充分信憑を措くに足れりと信ずる者也

二、馬合默

回敎の祖師マホメットの幼時を以て彼の釋迦の夫れと比較する時は全く別異の者たるを見る也、假令其出生の門地はメッカに於ける貴顯の名閥に屬せりしとは雖も彼や家固と赤貧、漸く人心地附くの頃には其父母早く既に人世を辭し去りて在らず、僅かに露命を叔父某に托して其使役する處となり、或は耕し或は牧して碌々半生を荒野の間に過ぐしたりき、然れど彼の事情は忽ちにして變化したり、釋迦は吾慾自在の富貴地を捨てゝ自ら貧窮の域に轉したりしも馬氏は却て窮困の地より一躍繁榮の人となれりき、彼は素封家の未亡人たる一寡婦が家の執事となり遂ゐに彼れより殆んど十五年の長者たる其寡婦と結婚せり、其結果六人の子女を擧げたりしと雖も而かも其子女は最少の娘ファチマを除くの外皆悉く夭折したりき、彼

が宗教思想の發達せしは實に齡四十を越へたるの後なりき、初めは他のアラビヤ人と同じく彼も一個の偶像崇拜の人なりき、彼は旅行及び友人との交通によりて何時しか猶太亞的基督教(猶太亞教と基督教との教義を混交して作爲せし一種の宗教)あるとを知り、遂に投じて其教團の一員となり自ら稱して『ハニフ』清淨と云へり、然れど此猶太亞基督教の教義を以て彼が將さに創設せんとする新宗教の根本義と爲さんと欲したるの動機は一に彼が宿痾に因らずんば非ず、抑も馬氏は其身體に於て一種癲癇類似の神經的疾病を患へたりき、斯の如き患者の常徴として、虛構、悖德の傾向を示す事あるは吾人の數ば見る處、其持病發作の前後に於て伴ひ來る種々の夢覺、幻像等あるを悉く實際の事となし、或は天使を肉眼に見たりとし、或は幽靈と談話したりと信じて嘗て疑はず、且つや孰れか夢裏孰れか醒覺眞假二界の境域を區別する事甚だ難きも亦此種の患者の通症なりとす、馬合默亦此の如き傾向あるを免かれず、其病發作の經過中時に天使來りて神敕を傳へ且つ、人類救護の法任を以て馬氏に附囑せりと幻覺し、醒覺の後と雖も其病的幻覺なりし事を知らず、確かに神者と語を交へたりと信じたりき、是れ實に『イスラム』教の起原とす、彼が數ば登りたる聖山の巔にありて天使の彼に告げしと信せし聖語は曰く、

汝、造物者の聖名によりてかたれ云云

謂は蓋し豫言者として起てとの義なり、彼初め其任の大且重なるものあるを思ひ、敢て天敕を奉じて直ちに起つの意なかりき、而かも其妻と猶太亞基督教徒たるワラカとが交も相すゝめ相はげまして止まざる者あるに逢ひて漸く心を動かすに至りぬ、此に於てか憤然蹶起、則ち其天啓の宗旨を宣揚して先づ親戚故舊を教化せんと試みたりき、然れど彼尙は未だ自家獨創の宗教觀を組織的に建立するに至らず、朝三暮四翩々として嘗て定まる處なく、時には異端的基督教の趣味を帶びたる說法を試み、又或時は純然たる基督教徒の如き思想を吐露し、遂には全く非基督教的云爲に出て極力基督教に抗辯するの體度を示すに至れり、要するに彼は嘗て基督教の眞味を悟了する事能はざりし也、

メッカに於ける彼の勢力は恰も旭日の天に冲するの狀態を示し、之に隨順歸向するの徒又漸多きを加へたり、然れど此と共に法敵の迫害甚だしく、之を暗殺せんと企つる者あるに及ぶ此に於てか逃れてメヂナに入りアラビヤの國民的靈場メッカのガーバに巡拜する巡禮者の多數を說きて其教義に歸廻せしめたり、彼れ此等の人々に告げて曰く、

嗚呼汝曹諸人よ、唯この言葉をのみ唱す可し曰く『アラーの外に神なし』と此眞言の呪文を唱へ奉らば、其冥加の功力によりて汝の家運正さに長久、息災延命疑なく、アラビヤ人の怨敵も忽ち悉く退散して再び汝に害を及ぼす能はず、乃至一切の國土も皆遂に汝に來貢せん、汝曹若し如法に奉唱奉事せば現世は安穩後生は必ず極樂界の王となる可し

政治的利己的の教理は漸く多數の群衆をして馬氏の下に雲集せしむる香餌なりき、遂に紀元六百二十二年に至りかの有名なるヘヂユラ隱遁(彼の徒はこの年を以て紀元と定む)の時、部下彼を以て彼等の首領と仰げり、馬氏其第一宮殿を建立し、又愛妾九人の爲めに宮の東方に九房を造るや『イスラム』教の基礎茲に成り、今に至るも尚其血腥き勝利の紀念を存するを見る可し

三、耶蘇

彼の福音書に於ける耶蘇一代記錄のうちより其誕生と幼年時の事跡に關する荒誕神怪の不思議談數項をして全然無根の傳說たらしめよ、而かも彼の資性と發達とを以て神明直接の賦與感化によれりと爲すには何人と雖も亦異義を挿む者なかる可き也、彼れの誕生を一言以て是れを蓋ふへば曰く、人生れたり其心常に神靈に滿たされ其人格は是神愛の權化なりき』と、

イエスが此非常に驚歎すべき人格なりし事實を證明する者は新約書中にあらゆる神怪靈妙の奇蹟談にあらずして却て其平常の生活と臨終の刹那と其間の言行殊に其門弟子に殘したりし感化の靈力とにあり、斯の如き偉大の感化や之れを馬氏に求むるも將た釋氏に求むるも遂に得べからず只キリストの如き人物を以て始めて期待すべきなり、前二者は其時代に於ける偏頗の人たるを免れざりしと雖耶蘇は然らず彼れが聲言して『我れと我が父とは一體にして不二なり』と云へりしも決して誇大の言にあらざりしを見るなり、試みに吾人の心を佛たり將た馬合默たる事一日ならしめよ吾等は遂に吾等の目的とする理想境に到達せずして猶罪と束縛との內に呻吟歎息するものたるべきなり、されと吾人一度キリストの模範に倣ひ其心を心とし其行を行ひとし頭尾一貫して彼れの生涯と同じからん事を勉めば、吾人の內的生活には期せずして幸福自づから到り清淨の靈氣內に充滿するを覺ゆるに至らん、それ如斯ぐ汝が心靈耶蘇の心情と融化し更に神人交感の內的實驗に入らば必ずや彼の彼得(ペテロ)と共に告白して

爾はキリスト活神の子なり

と言はざらむと欲するも亦得ざるに至らん、耶蘇は紀元前凡そ五年猶太の一寒村ナザレに生る、家元と貧賤父をヨセフと云ひ工匠たり母はマリヤ基督とは其榮稱にして蓋し門弟子が奉りし尊號なり、其小年時は邈として知る可からすと雖思ふに甚だしき變動なく平温無事なりしや疑なし、是れイエスの心田に於ける宗教的發達が他の二者の其れと比較して大なる相違を存する所なりとす、イエスの高潔清淨なる宗教心は一芽一葉徐々として其精華に達したる者なりと雖佛と馬とは然らず彼等の内に發起したる道念は何れも壯年の後に至りて寧ろ不自然的に突如たる動機と誘引とによりて起りたり、佛は人生無常の悲觀にうたれて發心し、馬氏は猶太教を知りしと病的夢現幻覺の持續によりて漸次に生したる者なりき、如來の成道は煩悶惱亂の餘に出でし結果なり始は無始本有の業障と戒律的道念との間に、次には理義の複雜多樣なる學林の間にありて其何れにつき何れを去り其何れを採り將た何れを捨てざるべからざるかは彼れが當面に苦慮を要すべき難問なりしなり、されど基督を以てしては宗教の事敢て苦惱を要せず萬事の發達皆自然にして恰も拂曉の曙光漸くにして白日となるが如き者なりき、彼れの潔白にして平和なる生活は玲瓏として玉の如く卓然として世俗の汚塵に染まず、清逸一

花、濁世の浪に穢されすして信念の露天月不斷の光をうけたり、神を愛し自然を愛するの心愈よ厚くして己身天國の念益固し、内宗教の實驗に富むに從ふて外社會の神を知らざるの狀態を歎き、時に孤立の寂漠を感ずる事無きにしもあらざりしことは雖而も是やがて福音宣傳の任を擔ふに至るの動機なりし也、救濟は彼れ一固の私情より爲すにあらずして天父が自ら營み給ふ神業なる事を信じたり、天父が人生に向つて如何なる事を要求し給ふかは漸々として彼に知られたりき、施洗者ヨハネの說教がこれを慥むるや彼れは愈よ神彼れと形影相離るゝものにあらずとの念を固うし其義務に忠實にして嘗て懈怠躊躇することなく決然立つて傳道救世のことに從へり、釋と馬とは彼等か祖先より傳へられたる固有の信仰を破壞せざるべからざりしと雖耶蘇は決して如斯き事をなすの必要なく、生時心田に藏めたりし白蓮の種時に隨いて芽を出だし花を開くに至りしのみ、平温春の海の如き家庭に生れて嘻々たる團欒の内其弟妹と共に成長したるの一少年が漸く一個の青年となりし時の狀態は印度に於ける淨飯王宮の太子とは全く異なる者なりき、彼の天竺の貴公子は其情欲の向ふ處悉くこれを充すも敢て憚る處なかりしと雖而もナザレに於ける匠家の賤兒は克己自制其五欲の樂みを貪る事なかりしは

勿論小太子が見て最も賤業なりと嘲笑鄙下したる勞働にさへも服役せざるべからざりし也、彼は實に一個の賤しき木工なりしなり、彼れ亦其家庭と社會とより時代普通の教育を受けたり、而かも其教育たるや單に宗教的のものなりしが故に舊約書を講讀するの外は嘗て學ふ所なく哲學の如き自然科學の如き乃至諸外國の知識の如きに至りては全然皆無と云ふも敢て誣言にあらざる也、佛と馬との宗教は何れも在來の宗教傳說等の泉流より汲み來りし處のものこれが多數を占め獨創自發の教義は共に其小部分に止まれりと雖而も耶蘇の宗教は寧ろ內處證の實驗より來るもの即ち神人合一の宗教的自覺に出でたるもの實に多きに居るなり、彼の佛をして身國王となりて財寶快樂充滿の內にありながら猶且つ無常と乏しきを感せしめたる世は、此神人合一の實驗を抱くの彼れに向て悠々として從容自適するの餘裕を存する所たらしめたり、釋氏は人生を以て四苦充滿の火宅と觀したる時イエスは此に處する事の如何に麗はしく如何に幸福なるかを實驗しつゝありしなり、然り基督と雖釋迦と同じく世道人倫の日に非なるを見且つ其惡報の實に恐るべき者なるを知らざりしにあらずと雖も而も大聖釋迦の如きを以てして遂に見る事能はず將た感する能はざりしものを見且つ感じたりき、即ち彼は淸

淨の心を以て天父を靈界の一方に見、且つ心に其恩を感じたりき、如來は世間一切の無常を厭ひ生死苦惱の火坑を遠離せんと勉め遂に自力解脫の智門を開き而してイエスは信念高く天父恩惠の堂に登り、人類救濟のため其身を捧げて惜まざりき神恩を感ずる事益深うして慈善を行ふ事愈廣く、彼は世を厭ひて世を逃れ、これは世を愛して世の爲めに己れの身を献げたり、彼れは惡報の身に及ばんを恐れて世事を避け、これは神の聖旨を信じて凡ての事に從ひたりき、

佛と馬とが迷悟の境をかゆる時に當りては各妻子の伴ふありき、最も一は富貴より貧賤の域に入り一は艱窮より富裕の地に移りたりと雖も而も其外觀を一變したりし點に於ては兩々相同じとす獨りイエスに至りては然らず、貞持不犯、自ら居る事方正其私生涯より公事業に從ふに當りて曾て妻子の係累を斷つが如き事を爲すの要なし、はた意馬心猿の世間的名利境に走るものなかりしが故に行動進退全く自由を得たりき、吾人が彼の三教祖師に於て自ら嘗を同ふするものあるを見るは只彼等身外の社會的事狀が彼等を驅りて救世度民の預言者たらしむるの動機となりし一事とす、耶蘇ヨルダンの河畔に於て隱士ヨハネの施洗を領する時、忽然として傳導事業に從ふ可きの天命を感じ、蹶然起つて福音を傳へんとの念慮は

確然固き事岩の如くなりしも而かも如何にして其任を全ふせんかは當初大に煩悶したるの問題かりき、彼若し馬氏の如く其自個の利益の爲めに權地に立ちて勢力を妄用せんと欲せば必ずしも難きに非ざりし也而かも利己の欲念に薄かりし彼は遂に之を敢て爲さゞりき、彼若し佛若しくは馬が得たりし大衆の從者を得んと欲せば又必ずしも難きに非ざりき、而かも驚く可き奇蹟を行ひて俗眼を迎ゆるは決して天國建設の道に非ざりし也、彼は實に海の如き愛を以て眞の門弟子を自己の周圍に近づかしめたりし也、或は彼の『イスラム』の預言者に倣ひて劍を持し威嚴以て四方に令せんか一大帝國を建設する又必ずしも難事に非ざりしからん、而かも彼が建設せんと欲したりし處のものは敢て地上可見の區域にあらずして實に無形の寶刹なる也、彼が傳道の方法に就て思考せし冥想の野にありて其心中自然に鬪ひたりし煩悶遂に彼をして無上の勝利者たらしめたり、

彼れ斯の如くして思惟の定を出で、直ちに傳道の業に就くや、勇往猛進、始終一貫の信念最後に至る迄曾てかはる處かりき然れども之を他の二者に比するに其活動の時間至て短かく僅かに三年の歳月に過ぎざりしが故に從つて其結果は彼等の夫れの如く目覺ましきものなく、有形的には見る可きもの全く之れかりしと

云ふも敢て過言に非ざりしかり

第二、三祖師の預言者的救世事業に關する歴史的實況

一、釋迦

佛は紀元前五百二十五年、所謂人天の大道師宗教改革の大偉傑として社會的公生涯に歩を入れたり、抑も佛初め成道して出山するや先づ是の如きの思惟を爲す謂く何等の手段に依りてか此教法を宣揚せんと、既にして亦復思惟す、曰く先づ何等の人をか度す可きと、自ら謂へらく、彼の二仙人は吾が最初出家の師たり、先づ之を度す可し、即ち之を見るに彼の仙已沒す、又謂らく然らば則ち陳如等の五人吾に於て功あり、彼等の五人今彼羅奈國鹿野苑にあり、宜しく先づ之を度す可しと是より所謂華嚴の道場を辭し起て鹿野苑に趣く中路偶ま提謂、彼利の二長者に値ふ、釋迦之が供養を受け爲めに五戒十善の法門を說く此れ實に提謂經の緣起なり、此より直ちに鹿苑に至る、陳如等の五人佛の應、さに來訪せんとするを聞き互に相語つて曰く太子或は苦に執し或は樂に若す、何の實悟か之れあらむ縱使ひ來る事ありとも亦何の要あつてか問訊せんと、時に太子道品の相好圓滿にして來るを見陳如覺

へず座より起ち敬待恭侍遂に水を取て其足を洗ふに至る、此に於て佛四諦生滅の法を說き先づ陳如一人をして初果を得せしむ、是れ法輪の第一轉あり、而して後法輪再三轉して遂に五比丘をして等しく無上の道果を證せしむ、

是れ實に釋迦傳道の初步なりし也爾來四十有九年三百餘會の講座にありて種々方便言說し未だ曾て倦まず一意專心衆生の濟度を以て任と爲せり、天下の有識來て其敎を受くるもの雲の如く多くは貴族顯門の子弟あり、則ち之に從ふものは圓頂黃衣乞飯の鉢を持するの外嘗て一物を要せず、只歸回隨順佛意を奉じて如說に脩行するを期したりき、佛が鐘愛したる高足の弟子を阿難となす最も深く彼に信從したり、獅子吼の大音聲を放つて外道を說破し眞法を布演す、名聞四方に擧けり、然れども彼が演說ぶりは頗る印度人的性質を帶び其用語の如き難解の者多く特とに往々複雜なる繰返しを用ひたるが故に來聽者の種類が自ら學者的たりしは自然の數ありとす、梅雨の候には信徒の寄進にかかる山林精舍の內に止住して說法し、他の九月は天下を巡錫して民衆を化導するを常とせり、彼は無欲超然として名利の外にあり而かも求めずして富裕の人となれり、是れ他なし諸多の王侯貴紳にして彼の道を敬ひ彼の德を慕ひ尊重供養爲めに種々貴重の物品を献ずる者多

がりしが故あり、彼の座して法を說く處或は「バラモン」の達識あり或は巨產の長者あり、皆喜んで謹聽隨喜せり彼が一種の厭世的哲學と超世の大人格とを以て其周圍に引き寄せたる門徒の數は日一日と益多きを加へたりき

曾て離苦千掬の涙を振つて恩愛の情絆を斷ち決然家を出でたるの悉達、今再び其妻子に邂逅せんとせり、無飾の頂、墨色の衣、孤鉢悄然として故鄕に歸るや父スッダナ(淨飯)王聞て大に喜び侍臣をして出てて城外に之を迎へしむ、何ぞ計らん悉達は王城昔日の太子に非ずして畸究憔悴、形容枯槁の一乞丐たらんとは、使者之を見て心喜ばず歸つて之を父王に告ぐ、父王之れを聞いて大に愛へ、病を扶け强て街頭に釋迦に會見して曰く『汝何故に斯の如くして我が上に恥辱を被むらしむるや汝若し遠俗して吾王城の元首たらば國土及び諸の財寶悉く汝の所有たらん又何を苦しんでか他人の恤助に露命を繫ぐ乞丐の業を學ぶの要あらむや』と、而かも釋迦は之に答ふるに世間の七珍よりも更らに出世間の法寶の貴ぶ可き所以を以てし且つ懇ろに誨へて曰く『正道に順して行く可し邪業に隨ふ事勿れ、如法に行して良心の平安を是れ求めば世々患ある事なし』と父王の心初めて曉然自得する所あり、之より順次其近親血肉の諸人を度し、又其在家時の愛子ラフラをも出家せしめ了ん

ぬ、

佛は自己の教法を宣揚するに當り敢て威力を以て小民を屈服することなく果た奇跡を以て俗眼を驚かす事を爲さず、只鋭利明快の舌鋒能く破邪顯正の說法を爲せしのみ、彼の經典中、靈異神通の妙力を以て釋迦の事跡に加ふる者ある多くは後來信徒の渴仰心より知らず知らず針小事を棒大に訛傳したるに過ぎざる也、

佛門弟子を四方に遣はし其法門を宣傳せしむ單に一般信徒たらんと欲する敢て難きに非ざりき、僅かに歸回三寶の禮文を唱すれば足れり、然れど若し人至心に願して、佛地佛境の眞趣を蹈證せんと欲せば必ず出家の沙門となり白雲流水去て人界の外に步せざる可らず、然れど全人類悉く沙門となる可らず、若し然せば國家は忽ち滅亡の悲境に陷ち入らざる可からざれば也、國滅し人空くんば、佛法假令超世の眞理たりとも果た何によりてか其光を放たん、故を以て事實上佛教所說の理想的眞地に達するの幸福を受くる者は僅かに少數の人に過ぎず、他の大部衆は遂に能く此に至る事能はず、否至る可らざる者たる也、蓋しかの兵士の如き勞役者の如き國家存立上一日も之れ無かる可らざる要素なれば也、然り佛は如此輩の入門を許るさず、はた病者少年乃至女人等悉く斥けて其出家を許さゝりき、尤も女人は後年に至りて漸く入門を許されしと雖も而かも尙は沙門の目に觸る可き處に止住する事を禁せられき

佛の高德智見を以てしても尙は且つ法敵あるを免れさりき彼の外道九十四門の學派の外或は陰に或は陽に極力之に抵抗して其傳道を妨くるもの終始絕ゆる事あらさりき、而も之等障害の雲霧によりて阻害せらる事なく赫々たる覺日の慧光は益々遠く萬類の根機を照下せり、晉に其法門の殊勝なるが爲めのみならずかの印度從來の教權たりし波羅門の一種が釋迦の時に當たりて、內は教義四分五裂して統一することなく、外は全く威信以て民心を繫くものなかりしも偶ま以て彼の成功を易すからしめたるものの一ありき、故に天下の輿望靈鷲山頭の一月に歸し獅子咆妙音坐下の衆日に多きを加へて一切調伏の善師三界優勝の王たる釋迦牟尼如來は玆に易すく世界的大宗教を建立するに至りぬ

二、馬合默

馬氏が教を傳ゆるの法方は佛と全く其の趣を殊にせり殺戮は其の法幢の徽章にして腥血は之を飾るの色彩なりき、彼の柔和忍辱の衣を纏ひ慈眼以て天竺の衆生を濟度せし大長者と、殺伐殘忍の暴威を以て亞拉比亞の蒼生を斬り從へたる猛將

軍とを比較し來れば兩者の相違實に甚くに絶へたる者あり、馬氏が釋迦と等しく、漸次成文の教綱を製定し、風發の論懸河の舌、滔々として辯じ來るや、何人と雖も其雄風に恐れて又論爭抗議するを得る者なかりしは事實なりき、斯の如き說破調伏の狀や佛馬共に相似たり、而かも彼が多數の徒弟子を其馬前に集め得たりし成功の一大秘訣は敢て此巧妙鋭快なる演說の利器に非ずして他に自ら之ありし也、即ち其教勢を伸張するの目的を達する爲めには、權謀術數、其他如何なる手段と雖も取つて施さずと云ふ事なく、取捨は只利害の觀念に因て之を決するのみ、其正邪曲直の如きは固より馬氏の問ふを要する處に非ざりし也、詐欺虛言も彼に取りては往々無二の良方便たりき、若し夫れ彼が自ら聲言して其說く處悉く是れ『アラー大神』の啓示天敕なり、彼は之を彼が嘗て其愛馬ボラークに駕し、アラビヤよりエルサレムに行き、更らに九天の上に登りて親しく上帝（アラー）の附囑を受けたる處なりと爲すが如きを見ば又吾人の言のあやまらだるを知らむ、彼は又自ら絶大の豫言者なるが故に如何なる大重の罪を犯すとも彼に於ては尋常の中にし德品には何の妨げなしと爲せり、特とに最も甚だしく彼の非理想的性格を暴露する者を彼の戰爭と虐殺との行爲とす彼れメヂナより起つてメッカ遠征の途に上ぼるや蓋し其目的とする處はメッカの富豪を襲ひて其所有を掠めんと欲するにありき、更らに進んでメッカに入る、是れ彼が當初巡禮者として來遊したりし處、遂に之を攻めて陷落せり實に西暦六百三十年の事なり、爾來メッカは回々教中心の靈場なり、巡拜參詣の徒四方より來集する雲の如く今日に至るも未だ曾て絶ゆる事なし

懦婢十萬の兵を率して城を屠り陣を陷いる丶獰猛の將軍なる馬合默は、福音超世の道を傳へて民を化し世を救ふ智德の預言者たる馬合默よりも更らに偉大なる英雄なりき、彼れ一たび激すれば怒髮冠を衝いて針の如く忿々の情曾て自ら制する事なし、數ば瞋恚の劒を按じて復仇の血を流せり、斯の如くして幾多猶太亞種族の人は不幸にも其白刃の紅露と消へたり、其他少しく彼の逆鱗に觸れしの故を以て彼慘忍なる弄殺的災害に遭ひし者蓋し其數を知らずと云ふ、

夫れ斯の如くして彼はアラビヤの首領となりたる也、其の人民は半ば屈從的に半ば迷信的に之に服從せり、他宗より回教に移つる敢て複雜なる條件を要せず僅かに

アラー大神の外我曹の崇事す可き神は二無く別なし、而して馬合默は之が預言者なり』

の數語を承認口唱し、別に僅々二三の儀式を守れば即ち足れりしを以て、無告憐れむ可き小民の内には隱かに猛將馬合默の無情なる利劍の災に遭はんよりは寧ろ『コーラン』所示の宗教に歸して以て身の安全を計るに如かずと思惟したる者敢て少からざりしや疑ひなし、斯の加くして其宗教に歸入したる者は各其產業所得の十分一を喜捨するの義務を强ひられたり、此外馬氏が戰勝の利益として占取したる領土の收獲五分一も又必ず之を教長に納めざる可からざりしが故に馬合默の倉庫には無限の財寶滿々として堆積し、曾て斷ゆる事なく其行動をして一增自由ならしめたりき、則ち有爲腹心の人物を任用して之に莫大の報酬を給し以て布教の事に從はしめ又常に蠻勇決死の冒險者を以て組織する一團の强兵を養ひ以て不時に備ゆるを得たりき、夫れ斯の如く其民衆の上に政治的權勢と畏服的威風とを擅にしたるの一事に至りては三祖師中蓋し馬氏を以て第一と爲さゞる可らざる也

三、耶蘇

若し夫れ成切の大小は只其有形的結果の如何に依りて判斷す可きものありとせば、前二祖師の所得に比し耶蘇の事業の收果として見る可き者の少なき何ぞ夫れ彼の如く甚だしかりしや、僅々三年千日の傳道而かも多くは風雨逆旅の間に於て

し、ガリラヤ湖畔の春も、花に戲むるゝの遑なく、橄欖山頭の秋、月慨世の淚に晴れず、轗軻落寞辛酸具さに嘗め盡くして漸く贏ち得たる處の者は何ぞや、嗚呼彼の二聖が各勝利の高樓に上り、一切成就の功績を以て自ら莊嚴する時に當り、我祖耶蘇は人生に於て最大の苦痛たり、又無上の恥辱たる十字架上に一斗の寶血を流さゞる可らざりし也、誰か其彼我の間に於ける外見の懸隔、斯の如く甚きを見て驚かざるものあらんや、而も價値を定む可き事物の眞相は外觀に非ずして實質にあり、何人か北斗を以て月よりも小なりと云ふ者ぞ一たび耶蘇の偉大なる人格と、其燦然たる教法の光輝とを實見する者は必ずや兩者の間日を同うして論ずる可らざる者あるを知るに至らむ、請ふ吾人をして耶蘇の人格が何故に肉眼所見の大日よりも、實際に於て一層偉大なる北斗たるを得る者たるやを少しく論ずる處あらしめよ

彼れヨルダンの河れに立ち洗をヨハネに領するの時、心境忽然として洞開し、神治の天國を地上に建設す可きの大任を以て天之を彼に附囑する者なりとの自覺勃然として禁ずる能はず、爾來傳道教化の事を以て天命の職務也と確信し、行住座臥此念を離れず、死に至る迄曾て一日も懈怠せざりき、彼れ此職を以て天命の本分ありと悟るや先づ退いて荒野に趣き之が實行の方法に關して反覆丁寧に思惟し、冥

想食を斷じて苦慮する事四十有日夜の長きに及べり、方略既に定つて意之に一決するや直ちに出てて道を傳へ、又一歩も遲疑躊躇する處なかりき、渺たる邊土の一木匠、社會公衆の前に立てば忽焉として古今秀逸の大預言者也、彼は佛の煩悶と逡巡なく、また神經的たる馬が時々心中に感じたる自暴自殺の念の如き者絶へて無かりき、其云ふ處は其行ふ處にして其の行ふ處は上帝の命ありと信する處なり、佛と馬とは自ら救世度民の導師たる位地に登り、耶は則ち天來の救主たり、印度の世尊は叫べり、八苦生滅の大海を渡たる妙智の法船は發見せられたり、涅槃不退の彼岸に上らんとする者は速かに來て之に乘せよと、アラビヤの聖者は曰く、神は獨一にしてマホメットは之が預言者なり、諸民來て之を拜しはた其教に順へ、背く者は禍ありと而してナザレのイエスの福音は曰く、天國遠からず此土及び汝の心にあり、宜しく愛神愛人の正道を歩して之を證せよと、彼が社會的出現の狀態も亦をのづから後の二師と趣きを異にせり、彼は釋迦の如く自ら好んで貧乏の地に下り、はた自ら撰んで乞食の徒あるが如き事を爲さず、若しくはアラビヤの狂聖の如く權謀術數によりて自已の教勢を擴張せんとするが如き事を爲さゞりき、彼れ婚姻の樂安に連りては熱誠以て之を祝し嘗て釋迦の厭世的悲歌を謳はず、彼れ法敵と卓を同うして食するに當りても、無上の福音を說いて惜まず、唇頭嘗て馬氏の怨恨と憎惡の語焰を泄らさざりき、彼の好んで着く處は神聖と仁義の道にして悖德不義の地を惡くむ事蛇蝎よりも甚だしく、況や不正の手段を用ひて己を利せんとするが如き事をや、彼は此道と此心とを將て其救世の偉業に着手したるなり、彼は法の爲めに妻子を相去るの要を見ざりき、而かも骨肉の親を忘れざるは人情の自然也、彼は先づ其故郷の地に於て福音宣傳の初聲を發し、後數ば此に歸りぬ、彼れ十二の門弟を得るや之を伴ふて國内を遍歷し萍離蓬斷嘗て一定の住所あかりき、佛は愛住の精舍を淨林の中に有し、馬氏は嬖妾を容るるに別墅をメヂナに造り常に之に流連して樂とせり、然かも耶蘇は然らず『野狐穴あり、飛鳥猶は巢を有す、然れど人の子は枕する處だに無かりし也、彼が生誕の地としてナザレを思ひ神殿所在の地としてエルサレムを慕ひ、親友ラザルの家を愛し、はた默念祈禱の好場としてゲッセマヂの花園を貴びたりしは恐らくは事實ならむ、然れども其の一も彼の所有にてはあらざりき、否此等適意の處も只僅かに彼が瞬間の休息地なるに過ぎずして東西就れの地も彼をして席温かなるを得せしめたる者は有らざりき、妻子珍寶乃至寸土の地と雖も苟くも彼の所有と稱す可きものは初めより嘗て之ある事無かりし也、

又彼が傳道事業の如き其生前の成功として、之を佛馬の二師に比すれば僅かに九牛の一毛のみ、彼も亦社會的に多少の知己を有したりき、而かも其範圍は至て狹隘なる區域に止りて當時社會の勢力たりし中流以上特とに宗教者の階級は殆んど彼を度外に視其之あると知らざる者の如くなりき、釋迦に說法四十年の年を假し、馬氏に征服二十年の時を與へたる天は僅かに三年の短日月のうちに彼をして無比至難の業を爲さしめたり、彼が法敵の如何に勢力ある障害なりしかは、其一が當時天下の支配力たりし羅馬人たり、はた他の一が傲慢不遜にして且頑迷不靈なる『パリサイ』宗徒たりしを見ても知る可き也、

其信徒を造るの方法に於ても彼の撰びたる處の者は自ら他の二者と相異なる處ありき、彼は佛馬二祖師の如く歸依信誓の例式文を制定し發心求道の新入者に口唱を强ゆるの擧を學ばざりき、彼に武器軍兵なし何んぞ戰爭を以て異教者征伏の方便とせんや、只博愛の心を以て慈善の行ひを爲せるのみ、佛眼之を以て三惡の一に居る者なりと指視したりし愚痴闇昧の小民は實に耶蘇が滿腔の同情を傾けて教養したりし處なりき彼が仁業の報酬として其歸依者に要求したりし者は敢て金銀財寶に非ず、只一身罪惡の穢土を離れて心信實、忠誠の德を樹るにありき、是れをかの强られて寧ろ不自然的儀式的に改宗の旨を告白すれば足れりと爲せし者に比して其困難の度決して同日の論に非ざる也、彼此を以てか馬佛兩祖の如く其教義を數語の短成文に制定する事なく寧ろ彼の全人格(智情意の三用具足)を以て人心を感化せん事に勤めたり、馬佛の二祖は一定の誓文を作りて教義の凡てを之に込め、また教團の制度を設け、爾來宗教の發展上遂に動かす可らざる窮屈の柵壘を築きたり、而かも耶蘇に至りては然らず、其期する處は只內的生命に活氣と功果あらしむるにあり、即ち宗教の感化を以て信徒の內的生活全部の力たらしむるにありて敢て之をして政治的、社會的、儀式的規則の如き外的有形の制度たらしめざりき、若し斯の如くせんか、人をして空しく宗教道德の奴隸的服從者たらしむるのみ、茲に於てか彼は只靈を以て靈を化すの主義により、專ら精神的教導を以て人民を風化したり

之によりて是れを見れは、耶蘇は實に言語の全意義に於て世界的宗教を樹立したるの大導師なり、蓋し彼の宗教は全人類本來の精神的需要に適應する精神的宗教たるが故也、神與孰れの處にか之を抗むの理由を有する國民あらんや、三聖等しく滿天下の蒼生を救濟するの大願を發して起てり、而かも能く其目的を達し得たる

者は耶蘇一人のみ、彼が最大の目的とする處、人をして新らしき精神の衣を着け、新らしき精神の人とならしむるにあり、其所謂新らしき精神とは、實に愛一字の妙體妙用なり、仰で天上の神を愛し、俯して盡十方の衆生を愛する即ち是れなり、彼の爲めに最も貴重肝要かる處の者は理論的乾燥の教義にあらずして、活焔々たる靈の生命なり、偶像と儀式とにあらずして救濟にあり、其所謂救濟とは一に人をして罪惡所染の塵境を脱して清淨高潔の行を爲すの地に附かしむるにありき、誰か又之を容易の業と云はむ、而かも彼は此難中の至難事を成就したり、釋尊入滅の時や無數の門徒其病床を圍繞して爲めに永別離の涙を濺ぎ、馬合默が死するに當りても之を哀惜して其墓畔に痛哭する者少からざりき、而して獨慘怛悲痛の極を呈せしものを耶蘇終焉の光景なりとす、其最後の屠所に趣くに當り彼に伴ふ者は僅かに十一人の弟子あるのみ、而かも是すら災害の身に及ばん事を恐れ多くは中途にして師を棄て去り、只悄然たる双影の相憐れむ者の外、一人の存するをも見ざりき、其外觀失敗の悲狀何ぞ夫れ斯の如く甚だしきや、然れど是れ只外觀のみ、若し一たび其精神的勝利の高大赫々たるものあるに見至らば、必ずや荊棘の草門を排して直に、百花爛漫の大廣園を蹈むの感なくんば非ざる可し、古今東西何人か能く此偉人の右に出て、桂冠の光を競ひ得る勝利者たる者ぞ

第三、三祖師の終焉に關する歴史的事實に就て吾人の知り得る處如何、

一、釋迦の入滅

釋迦牟尼佛法輪を轉じ、方便言說する事四十有五年、初め鹿野苑に阿若憍陳如を化してより跋提河最終の說法に至る迄前後三百餘會、有緣の衆生皆己に度し、訖て涅槃を娑羅雙樹の間に現ず實に紀元前四百八十年二月十五日の夜半とす、最も信據するに足るの傳說によるに、パーパ市の金工チュンダ釋迦及び其團衆を供養し佛に薦むるに豕肉を以てしたりしが、是れ偶ま彼が病死の原因とおりし也、彼入滅の前一夕死の將さに近きを知り其門弟に謂て曰く

汝曹沙門、我れ汝曹に告げむ一切世間の法一として無常ならざるおし、汝曹宜しく精勵して解說を求めよ、

其次日彼は平常の如く城中に乞食し將さにクシナガラを以て示寂の地と爲さんと欲したりき而かも彼はクシナガラに達するの前己に業に無常の刼風に遭ひた

るなりき、彼再び其徒弟を集め遺教最後の演說に悲嘆する徒弟を慰めて曰く、

我れ假令ひ死すとも我法は殘らむ、汝曹比丘悲惱を懷く事勿れ、若し我世に住む事千劫なるも、知る可し世は皆無常にして會者必ず離るゝの時ある事を、我滅せば汝曹或は思はん人天今や無二の導師を失へり、我曹は最早や事ふ可きの主を有せずと、然れど斯の如きは非なり、我說法と我戒律とは我滅後に於ける汝曹の聖主なり、汝曹比丘自今已後當さに之を珍敬尊重して闇に明を見、貧に寶を得るが如くなる可し、當さに知る可し此は則ち是れ汝曹が大師かり、若し我れ世に住するとも此れに異なる事なけむ、我が諸の弟子展轉して之を行せば則ち我色身常在して汝曹と共にある也、故に又憂惱を懷く事勿れ、汝曹比丘只當さに一心に出道を勤求す可し、一切世間動不動の法は皆是れ敗壞不安の相なり、我今滅を得る事惡病を除くが如し此は是れ應さに捨つ可し、蓋し罪惡の物なり、假りに名けて身と爲す老病生死の大海に沒在せり、唯有智の者のみ之を除滅し得て恰かも怨賊を殺して歡喜を得るが如くす、汝曹比丘當さに我宣揚の法により如說に俯行して此大海を出離す可し、汝等且く止みね、復た語る事勿れ、時將さに過ぎんとす、我今滅度せん、是れ我が最後の敎誨なり、

是れ豈釋尊最後の說法に非ずや、知る可し、佛は其生涯と敎義とが悲慘なる厭世的のものたりしのみあらず、其臨終の刹那に於ても亦決して樂天的希望的の語を出さゞりし事を、彼の死は色身永遠の消滅なり、虛空大忘の還元なり、彼の法身常在の思想の如きは蓋し後來發達の佛陀論のみ、釋迦の與かり知る所に非ず、其師の臨終に際して之れを痛嘆哭泣するは門弟子として寧ろ自然の情に非ずや、而かも釋尊は之を停むるに只、生者必滅會者定離の理を知る可きを以て、又其れ以上の慰安と敎誨とを與へざりき、曰く、人生を厭ふ可し、涅槃歸空の道に入る可しと斯の如き悲哀の言によりて無上の法樂を得んとす、豈夫れ易すからむや、

最後の垂訓全く終り、右脇にして入滅す、玉體は之を拘戸城北門の外、河を渡り三百餘步の處に於て荼毘一片の煙に附し、遺骨は之を八國の王に分配し了りぬ、

二、馬合默の最後

遮莫馬氏が生涯の他の部分に就ては今茲に之を云はずとするも、少くとも其臨終のみは確かに頌贊す可き者にあらざりし也、春秋二十有餘年の間彼は自ら稱して神來の預言者かりと爲し、己が敎權の治下に多數のアラビヤ人を集めて威風堂々又敢て何者をも其前に立たしめざりき、而かも無常の悲風吹き來りて一たび其身

を吹けば、果然彼亦尋常の地を去る甚だ遠からざるの人たる實相を示したり、

彼が從ひたりし數度の戰役より來る疲勞と、發作的宿痾の不斷なる襲擊と更に又通例一樣ならざる肉慾の耽淪とは幾もあらずして彼の軀骸を永眠不起の褥上に横たへたり、彼が病死の近因が有毒性羊肉を食したるにありて恰かも彼の豚肉の釋迦に於けると其趣きを同うしたるも亦一奇と云ふ可き也、彼れ羊肉の中毒により、再び起つ可らざるを知るや、則ち神宮に入りて參詣の群衆に告別懺悔の式詞を終へ、靜かに死の時の至るを愛妾アイシャの家に待ち、此間毫も死を畏るゝの色を示さゝりき、然れども所謂斷末摩の痛苦身に迫まるに及び、彼は轉輾反側して遂に病床より墜落し、號叫慟哭、殆んど狂者の觀を呈すに至れり、妻妾等彼が平生の壯語に似ず其臨終の卑怯斯の如きを見て心に輕罵の念を懷き冷然之を諷して曰く

汝永遠の信仰と希望とを有し玉はざるか、然らずんば汝の呻吟何ぞ夫れ斯の如く騷然たる、我等の一人にして若し狼狽汝の今の如くんば、汝はた之を何とか云はんとし玉ふや、

馬合默之を聽き、怒然として答へて曰く

預言者の如く痛苦を感ずるもの、世間また是れ無き事を汝等未だ知らざるか、懊惱苦悶の狀、益々傍觀するに堪へざる者あり、其妻妾交も之を慰藉し僅かに鎭靜永眠の眼を閉ざゝしむるに至りぬ、彼が終焉辭世の言は曰く

我は今より往つて快樂無上の天界淨土に生まれ聖衆中第一の善報を受けむ、

時に西曆六百三十二年の六月なりき、彼の遺骸は次日之を彼が終焉の場所、即ち愛妾アイシャの宅地に葬れり、爾來此埋骨の地は回教靈場の一となり、深伉參拜の人今に至るまで陸續として嘗て一日も斷ゆる事なし

三、耶蘇の永眠

三聖の臨終中最も偉大高絶の觀を示す者を耶蘇基督の最期とす、年齡三十の上に出る事多からず尙有爲の春秋に富めり、血熱氣鋭の身、將さに大に成すあらむとす、而かも其偉業の中途に於て卒然不慮の死に見舞はれたる也、彼が其生涯の中得意の絶頂に達したりしは實に悽愴慘怛たる最後の舞臺に上る前僅かに瞬間の事に過ぎざりき、是れ實に彼が最後エルサレム入城の時なり、見よ狂する群衆は彼を迎へて王と爲し、優待歡呼の聲洋々として波濤の春岸に謳ふが如きものありしを而かも何ぞ知らん是れ只だ將さに滅せんとする燈火が暫く微光を放つの夫れおらんとは、此光榮の幕は瞬間にして終局を告げ更らに廻轉して開かれたるものは何

ぞや嗚呼是れ實に滲惚至愴世界の史上未だ曾て之あらざりし悲劇の活演に非ずや彼れが門弟の一にイスカリオテのユダなるものあり初め耶蘇に屬するに『メシヤ』的偉業の前途を以てせり、而も其末路の形勢益々非にして彼が希望の全く水泡に歸し了せんとするが如きものあるを見るや悵然として衷情喜びざるの色あると共に其が生來の弱點たる黄金の魔誘に屈し易すかりし心勃然此時に至りて動き又自ら禁ずる能はず、即ち此の失望と貪欲の念とに驅られて遂に師恩の高きを忘れ窃に其法敵に通じ銀三十を以て之れを賣るの密約を結ぶに至りぬ、

耶蘇が最後の致命地に赴くの順序は實に斯の如くなりし也而かも基督のこれにつくや、從容自若として恰も歸するか如く顏容皆て憂惶の色を示さゝりき、これ蓋し其心地清々瓏々塵埃一點の疚ましき者を存せず俯仰天地に恥ずる處無かりしが故也更らに又此死を致す所以のもの敢て利己我欲のためにして果た無謀失策の結果として然るにも非ず一に救世濟民の犧牲として勢ひ事の茲に至りたるを自ら悟る處ありたるが故ならずんば非ず、彼れ其死の近きを預知するや、一夕門弟子を集め遺敎勸諭又懇切を極む且つ彼等師弟の情誼を永久に保持紀念せしめん爲め殊に晩餐の聖式を搬始したり、蓋し彼等をして彼假令滅すと雖も其の所謂肉と血とによりて表號せられたる元氣と精神とが永久不離彼等の內に存す可きを敎ゆる也佛は其滅後に於て正法存住するが故に宜しく之を聖師と爲す可しと說き以て門徒の心を慰め、馬は天堂得入の未來觀を遺して後進の信者を勵ます、然してイエスは之を慰むるに生命不滅の信念と靈的交通の永續を以てす、蓋し晩餐に用ゆる飲食物は實に之が徽號たるに過ぎざる也、之を要するに佛馬の二祖師は幽現二際の隔絕を語り、イエスは靈交の存續を敎へて生死一如の妙理を證せる也耶蘇の耶蘇たる處は其形體にあらずして其心術人格にあり、此靈的不滅の法身は敢て大寂の涅槃に消へず、はた雲外天堂の樂所に沒せず、常住不斷生々として門徒の中に永存せんと、嗚呼是れ實に耶蘇が末期の信念に非ずや、其自覺意識の堅牢なる誰か又慨嘆せざらむや、

彼は啻に言語を以て其門弟に遺敎必たるのみならず更らに又優渥なる天惠の彼等の上に降らん事を赤誠以て神に祈りぬ、此慰籍の說法と祝福の祈禱とを終はりて後耶蘇は獨りヂッセマヲの花園に赴けり、是れ彼が當面の大難題たる如何にして其苦がき運命の杯を飲む可きやを決せんと欲するが爲め也、且つ祈り且つ考へ傷心血淚を濺ぐ事多時嗚呼是れ何の爲めありしか、

彼は敢て死を恐るゝ者に非ず、否彼が永生の信念中に死を恐るゝの餘裕は非ざりし也、而かも彼をして『父よ、此杯を我より放ち玉へ』と祈る事三次ならしめたる者は實に奸惡なる人世の罪惡なりし也、憐れむ可き濁世の人類は此高潔至誠の聖者を殺すを以て惡にして不義なる所以を自から知るの明を有せざりき、然れど彼の慈愛の寛容と、其謙遜の忍耐とは、能く神意の存する所を成就し遂に彼をして最大の勝利を得せしむる道德の好武器なりき、彼は忍びて凡ての苦痛に堪ゆるを以て天意と思惟し、怒氣を含みたるの言、怨恨を交へたるの詞は終りに至る迄嘗て彼の唇頭に上らざりき、彼は最後の呼吸を以て仁恕海濶の愛言を發し、白刃脇を貫いて痛疼苦絶の刹那すらも猶且つ他の死刑に處せられたる者を敎誨慰籍するを忘れざりき、彼は罪なうして磔殺の極刑に處せられたるも而かも之を怨らさず、却て、其非なる所以を知らずして擧の此に出づる法敵の罪の赦を天に向て祈りたりき、彼が臨終の時彼を看護介抱する者おかりしも彼は之を怨らみこせず、彼が愛せし門弟子のうちヨハネ獨り止りて他は悉く散逸せり、此ヨハネすら尙遠隔の地より之を望見したるに過ぎざりき、人若し我に向て神の愛世果して之ありや否やと問ふ者あらば我は架上の彼を指して示さんと欲する也、佛馬二祖師の死は常人の死と敢

て甚だしく異なる所おかりしと雖も獨りゴルゴダ山上に無罪の血を流したる義人の最後は實に是れ絶世の偉觀おかりき、彼の十字架上燦然として輝く者は何ぞや、是れ豈に人世を顧みる神明の愛の顯現にあらずや、六月の炎天尙ほ且つ白雪皚々たる者は玉芙蓉の高峰なり濁惡の世而かも耶蘇の人格にして初めて神愛の妙光を擔ふを得たりし也、羅馬派遣の將軍、當時之を目證して曰く『此人は是れ誠に神の子なり』と嗚呼實に神の子にして能く神の愛を顯はすを得し也、然り而して彼の死は決して萬事の終焉に非ず實は是れ新生命の源泉なり、彼が偉大なる人格の感化は、一層充實强勢の力を以て爾來其活動の妙用を示し來れるを見ずや然り耶蘇の形骸はゴルゴダ山上の土となりしも、其靈的生命は人類世界の中に存して今尙ほ活々たる感化の大勢力たるを見る也

第四、三敎祖の歷史的性格

一、釋迦

佛陀は正廉潔白の性格を有し自ら衆生濟度の大任あるを自覺したるの豫言者にして至誠忠實救世の正法を其同胞に傳へて終生倦て倦むことなかりき、彼れは必

に大法を求むるの故に身五慾の樂みを貪ぼらず、執着羈絆を脱し安然として火宅の外に逍遙せり、色慾の憎むべきを知て女人に遠かり彼の馬合獸がよりて以て其天職の人たる品位を傷けたりし淫猥の罪業を犯かさゞりき、彼は貧窮困難の人なりしも之を以て意とする無く偶、富を以て彼れに捧獻するもの有るも彼れは之によりて心を動かすものには有らざりき、出ては三衣一鉢悠然山を下りて乞食し入ては四諦八道の妙理を說いて衆生を度するの外皆て權勢について野心を抱かずはた寸毫も己れが名聞の爲めにする處なかりき、彼れ教義を人に傳ゆるに苟くも强ひず況んや陰險卑劣の手段を用ひて己れの教勢を張らんとするをや、然り彼は名聞利益の外に超然として道を樂むの人なりし也、

彼れの性格中吾人が發見する此等の諸德、美は即ち美なりと雖も而かも之を以て直ちに吾人の則る可き理想的道德の標準と爲す能はざる者あり何ぞや、蓋し彼れ此等の諸德を束ぬるの大網を缺く、「愛」の缺如即ち之れなり、彼は固より其門弟子に教ゆるに慈悲の事を以てせざりしに非ずと雖も而かも彼の慈悲や多くは口頭舌端の空言に止り進んで之が實踐躬行の實例を以示する處無かりき、彼は出家の沙門となりて世間的煩累を脱して而かも自ら力作せず只他人の供養に生活して滿足したりき、彼は人間の活計的業務に無頓着なりき、彼は社會の進歩を等閑に附し、特とに苦役の勞働者、婦女子、奴隷等の如き故なく社會の下層に呻吟せざる可らざりし者の爲めに何等改善の策をも講せざりき、彼の眼中祖國なし、況んや同胞國民の觀念の如きをや、四性階級の惡制度の如き敢て改革の必要ある事なく、はた一般の活計的營業も悉く無意義にして毫厘顧慮の價なし、是等俗事は皆無常にして畢竟壞滅す可き者なるが故に涅槃を願求するの僧徒は須らく一切を過眼の無煙と觀じ、冷々淡々、枯木の如く相關せず流水の如く相知らざるを可とすと、此の觀念を以て修行の標準とす、彼が毫も國民の社會的生活の實狀を顧みず、はた改良進歩に獻する處無かりしも亦宜ならずや、否彼は正反對の教義を述べて曰く、出家の淨衆は凡て此等塵世の絆累より脱して自由の身とならざる可らず、蓋し執着する處彌よ多ければ輪廻の車も亦益々回轉の度を增加すれば也と、佛又神若しくは之に類似して人間以上に冥加の靈威力を有する存在者を立せず人は自ら生死の苦海を度達する方法を工夫せざる可らずとなし、何者に限らず現世の云爲に意を留め若しくは之に愛着せるは直ちに自個煩惱の原因なるが故に惡なりと斷じ去りき、如上の見地を以て悟入の大門なりとし、其從者たらむと欲する者をして、入ては山林

の靜所に退き、己れ出離の道を得んと欲するの故を以て無法寧ろ野蠻にも其妻子を孤寡饑渴の悲境に遺して顧みず、出でては衣食の布施を乞ふて煩を無害の民衆に加へて憚る處なきに至らしむ、此點より之を見る、佛を以て人間の本性に反する不自然の化身なりといふ又不可なき也、若夫れ一國の人民が一時に擧て彼の徒弟たる事ありとせんか、其國民の運命は唯滅亡あるのみ、然り佛は或は生存競爭裡の格闘に堪へざる一種の臆病者即ち所謂幽鬱悲觀の厭世者流の好模範たる可からむ而かも生々を以て主義とし、進取を以て本領と爲す底の意志と力量ある活働の人間を支配する事は到底其能ぐする處に非ざる可き也、少くとも進取的新日本の國民の如きには決して適せざる非模範的人物と云はざる可らざる也、

二、馬合默

馬氏は釋迦と殆んど正反對の性格を具したる人なりき、剛毅活大常に愉快の精神に充滿する人なりき、彼れは生活に對して頗る娯樂と興味とを有しこれによりて能く人生の逆旅に處して大なる成功の跡を殘すことを得たるの人なりし也、佛の幽鬱なる悲觀と倦厭の情とはこれを彼れの心裡に、求むるを得ざりき、彼れが自ら救世の導師たることを覺悟したるはまた佛と相似たりと雖も而も佛の無神論者たるに反して彼は慥に唯一神の存在を信じ、之を民衆に傳ゆるを以て己れが畢生の大任となしたりき、彼は自ら其內心の必要に驅られて此神を拜し又同一の理由を以て他の人にも强ひざる可らざる所以を主張したりき、彼れ人に對しては溫厚又篤實、恭謙謹愼能く己を持するの人なりき、彼れ無限の富を所有せりと雖も敢て之によりて奢麗驕侈の淫樂を恣にするの事を爲さず、却て質素簡單の生活に安じたりき、

夫れ斯の如きは疑もなく彼の美德として賞讚を價する處のものたる也、然れど此れ只彼が性情の一面のみ、否一部のみ、其他の大部面に於て吾人は闇々として墨の如き者ありて存するを見る、若し夫れ彼が神を拜し神を恐れ、其天命を奉じて職に傳道の神事に從ふと稱する者にして欺瞞人を曖昧の裡に籠絡するを以て毫も恥ず可きの事と爲さず却て其自個の意志を貫ぬくの方便として妄語能く民衆を欺むくを以て當然の事となし時としては自ら其詐術に長じたるの人たるを誇り揚々として得色ありしが如きに至りては吾人又何をか云はん特とに其性や急激火の如く激變の機測る可らざる病的情感の彼が如き者にして時に殘虐暴戾の活悲劇を演ずるある又怪しむに足らず、少しく彼の逆鱗に觸れたるの故を以て彼の虐

殺に遇ひたる者陽に陰に盖し其數算ふ可らずと云ふ、彼の所謂救世度生の聖事業は朱々たる紅血を以て之を彩ぎり、其人物の偉大と成功の秘訣は握つて彼の手中にある秋霜一口の利劍に存したる也、

馬氏が性情の傾向として賞す可らざる者の中特とに著大なる不德は彼の甚しく好色なりし一事となす、彼れが如何に獸情を逞うする荒淫の人たりしかは、其同一時に妻妾十二人を有したりし事實に徵しても知るを得可し、彼は將さに死せんとするの時すら尙且つ七人の妻女を近侍たらしめたりし也、其十二中殊に彼の寵愛を恣にしたるアブ、ベクルの少娘アイシヤが迎へられて馬氏の室に入りたりしは實に其齡僅かに九歲の時なりしと云ふ彼れ多情而かも其愛を公平一樣に分つ事能はず、甲に行いては乙を忘れ、丙に厚き時は忽ち丁に薄し、不貞、不貞、其恩言亦賴む可らず、嫉視怨言嘗て絕ゆる事無きも而かも彼顧慮する事無く、妻妾にして偶ま其輕薄無情の舉の預言者たる神品を具する人として毫も恥ぢる處なきや否やを詰る者われば即ち嚴然として答へて曰く

天使ガブリエル我に命じて斯の如く爲さしむ、云云と

世豈此に勝りて淫亂者の爲め好都合の託宣ある可けむや、アイシヤ一日其遁辭の巧妙を稱し諷刺一番之を揶揄して曰く

汝の神は、汝の慾望に同意する事甚だ懇切熱心なり、妾等薄命汝の多幸に向て轉た羨望の情に堪へず

彼の信念や鞏固の基礎を有せず朝三暮四、恰かも風に隨て飜る海波の如く又道念の陋毫も天來の神品と爲すに足らざるは右に述べたる處の如し、彼の神に對する頗る尊重嚴肅なるが如きあるも是れ要するに皮想的敬虔形式的熱神に過ぎず其情操の中、自淨の力と、愼獨の念とは全然之を缺きたりき、其道德品の卑劣、宗教情の粗笨なること斯の如きも而かも自ら之を知らざる者の如く嘗て向上的修養に毫末の力をだも用ひたるの痕跡を見ず、

之を要するに馬氏は到底不完全の人たるを免かれざる也、彼れも亦不世出の人豪なるが故に固より多少の長所と美德とを具有せざるにあらず、而かも其長を以て之を彼の短の甚だしきに比し、其美を以て之を其醜の大なるに較し來れば又實に數ふるに足らざる者たるを見る也、これ吾人が彼を以て敢て人倫の先達品行の模範と爲すに足らさる事、彼の印度の古聖が吾人の模範とするに足らずと爲したるよりも更らに著しきものなりとなす所以なり、

吾人々類の道念と品性の先達摸範として尊重敬服す可き者古來只一耶蘇基督あるのみ、彼が前二者に超越して特とに著しく發揮する德品の中最も大なる者を、宇宙の主宰たる神に對する絕大無量の愛なりとす、彼をして我は是れ神の子なりと感せしめ、更らに神と彼と其本來に於て同體不二なりとの宗教的自覺意識を保持するを得せしめたるも亦實に此愛なりし也、彼が最大悲哀の谷底に沈落せるの時は、實に彼が最も親切なる愛を以て神に事へたるの時なりし也、苦痛の雲影闇憺として希望の天日殆んど其光を失ふが如き時も彼が信念の大空には朗々明々曾て何物と雖も之を障ぎる能はざるものありて懸り、彼が熱神なる祈禱の聲は常に雷の如く之に通じたりき、彼が最後の呼吸をして大なる勝利の讃美歌たらしめしものも、はた、彼をして天より派遣せられし救世の導師なりとの神職を覺悟せしめたる處のものも實に神に對する愛の清淨心なりし也、

彼が斯の如くして神を愛するの愛は又直に人を愛するの愛たりし也、貧しき者は彼の豊祐なる愛の恩惠を得、苦しむ者は彼の深切なる愛の慰藉を受けたり、佛は愛著の黑障を厭ひて其親近を怨敵の如く棄てたるも、彼は同情の赤誠を献げて其隣人を兄弟として愛し、馬氏は自個の利害によりて時に其友を殺し、耶蘇は天父の神旨に從ひ遂に其敵の爲にすら己れの生命を惜まざりき、凡そ病を患ふる者、苦役に疲かれたる者、はた抑壓の重きを負へる者、苟くも彼の福音に歸回信從する者は何人と雖も必ず至大至深なる彼の愛日に照らされずんば非ざる也、然り現今に在りて、可憐なる病者の爲めに慈惠の病院を建て、勞働苦役の人を遇するに正當の法を以てし、特とに女性をして其奴隷的屈從の窮地より其適當の位地に復歸せしめたる者一として耶蘇中心の愛に淵源せざるは非ざる也、文明一切の進歩と發達とは一に彼の人格的感化より流れ出づると爲す亦必ずしも誇張の言にあらざる可し、彼の赤十字社の事業が人道發展の上に於て偉大なる慈善的組織たる事は既に世界の認めて且つ從事する處に非ずや、而して何ぞ知らん其因て來る處は靈活なるキリストの人格的感化にあらんとは、其他人類社會の進歩にしてキリスト教に負ふ處ある者一々枚擧に遑あらざる也、若し人あり自己並びに人類一般の理想の爲め、一個完全なる摸範的生涯を求めば、須らく來つて耶蘇の中に見出す外別に其途之れ有らざる可き也、

念に利己我慾の塵を留めずして身正義公道の淨行を脩し、心に大慈大悲の誠を有

して口天來の福音を述ぶ、其初めて起つや愛により、其行ふや愛を以てし、其殪るゝや亦實に愛の爲にするもの是れ我が耶蘇の生涯に非ずや、彼れ嘗て天に背かずはた人を欺むかざりき、歴史上一點罪惡の痕跡を印せずして、萬綠叢中の紅、彼れ一人よく人中の神化なりき、彼の實際的完全の半ばは彼が天賦の神品たりしが故に因ると雖も而かも其半ばは彼が自修鍛練して玉成したる處なりし也、沈思煩悶、事を爲すに當りては必ず先づ神明の靈前に於て、其心池に浮動する想波を試判し苟くも神意人道に反するものなりと認むる處は、斷乎として之を斥け、亦再び之を近けず、事を決し、事を作す、悉く神旨の存する處を察して後に之を決行せり、是れ實に彼をして聖中の聖、師中の師たらしめし秘訣なりし也、彼にして若し初めより凡ての誘惑に感動せざる木石の類なりしならば固より吾人の救主たるに堪へず、否少くとも吾人と同じく肉と血の人たる以上に何の異をも示さざりしならむ、而かも彼は修養自成の人たりし也、是れ吾人の仰で以て摸範的師表なりと爲す所以なりとす、

世を厭ひ人を避けて印度の聖者は僅かに一偶の悲觀を遺し、人を殺し世を欺いてアラビヤの猛將は僅かに假勝を僥倖に得たり、只愛神の心に住して愛人の道を行ひたるナザレの預言者のみ獨り能く超世の福音を遺し、はた無上の勝利を奏するを得たり、然り此福音に對しては彼の聖者が長廣破邪の能舌も亦動かすによしなく、此勝利に對しては彼の將軍が非道殘忍の鋭劍も亦用ゆる事能はざる也、實に耶蘇の人格は其何れの點より之を見るも前二者の上に超越する事數丈、特とに其意志の高潔純清にして而かも情的感化の深切なる點に於て吾人の師表と爲すに足る者古往今來只獨り此人あるのみなり、

第五、耶蘇を以て人類社界の模範、唯一眞實の救濟者たりと爲す果して當を得たるか

吾人は耶蘇を以て古今無比の大導師ありと爲すは啻に其人格の超越を見て然りと云ふのみに非ず否之より增りて彼を信仰する人の心情に及ぼす情緒改良の感化力が絶倫無比なるを認むるが故なり是れ敢て吾人の偏見にあらず、歴史は昭々として吾人の言の謬らざるを證するなり、佛は人をして冷刻なる厭世隱遁の僧たらしめ、馬氏は自負的迷信の子弟を製し之をして更らに乾燥なる儀式の奴隷たらしむ、而して耶蘇は全人類を導いて大愛至仁の神の子たる本地に至らしむ、佛は涅

槃滅度を以て人世の歸趣終局とし、馬氏は人に與ゆるに一新桎梏を以てせり、而して耶蘇は自ら新らしき生命の源となり又救濟の門を開らけり、佛は隱遁の閑堂を世外絶塵の境に造り、馬氏は孤劍神治暴政の王國を築けり、而して耶蘇は神の天國を地上に建立したる也、社會最高眞實の理想は耶蘇の垂示によりて初めて世に顯現す人が人としての目的地に到達す可き確實の徑路は獨りキリスト所蹈の模範に學んで之を行くの一途あるのみ、天地の主宰たる神明と冥合一致したる生活に勝りて慕ふ可く尊ぶ可き生活有らむや、而してキリストの一生は即ち此理想的生涯の標本を示すもの也人若し彼を其の主と仰ぎ衷心瞻仰して如說に脩行する處有らば、彼又遂に耶蘇所證の天地に遊ぶを得ん汝の心即ちキリストの心たり、此心直ちに神の心たるの妙境に到らば、天地を見るに佛の悲觀を以てせずして美妙讃嘆の歌を以てし神を拜するに馬氏の恐懼の心を以てせずして却て信賴平安の心を以てし人に接するに仁腸慈眼恰かも當年の耶蘇の如くなるを得ん能く人をして這の至境を證せしむる人格的感化の靈力に於ては、天竺の大聖も、アラビヤの英傑も遂に能くナザレの聖者と相伍する事を得ざる也、

第五章　三教祖宣揚の教義と、之より生ずる道德的結果

第一、三教は各由來根源の母教を有す、

三教等しくそが因つて來れる根源の母教を有す佛果涅槃の妙木は根をバラモン古教の林中に有し回教信神の鬼剃はアラビヤの自然教と猶太的基督教との溪間に生ず、然して新約救濟の源流は遠くイスラエル舊約の宗教に發せり、

第二、各源教の教義一班

一、婆羅門教

婆羅門教は印度に於ける僧的宗教にして、其が人民の習慣思想等に及ぼしたる結果は實に莫大なる者ありて佛教の如きも亦實に之が感化を蒙る事多く、動もすれば佛教を以て婆羅門教の教義必至の結論なりと爲すものすら之あるに至る、供犧祭典等の司式權、此教にありては全然僧侶の權理に屬し、從つて人民の上に威

勢を肆にする事甚だしく其跋扈の極は遂に階級の惡制度を漸次形成し來れり、階級を分つて四性と爲す司祭の僧侶は實に之が最上位地を有し、尊貴王公の如きも勢ひ其下風に立たざる可らざりしを見ても以て其勢力の如何に赫々たりしかを想知するに足らん其第二の性を『クシャトリヤ』と云ひ、王者を初め干城の武夫之に屬す第三を『ヴァイシャ』と稱して一般農工商の平民かり、第四の一級を『スードラ』と云ひ穢多奴隷の輩よりかる、而して他の三性が之を遇する殆んど動物の如く人格的權理の如きは毫末も認められざりき、

釋迦の功績は、彼の慈眼を以て、佛性平等の眞理を看破し、極力此惡差別の邪見を打破したる點にある也、其實際に於て釋迦説法の淨莚に在りし者多くは貴族の輩にして、軍人奴隷の徒は至て少數かりと雖も是れ一に彼の敎義の高尙難解に過ぎて無敎育者は自ら之に近くの緣かかりし事狀ありしが爲のみ、

婆羅門の敎徒が唯一無上の依經として尊重頂禮至らざる無く以て了義根本の眞理藏なりと爲したりし者を『ヱーダ』頌偈の聖典とす、此經典たるや蓋し太古の雅言を以て謳ひたる頌贊の歌集なりしが故に時代の推移に從ひ一般俚俗の通用語とは自ら相異なる者多く、遂に其註譯通解の便あるに非ざれば容易に理會し能はざる者たるに至れり、此に於てか古典の學者競て註解の書を著はし、一方に於て聖典の古義を當時通俗の用語に飜譯すると共に他の一方に於ては『ヱーダ』經卷神出の由來と及び、之が內容の合理的なる所以とを考證説明せんと試みる者漸く多きを加ふるに至れり、是れ實に婆羅門哲學の濫觴と爲す、斯の如く初めは單に『ヱーダ』古典の説明者たらんと欲したる者一變して哲學的思索家となり、或は有形的宗敎の儀式を否定して初めて神明の旨に合一者とかし、更らに甚だしきは物我二法の外別に神祇の存立を信せざる者すらあるに至れり、其他一派者の如きは『ヱーダ』の宗敎を脫して別に凡神敎の一大系統を樹立せり、彼謂らく、梵天は非人格的實在にして、指さす可き部分なく、分つ可き屬性なし、比論するに物なく、説明するに辭無し、一二に非ず、大小に非ず、唯言語同斷の實在なり、今此大娑婆世界の如きも固實に梵天の所生なりとす、而も其濁惡の相斯の如く益々甚だしき所以の者は他なし清瓏明淨の本源を去る彌よ遠ければ也、故に人世一切の云爲未だ一として苦に非ずと云ふ事無く、森羅たる萬象悉く無常壞滅の相を具したり、若し人ありて此苦集を遠離し爲樂不退の實地に證入せんと欲せば、須らく其本源に復歸して梵天の法海に圓融一味の合體を爲さゞる可らず、

此等の觀念や實に佛教に於て、重要の思想たる「苦」「輪廻」「解脫」等が因つて來る本源に、して則ち釋迦の取つて以て其立教の根本義と爲したりし處なり、

曰く三界は無安なり、猶ほ火宅の如し、集苦充滿して誠に怖るゝに絶へたり、生老病死乃至一切の法皆苦なり、皆無常なり、苦火熾然として燃へ、無常迅速にして休せず、有情非情の群品煩惱自ら燒き、流轉長へに沈む、傷む可く憫れむ可し、衆生皆決定して速かに其本源に復歸せざる可らず、然れど此還元は即時即刻に爲さる可き者に非ず、蓋し肉慾煩惱の絆、愛向執着の念は決して一生涯に斷滅す可きに有らず、輪廻轉生の後に於て初めて能く到達す可きものなればなり、一歩一進漸く俯練の功を積まば、遂には梵天と我性との間平等一味二無差別の融合を證し、理想の眞趣自ら現前するに至らん、

是れ實に此等哲學的宗教家普通の信仰なりき、此に於てか婆羅門の諸士家を出でて俗縁を離れ、或は山林の閑所に退いて座禪三昧の定に入り、若しくは苦難の淨行を俯して深く一道の所在を求め、風雲變態の外、靜かに理想境の現前を待ちたりき斯の如き靈的要求を以て出離の門頭を求めたる俯行者の林中よりぞ我が釋迦文佛の頭角は嶄然として現はれ來りし也、

二、回々教所出の本地

馬氏は畢竟するに時代の子たるに過ぎざる也、彼が父祖より相傳せられたる幼時の宗教は偶像崇拜教の一種にして其中心の靈地をカーバとす、(カーバは馬氏に先だつ凡そ數百年前の建立に屬し、口碑に往古アブラハムが其子イスマエルと共と經營したりと傳ふる立方の高塔にして後馬氏が自家の一教を建設するに當り尙之を保存して以て回教靈刹の一と爲せり)、彼れ此祖教に加味するに當時アラビヤ地方に行はれし猶太亞的基督教の教義數束を以てし、折中調合して以て「イスラム」の一大教系を大成するに至れり、彼の教義中、神明の唯一、死後の賞罰、永遠の存續、天上の樂園地底の苦獄、預言の照應、善根功德の必要、神書の天啓、等諸多の信仰思想の如きは全然猶太亞的基督教より剽竊し來りて以て己れの樂籠中の物とおしたりしに過ぎざる也、

三、基督教の母教

基督教も亦在來の宗教より出て、更に之れを成就したる者たるは人の知る處なり耶蘇は精神的に數千年の歴史を有する國民の中に出現したり、其國民が適從の歸地、處世の法規と爲したりし舊約の一書は彼の生るゝに先つて既に業に天啓靈示

の神書なりとして信受尊敬せられし也、彼は實に此の國民の宗教的精神の中に生まれ、此の聖經の宗教的、教訓に涵養せられたり彼は敢て聖經の所示を否定せず却て之を引用し、古來の宗教を破壞せず、却て之を成就したり、彼は徒らに古預言者を誹謗する事を爲さず却て之が正義の保證に勤めたり、然り彼が父祖傳來の宗教的根本義を以て其立脚の地盤と爲したりしは事實なり、彼の神を以て宇宙間唯一無二となしはたモーゼの律法を以て神命の規矩と爲したるが如き、若しくは『メシヤ』的新天地に關する故預言者の世界觀を認容したるが如き、其他或は靈魂の不滅、來世受報の思想と云ひ、或は舊約の聖書を以て神出の靈典なりと爲す信仰と云ひ一として舊約的ならざるは無く、否更らに彼は進んで之を己れが立教の基礎と爲したりし也、然れども忘る可らず彼は徒らに古來の宗教を器械的に襲蹈したりしに非ず、否之に加ふるに其獨得創見の新要素を以てして別に一大超世の眞宗教を建立したり、彼は藍より出て藍よりも蒼はく、種子より發して種子よりも大なる者なりし也、彼の二祖師と雖も其新宗教を建立するに當りて舊來の教義的材料に加ふるに各自獨得の靈資を以てしたるは亦固より爭ふ可らざるの事となす、而かも之を基督の內所證の實驗的要素多くして舊來の宗教は寧ろ其小部分たりし者に比すれば又實に日を同ふして論ず可らざるを見る也、然らば其所謂內所證の實驗とは何ぞや、蓋し彼が自ら神我一體常恒不離との宗教的大意識と之に伴ふ活動不滅の靈的生命と則ち是れなり、

第三、三教交互の關係、

佛耶兩教の間に歷史的交涉相關の形跡なきは今更ら云ふ迄も無し而かも耶回の二者間に在りては然らず、蓋し馬氏は初め其祖國の宗教より轉じて猶太亞基督教の信仰に移り、更らに之を脫體換骨して『イスラム』教なる一新宗旨を建立したれば也、

第四、馬氏の耶蘇觀

馬合獸の所說に從へば、耶蘇は天使ガブリエルの子生をマリヤの胎內に託してナザレの邊邑に降誕す、長じて一大預言者と爲り、神變不可思議の奇蹟を行じて人目を驚かす事數ば也、一代の事業として、彼は猶太亞人の爲めに蔑瀆破壞せられし律法を再び俯理するを以て任務とせり、世人動もすれば彼を以て法敵の爲めに十字

架上寃刑の死を遂げたりと爲せども是れ大に然らず實は神其無實の寃によりて極刑に處せらるゝを憫れみ代贖の偶人をして磔殺の架上に立たしめ一見以て耶蘇の如き觀あらしむ而かも是れ實は一個の傀儡に外あらざりし也、耶蘇は却て天然の壽を全ふし性理的順當の死を經たる後迎へられて昇天し、今尚アラー大神の前に在りと、然して馬氏自身は稱して以て空前絶後の大預言者と爲し且つ謂らく、我は是れ聖の聖、賢の賢なり、耶蘇と雖も畢竟我馬前の一塵に過ぎずと、然れど何の理由を以ての故に彼は耶蘇よりも大なりやの疑問には彼終に一言の說明だも與ゆる無かりき、

夫れ斯の如く彼は歷史上曾て耶蘇なる者の存在したりし事あるを知り、且つ其教義に關しても亦多く通ずる處ありたりき、而かも惜しむらくは彼の知識は僅かに耶蘇の皮相的一部面のみ、其神品的人格の偉大なる生命に就ては毫も彼の關知する處ならざりしが如し、否彼は遂に之を看取する底の眼識を具せざりし也、心眼の卑近既に基督の內的生命の特徵たる博愛慈善の精神と、淸廉高潔の情緖とか由て來る處の靈源に達せず、彼が徒らに皮相の形骸を摸倣するに止まりて、遂に耶蘇の靈的感化に浴する能はざりしも亦宜べなるかな、

第五、三教祖が立教根本の基礎として尊重唱道したりし教義の內容

一、佛陀乘教の第一義諦

師子吼の法座、釋迦口を開けば必ず之を云ふの套語に曰く、

兄弟よ、是は此れ苦の眞諦なり、生は苦なり、老は苦なり、病は苦なり死は苦なり、愛別離も、怨憎會も欲不得も乃至一切の事として苦に非ずと云ふ事なし、一言以て之を掩へば曰く、個人として生存するは其實直ちに衆苦の充滿始終なり

兄弟よ此は是れ苦の因地本源に關する眞實の敎義なり、生を希ひ、快樂に愛着するの熱心は綿々として長く盡きず、轉々たる輪廻の事、今時此土に露命を寄せ、他時忽ち去て他所に向ふ苦界常沒の衆尙我性の執着に驅られて悟らず、空しく三惡の蝶を追ふて長く六道の迷途を出る能はざる也、

兄弟よ、此は是れ衆苦斷滅の妙諦なり、生んと欲するの情を滅し、肉慾煩惱の邪念を斷つ可し、之を憎む事怨敵の如く、之を去る事痼疾を去るが如くならしむ可し慾惡全く離れ、煩惱能く斷じて速かに解脫の門に入らざる可らず、

兄弟よ此は是れ斷苦の眞境に達せしむる最勝無二の捷徑なり、此は是れ我の發見に係る眞實無等の正道なり、正道に八ッあり、

一に曰く、正見(能見眞理)

二に曰く、正思惟(無邪念)

三に曰く、正語(言無虛妄)

四に曰く、正業(乞食)

五に曰く、正精進(脩行無間)、

六に曰く、正定(一心眞空)

七に曰く、正念(專憶善法)

八に曰く、正命(專脩淨法)

人若し如說に正念して此正道を脩行せば、煩惱を斷絕して解脫を得ん、解脫とは世緣を離るゝ事なり、再び『生』を得ざる事なり、輪廻流轉の羈絆を脫して大忘不退の涅槃を證する事なり、

見る可し釋迦は衆苦充滿の火宅ありとして人世を觀じ、此火宅を遠離して長く不退の解脫地に達するを以て最後唯一の目的と爲せる事を、かの八正道中、正業、正命

と云ふが如き一見して基督敎の道德的觀念と相似たるが如しと雖も而かも到底同一の意義を以て之に望む能はざる者とおす、何となれは其期する處の目的兩々相異りて遂に同一の結果に出るを預想し得可らざれは也、

二、回敎に於ける重要の敎義

馬氏が其信徒に向て嚴然として命令する處は曰く

アラーの外に神なし、馬合默は之が預言者なり、

之によりて之を見るに『イスラム』敎は嚴格ある一神敎にして、神人交互の關係も亦從つて推知せらる可き也、則ち人は神の前に在りて正さに善良正直の道を步せさる可らさるの理由も自ら知る事を得る也、

三、基督敎の根本義

耶蘇は嘗て斯の如き眞言呪文の類を遺さず蓋し基督敎は文字を以て組成したる敎理に非ず心を以て天父と一致したるを自覺するの宗敎たるを以て也而かも若し强て基督敎の根本義を總括的に聞かんと要する者あらば吾人は之に答ふるに下の如く云はんと欲す、馬太傳二十二章第三十七乃至九節に曰く

汝心を盡くし、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛す可し、これ第一にして大

なる誡なり、第二も亦これに同じ己れの如く爾の隣を愛す可し、

是れ實に基督教々義の二大綱領にして彼の所謂主の祈禱も亦自ら此義を説明する者に異ならず

天に在ます我曹の父よ、願はくは爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ玉へ、爾旨の天に成る如く地にも成らせ玉へ、我儕の日用の糧を今日も與へ玉へ、我儕に罪を犯す者を我ゆるす如く我儕の罪をも免したまへ、我儕を試探に過はせず惡より拯ひ出だしたまへ、國と權と榮は爾の窮なく有たまふ所なりアーメン

右の祈禱中、特とに免罪と救拯の思想は耶蘇が人世に持ち來りし最大無上の恩惠と云ふ可き也、

第六、佛は何故に其四諦の妙理中神てふ文字を用ひざりしか

蓋し釋迦は無神的哲學者にして其教義の中宵て神若しくは之に類似の形而上的存在者を説かず、只此宇宙は冷刻不變なる因果律の連鎖にして萬物の出沒亦實に之が器械的所作の應報に過ぎずと爲したれば也、人之に支配せられ、物之が束縛を

脱する能はず、而かも何れの處より此能働の因果律は來り、はた何物が此所動の萬物を創造せしやの問題に對して釋迦は遂に答辨の勞を取らざりき經に曰く

『世尊は此事を教示し玉はざりき』と

道德上此因果律を名けて『カマル』(業)と云ふ孰れの場合に在りても善因は必ず善果を結び、惡因は惡果に至るを免かれず、是れ實に絶對的必然の理法に出る者、善果の賞惡果の罰、凡て是れ自業の自得なる也、然れど此反動的結果や、必ずしも下手覩面に來る者に非ず、死後此土に再來して其所報を受けざる可らざる也、吾人が現在に有する處、吾人の運命、生活の要條、乃至内部の性情人格の品位も皆悉く前生の宿因、即ち吾人が造業の必然的應現に外ならざる也、更らに之を切言すれば、吾人々類は過去身業の反響双影にして『カルマ』は無意識の算盤の如く然り、吾人の過去と現在に於ける造業の因果を加減計算して長へに其得數を保存せる者也、

夫れ斯の如く、人格的有意識の創造者を立てずして尙は且つ道德律なる者の存在を證明せんとしたり、佛教々義の内自ら自家撞着の點多く發見せらるゝも亦必然の數と云ふ可き也、若し人彼の所説に從つて生活せんと欲せば、須らく意識的佛神の思想を殺し、祈禱無く讃歌なく、乾燥無味の生涯に滿足するの覺悟無かる可か

らざる也、彼の天地を以て慈愛天護の樂園と觀じ行住座臥、安然として世を送る底の心事は到底之を佛者に望む可らず、無情なる因果律の下に人は自ら我神となり、我が救主となりて以つて出離の道を求めざる可らず、若し夫れ斯の如き厭世的悲哀の教義より生ずる恐る可き結果に就ては、吾人更らに請ふ之れを後ちに論せん

第七、馬耶兩祖の神觀

一、馬合默が神に對する觀念、

馬氏は其立教の大基礎として宇宙唯一神の說を建てたり、謂へらく天地間唯一體の神ありて存す、其德絕對にして威力限りなく、亦人格的有情の靈者なり、名けて『アラー』と云ふ、『アラー』とは全能力者、神聖者との義を含むの尊號とす、『アラー』固と全智、一切處住にして又能く慈悲甚深の神なりと雖も而かも時としては忿怒暴瞋殆んど專制國王の怒つて臣下を威嚇するが如き事亦是有りと爲せり、『アラー』全能の力を以つて天上の無限位座に居し、其神聖の權威を以つて遍く六合を統治す、天地の間何者と雖も彼に從屬せざる者なし、彼能く人間の運命を預定し、嘗て尺寸の自由を人に許す事無し、故に人の云爲は大小皆悉く神明の定むる處、彼の佛が果報を以て一に自業の所得なりと爲すに反し、馬氏は受報の善惡悉く神意の預定に出づると爲したりし也、『アラー』は曾に天地を創造して自然に之を支配するのみならず、時としては奇蹟的神變の手を以て萬物の發達に干涉す、此『アラー』の無限位座を圍繞する天使の群あり、ガブリエル之が長たり、又天使と人間との中間に位して一群の變類あり、元と魔性の惡鬼なりしを馬合默の法力以て之を善化せしめし也と云ふ、神を以て殆んど東洋的專制國主の如き者と爲したるの結果は神人の宗教的關係の上に實に悲しむ可き惡感化を與へたりき、

二、耶蘇の神觀

耶蘇は世界に一大新啓示を紹介したり、曰く神は唯一にして天上地下在まさゞる處なく、慈愛無量にして人類の父たる事即ち是れなり耶蘇は曾に言語を以て之を說明したるのみならず、其實際の生活を以て神愛實に彼が靈的活動の元氣生命たりしを顯現證示したりし也爾來吾人は基督教所崇の神は人格的慈愛の實體本源にして、愛撫護念以て我曹人類を統治し、又能く靈の感化を以て我曹を教育利導する者たるの活證を得たり、請ふ愛の一字を以て始終を貫ぬきたる彼が生涯の如何

に偉大に如何に高尚なるかを見よ、彼の至言と彼の德行とには燦然として何人も抗む能はざる眞理の光明を發射するに非ずや、神は唯一の靈有者也、萬國萬民の天父也、全智にして能く世界の目的を定め、全能にして能く人類の沈淪を拯ふ、慈滿ち善溢る、耶蘇の人格は實に此新福音の活證なり、啻に耶蘇の之を證したりしのみならず若し夫れ耶蘇の心を心として耶蘇の行を行とする者あらば何人と雖も亦必ずや神愛の靈化を實驗する事耶蘇の所證と異ならざる者あるに至らむ、

佛は全然神の存在を否定し、馬氏は僅かに其之ある可きを揣摩したるのみ、獨り我耶蘇に至りては然らず、只だ口頭辨論に於て之を說明したるのみならず、彼が超世の人格と其愛の生活とを以て我曹に神と及び其靈驗を示現したり、劫初以來長く蒙昧の雲に隱れて有りとも見へざりし慈悲の神體は大聖耶蘇の人格を通じて吾人々類に照臨し來れり故に人若し神を以て愛護眞實の父と認め之と一致の靈交に入らんと欲せば先づ耶蘇を受け入れて超世第一の導師と仰がざる可らず、蓋し其堂に上らんと欲する者は先づ其門を通せざる可らざれば也、

第八、三教の教義に於ける神人の關係

一、釋迦

佛の眼中既に天地創造の神有る事無し、故に所謂神人相關の教義の如き固より是れ無き筈也、彼を以て之を見る、人は各其自身に向て神たる也、則ち彼は彼自身を造る者たる也、彼の愚痴闇昧の徒や生の苦なる所以を知らず過去徒らに妄念して生きん事を欲望せり、此愛慾の一念こそ實に今生の苦集に沒するの因たりしなれ、因既に苦の種ねを下だす、豈苦の果を收めざらんや、其斯の如くなる所以の者は蓋し無智の徒が假合の四大を誤り認めて以て『我』と爲すの『迷』ひに職因せずんばあらず、實相を以て之を見る時は四大は只妄念所作の幻影に過ぎざるを知らざるが故也、故に曰く『我』は下愚迷想の執着にして『無我』獨り能く大覺の境界なりと、

然り無量永劫の野、三世を通じて存在する者は夫れ只『愛慾』のみ、『煩惱』のみ、現在は只是れ前世宿因の應報に過ぎず、輪廻の車輪は『執念』なり、流轉の波勢も亦『執念』なり、愛慾の妄念は實に六道不休の過客にして『生死』は則ち之が出沒のみ、故に人は宜しく此假合の幻象に着せず無常の牢獄を脫して如來所證の金剛地に上らざる可らず、

若し夫れ此苦海の本源は愛着の妄念なりとせば其妄念の因つて來る處は如何、佛

は之を以て無始本來の『無明』に歸せり、而かも『無明』の出所に至りては彼れ遂に一言の說明をも與へずして止めり、

彼の如き觀察の自然の結果が人をして偶ま自制克己の德を發はしむる事或は之あらん、然れども之と同時に肉體を蔑視するの餘遂に冒險身を傷くるも亦顧みざるの暴胆に導くの惧れ無しとせざる也、抑も吾人の肉體をして活動せしむる者は吾人の心なり、意識なり、『我』なり、而かも佛は之等を悉く否定して其存在を無なりと斷せり、『佛言く、當さに身中の四大を念ずべし、各自に名有つて都て「無我」也、「我」既に都て無なれば其れ如幻なるのみ』と既に吾の本我を觀じて如幻と爲す況んや其他をや、『我』無く、『我所』なく、『心性』空にして、『靈魂』と名く可き本體も亦有る事なし、諸法意に從て形を成し、千途心に因て像あり、而かも一度び心意の我執を去らば萬境曠然として亡ぶる事恰かも影の形に從て起滅するが如けん、軀骸何者ぞ、僅かに三毒を容るゝの器に過きず、人生五十年、畢竟夢一場なり、生忽ち過ぎ命泡沫の如く消散じて殘る者は只生を希求する倒見の妄念のみと、

然れど吾人が此に注意す可きは此妄念の道德的價値の有無あり、蓋し吾人が現在い運命を決定支配する者は『カルマ』にして、吾人が死後に遺す處のものは、生を望ひ

の執心と所業善惡の統計とのみ、『カルマ』如何に之と處せんと欲するも、『我』れ既に亡し果た誰か能く之に當らんや或は吾人の死後に於て妄執再び他の四大を假るとと云はん而かも後の身は即ち前の身に非ず從て前身所作の善惡に就ては全然無意識なるが故に此後身は遂に反省懺悔の念を生ずる事無きを奈にせん此に由りて之を見る、吾人は此の恐る可き轉生輪廻の說も要するに道德上些の意義だも有せざる者と爲らざるやを疑ふ可也、

此虛無的人生觀より自然に來る可き結果は果して如何なる者たる可きか、的實明白なる自我の意識、即ち靈魂の我性を否定する處のものは從て彼自身を輕蔑し、其獨自一個の人格を鍛錬せん爲め情を淨よめ、智を研くが如き事は斷じて之を爲す可らざる也、然り佛敎の所說に從かひ如說に俯行せんと欲せば、宜しく文學智見を離れ其靈性の發達を抗んで、冷刻問愚の徒たるを以て却て喜びと爲ささゝる可らず、即ち心の畏る可き事毒蛇惡獸よりも甚だしく、身は是れ罪惡の物二つながら宜しく、之を厭ふ可し、其滅を得る事惡病を除くが如く、身を制し心を伏して速かに出離の道を求む可し、

人或は此の觀念の中に自ら一種の倫理要素あるを云者あらむ、即ち之に從ふ者を

して清廉高潔の人たらしめ、はた無慾、節制、謙遜、無畏、辭讓、謹嚴、自重等幾多の美德を具ふるに至らしむと、然れど此等の諸德は實際に於て利己的慾心の動機より生ずるを奈せん、蓋し其期する處は敢て善の爲めに善を爲さんとするに非ずして實は世界の濁惡を厭ひ、之を解脫して涅槃能入の準備を爲さんと欲するにあり豈誰か之を道德的なりと云はんや、

二、回合默

釋迦の所敎に比し之が結果として寧ろ正反對の倫理に導く者を「イスラム」に於ける神の觀念とす、彼等謂へらく、宇宙間唯一體の神存す、天地萬物悉く其創造する處威靈赫々たり、何人と雖も犯す事を許るさず、宜しく崇敬禮拜絕對的至心の服從を以て眷々其意を奉せざる可からずと、

此敎義は實に强大なる感化を其信徒の上に及ぼしたり、彼等は神を畏れ之を敬ふの人民也彼等は如何なる處に行くも彼の周圍には不思議の神力ありて必ず之を守護すと信する者也一たび『アラー』の神命なりと信する處の者は譬へ水火の難を犯すも敢て辭せず尙且つ之を果たすを以て自己の本分と爲せり、斯の如くして彼等に勇敢あり、如何なる强敵の前にも畏れずして立つ、彼等は能忍なり、如何なる運命の中にて、咳やく事無くして堪ゆるを得る也、彼等は曾に勇往猛近の氣象と堅忍不拔の精神とに富むのみならず、更らに又閑雅風流の事をも喜ぶ人民たる也、彼等は生活の娛樂を有し、はた社會の發達と文明の進步とに向ては最も大なる興味を有し、得るの人民たる也、

然れど其敎義の變化中彼等の道德的生活の發展に向て寧ろ其の妨害となる處のものあり、是れ他なし『アラー』が慈悲親しむ可き恩愛の父母に非ずして、威稜畏る可き專制の帝王の如き者となす事即ち是也、蓋し其信徒の神に事ふるや敢て愛慕の情緖を以てせず却て恐怖の念慮を以てする也、從て彼等の禮拜の如き親んで之に近かんとする靈性內部の要求に在らずして實は敬して之を遠さくる外形の義式に外ならざる也、彼等又好んで善根功德の事を行ふと雖も是れ必ずしも高尙なる善の目的を達せんが爲めに非ずして只神の怒を逃けんが爲めの方便に過ぎず、良心の制裁、人格の修養等に就て精神的感化の力は到底之を回敎徒所崇の「アラー」に望む可らざる也、

彼の徒の信力や堅固なる事金剛の如し、而かも之に伴ふ實際の道德に至りては又稱するに足る者無し、只徒らに倨傲尊大自ら居り傲然として敎外の人を蔑視す、彼

等は傲慢を以て敢て不德と爲さゞるのみならず、却て其自負の地に居るを以て彼等の特權と思惟するが如し、是れ一に彼等が異教徒の與かり知らざる『アラー』の神寵に浴し、假令深重の罪科を犯すも、僅かに一片の義式的善根を修すれば忽ち消滅して跡なきを知り、且つ『アラー』より永久の幸福を預定せられたるが故に死後天國得入の權理は毫も疑を容れずとの自信强きを以て也、

夫れ斯の如く生きては『アラー』特撰の民たり過て罪を犯すも敢て傷心懺悔の要を見ず、蓋し滅罪義式の方法有れば也、死しては天堂得入の特權を有す譬ひ今生鬼畜の汚行ありと雖も亦何の妨ぐる處かこれあらん、彼等が自ら居る尊大傲然として他を卑下する亦宜べなるかな教義既に斯の如し如何んぞ得て人の道品を化せんや、然り個人的道德の發展は『イスラム』に在りては到底不可能の事に屬する也、只回教的神觀が其信徒に及ぼす自然の影響は、自負と傲慢と、道念の微弱と及び制限なき肉慾の沈淪とのみなり、

三、耶蘇の神觀

人の道德的發展上に大なる感化を及ぼし、更らに益々之を淨進するの力は、獨り耶蘇が吾人々類に啓示紹介したる神の觀念にあるのみ、若し夫れ神を以て唯一靈體なる在天の父なりと云ふは是れ天下の人類を以て實に其子女にして、父子相迎能く親密の交通に入り得可き可能を前提する者に非ずや、然り五情內に動くや直ちに祈禱の詞となり、純然無雜恰かも赤子の如き信仰を以て彼に依賴す、是豈基督の信徒が、慈母を慕ふ赤子の心を以て神に愛着する情緒に非ずや、彼等は悲觀の佛眼を以て世界に接せず天他を以て神工妙作の淨土と爲し、之を讃美し之に愛住す、佛の愛着を禁じ遠離を勸めたる處のもの、彼等は喜んで之を使用する也、彼等と雖も佛と同じく世間に苦痛の存在するを認めざるに非ず而かも佛の如く苦痛を以て敢て惡なりと爲さず、却て神が人を教育せんと欲する攝理的必要に出でたる神物なりと爲し寧ろ喜んで此苦痛に堪へ更に之に依りて神意の有る處を學ばざる可らずと爲す也、人は各神より與へらるゝ分に安んじ、苟くも怨らみず、はた怠らず、眄勉——刻苦、以て己れの天職を奉ず可しと教ゆるは我が基督教なり、之を彼の無爲無作の寂靜を以て理想とする佛の教義と何れぞや、佛に於ては三界を集苦の火宅と觀じ速かに之を遠離すれば足る必ずしも勞働力作を要せざる也、而かも耶蘇の教は然らず、世界は神の寶殿也人之を莊嚴せざる可らず、故に其無上の幸福とする處は全力を盡くして天職に從ふにあり然り、社會の利益を增進し文明の發達を計るは基

督教の教義を率じて、如説に勤むるの一途にある事宜しく之によりて知る可き也、特とに此神觀は人をして心地清淨の域に至らしむる靈力を有する也、彼の佛と雖も『情欲の爲めに惑はされず衆邪の爲めに燒だされず能く其垢染を去つて心地を清淨にせよ』と教へざるに非ず而かも其之を爲すや我基督教と大に趣を異にする處ある也、何となれば彼等の心地を淨了するの目的たる敢て己れが天賦の本性を玉成する爲に非ず却て消極的に無我の理想境を證得せんと欲するが爲に然る也、即ち是にありては完全に生きんが爲めにして、彼に在りては六道の外に死去せんが爲たる也、以て兩者の相違ふ處を見る可き也、

更に彼の『イスラム』に至りては寧ろ重きを外形儀式の執行に於きて又內部心地の如何は顧みる處なしと雖も然かも此基督教に在りては然らず一たび基督の門徒たる者は勤めて罪惡の怨敵と戰かひ、苦心煩悶、內は耶蘇の模範に照らして我心の現狀を驗し、外は博愛の天勅を率じて善德の光を四方に放たざる可らず心地の純潔、道念の高尚に於て『汝曹天の父の完全なるが如く完全』ならざる可からずと教ゆる也、然り罪惡を遠離するの意なくして神を愛すると云ふ事は到底其信徒たる者の口にするを敢てせざる處なり、

之を要するに佛陀は人をして自ら地上の神(而かも實際に於ては自ら滅す可き妖怪の精)たらしめ、馬氏は其信徒をして『アラー』と肉慾との奴隸たらしむ、而して耶蘇は人の子を率ひて慈愛甚深なる神の子たるの聖地に至らしめ、能く罪惡の魔軍と戰ひて之を降だし、自由、清潔の勝利者たらしむ佛は人智の發達を以て空想迷着の桎梏とし馬氏は之を蔑視して時に其進路を障害したりと雖も而かも我耶蘇は然らず眞理の探究を以て人生本有の義務となし且つ之に伴ふ至高の幸福を保證したりき、

第九、三教祖各自の罪惡觀

一、釋迦

佛意に從へば『生を希求するの慾望』是れ即ち罪惡なり、佛曰く『五慾に貪着するの念富貴利達を追求するの慾』是れ皆憎む可く厭ふ可きの罪惡たる也、善人とは凡ての情慾を殺了し、寒林の枯木の如く赤裸々たるも愛へず山中の塊石の如く、如何なる誘惑にも感せざる底の人を云ふ也、之れに反して何事に限らず人事世事に思を寄せ、愛憎の情を存し執着の念ある者は惡人たるを免かれざる也、斯の如き人は業惑

必感の道理によりて死後必ず惡所に墮せざる可らず、再生は實に造罪自業の果報なり、

佛說十品の理想善あり、曰く

一、不殺生
二、不邪婬
三、不偸盜
四、不妄語
五、不兩舌
六、不綺語
七、不惡口
八、不貪慾
九、不瞋恚
十、不愚癡

此十善に積極と消極との別あり其消極的なるを止善と云ひ其積極的なるを行善と云ふ、譬へば生を殺さゞるは消極にして止善なり而かも忍辱にして生を度するるには如かず、

積極的行善には如かず、不偸盜は善なり而かも慈善的布施を爲すの積極的善行あ

此十理想善に對して又十惡五逆を立す則ち罪惡なり十惡とは十止善中より、不字を除却したる者、即ち、殺生、邪婬、盜偸、妄語、惡口、綺語、兩舌、貪、瞋、癡、是れなり、其所謂五逆とは、

一、父を殺す事、
二、母を殺す事、
三、佛身より血を出だす事、
四、阿羅漢を殺す事、
五、和合僧を破る事、

若し人ありて此十惡と五逆との罪を犯かすあらば必ずしも神の前に犯すと云ふに非す而かも自ら不利を招くあり、彼れ闇昧、斯の如き惡逆の造業が直ちに輪廻轉生の惡因となり、未來の世に於て地獄惡趣に墮せざる可らざるを知らざるによる、則ち嚴然惡を罰する者ありて然るに非ざるも自ら好んで火中に身を投ずる愚を爲す也、と是れ實に佛家の罪惡觀なり、

此罪惡觀は果して人をして進歩の方向に向はしむる者あるや頗る疑ひなき能はず、既に對照の神靈者なし、何に由てか又懺悔罪を恥ぢ、謙退己を責るの心起らんや只彼等に存する者利害の觀念より打算したる損失の後悔のみ、要するに利己主義の倫理に過ぎざる也、蓋し彼等の善を爲すや敢て善の爲めに之を爲すに非ず、豈又社會公衆の利益を其眼中に置くの遑あらんや、只自個を生命世界より滅却し去れば其目的は達したる也、

斯の如き主義の上に建てられたる倫理思想は到底人をして一增以上の人たらしむる能はず、只だ冷冷淡淡世事人事に對して無頓着なる者たらしむるのみ、從て其罪惡てふ者の性質をも知るべき也、

佛が人をして十惡五逆の罪業人たらざらしむる爲め設けたる方法も亦必ずしも稱するに足らず、曰く出家沙門たらん者は先づ萬事を放擲して顧みず、樹下若しくは石上、座禪數息して專心に法空無我の眞境を求めざる可からず、佛先づ入定して此數息の法を實行し、且最も有益なる脩行として之を他人に勸誘したり佛言く汝等比丘心を攝すれは心則ち定に在るが故に能く世間生滅の法相を知らん是の故に汝等常に當に精進して諸の定を脩習す可し、若定を得れば心則ち不散譬へば水を惜める家の善く堤塘を治むるが如し行者亦爾り、智慧の水の爲めの故に善く禪定を脩して漏失せざらしむ、是を名けて定と云ふ、此教義に從はんと欲する人は生理的には た又精神的に漸次死滅し去るの時を期せざる可らず、是或は罪惡を犯さゞるの一途ならん、而も之を同時に美德をも行ふ能はざるの方法たるを知らずや、

二、馬合默と罪惡、

佛の罪惡觀をして若し全然非倫理的たりと云ふを得せしめば、馬氏の之に對する說明は寧ろ不合理的迷信なりと云はざる可らざる也、蓋し彼は之を以て單に外部に現はれたる有形的行爲に存すと爲したれば也、曰く罪とは神の勅命に違反したるの行爲と及び馬氏によりて規定せられたる宗教的儀式に從はざる者是れなり罪の最大最重なるを偶像崇拜とおす、

『アラー』の外に何物の像たりとも、之を造りて拜する者は神決して許し玉はず、諸餘の罪は如何に深重なりとも免れさらん、只此禁を犯す者のみ永劫に度りて赦免を受くる事なし、

是れ實に馬氏の罪惡觀なり、斯の如き淺薄なる皮相的罪の概念は內的進歩をして遲滯若しくは全然不可能たらしむるは實に自然の結果と云ふ可し、蓋し精神の深

底より流れ出る懺悔惡惡の自覺を缺くを以てなり、彼等は滅罪の方法として獻金若しくは善行(斷食、巡禮等の如き)等を俯すれば、救赦は自然之に隨つて來るものなりとの迷信を有するが故に、知らず〳〵自負滿足の人たるに至る也、

罪惡を外形的に見る如く其之に應ずる刑罰の如きも、其生前の觀面なると死後の永遠なるとに論なく等しく有形的なりと爲せり、彼等は地獄永遠の苦痛の如きも之を具體的肉感的の者なりと思惟したりし也、

三、耶蘇の罪惡觀、

吾人をして罪惡の深意義を知らしめし者は耶蘇基督なり、曰く罪とは神の意志と人間の慾望との楯戈たり、則ち之を詳言すれば、自個を以て生活の中心と爲さんと欲するに利己的動機に動かされたる慾望が偶ま至正至善なる神の道德法に觸れて起る處の者也、人の心中利己的我欲の決定せらるゝ時、罪は忽にして顯現し來る也、罪の結果は直ちに禍を生ず、少くとも良心の刺擊より來る苦悶悒惱を伴ふ者也、耶蘇の徒弟たらん者若し過つて一惡を行ひ一罪を犯す事あらば且つ悔ひ且つ恥ぢて自ら大に責めざる可らず、之を爲す佛者の如く敢て、無爲の利益を失ひたる自個の愚痴を悔ゆるが爲めに非ずして、却て至聖の天法を無視したる我慾の精神を身自ら叱責せざる可らざる也、若し夫れ此主義によりて工夫鍛錬の功を積まば必ずや、離惡移善の道に於て利益する處少からざる可し日々夜々惡を伏し善に進み天道に照らして益々罪染の厭ふ可きを知らば安心立命の平和は油然として汝の心に湧き來るに至らん既に善に對して罪を憎くみ、天法を以て己を律す、人々相互の關係の如き、又自ら理想的交情を温むるに至らん、利己既に罪たり愛他の德豈生せざらんや、善既に神の法たり、自他豈遷善の行を勵まざらんや、果して能く斯の如き地に達するを得ば生活は益々愛す可く、人生は彌よ樂しき者たるに至らん、利己の念を殺して愛他の德を立て、神法の則る可きを敎へて世道を利益する者我基督敎罪惡觀の外別に之あらざる也、

第十、三敎祖と救濟の意義

一、釋迦の衆生濟度

佛曰く

此は是れ最勝不二の法門なり、諸の煩惱を斷滅し、又所有の繫縛を解脫せしむ、明らかに無明の盲を開らき、長く愛河の源を杜せぐ能く此法門に入らん者は再び

苦海に沒する事なく正に佛果の極樂を得せしむ、

神と云ひ、快樂と云ひ、愛と云ひ義務の觀念と云ひ果た、勞働力作と云ふが如き我曹人類の生活と相關係約束して離る可らざる者誰か之を神聖ならずと云はんや、而かも如來及び其徒の眼には此等は皆羈絆桎梏にして之を脫するを以て解脫の目的と爲す者也、即ち彼の濟度てふ語は人をして此人類社會的義務と約束の關係とより離脫せしむるを指すなり、此自殺的解脫の法門にありて各敎徒は自ら能度の神たると同時に又所度の衆生たらざる可らざる也、然り『正念して自度を求めよ』と は彼等の往々相勸むる處是を自力の得度といふ也、

世時として佛敎の敎義と基督敎の敎義とを同一の精神に出づと思惟する者無きに非ずと雖も是れ只其外形の類似に眩惑せられて其眞相の如何を看破する能はざる者のみ、譬へば、

惡を以て惡に酬ゆる勿れ、却て善を以て之に勝つ可し、人各己の心を制し、三毒の惡病を除いて十善の衣を着よ、天下の困窮を見ては之を救ふに慈悲を以てし、自在不惑の利劍を取つて、一切濁惡の魔軍を降す可し、欺く可らす殺す可らす、

と、云ふが如き何ぞキリストの倫理に似たるの甚しき、而かも曾んぞ知らん、此等の

佛語詮する處消極的にして且つ受働的のものならんとは、蓋し彼等の之を爲す、目的只自個を滅却するの方便ならしむるのみ、耶蘇の積極的に爾曹の敵を愛せよと勸むるに對して佛は消極的に之を憎む勿れと止むるのみ、然り愛他的非利己の道德は釋迦嘗て之を敎へず、否其立敎根本の主義は到底其然る可きを許るさゞる也、

出家沙門の理想とする究竟の彼岸は實に斯の如き濟度の意義を有する無我無爲の境界なり、故に通常一般の信者は固より能く之に達す可らず、彼等の爲し能ふ心は佛法を尊信し僧侶を供養施食して僅に後生善所の種因を作るに止まる也若し夫れ彼等在家の白衣にして、一向至心に三寶に歸依し、五誡を持つて福田を種へば、假令今生に於て所得無きも來世は必ず出家の身を受け能く如說脩行の佛子となるを得ん則ち欲を斷じ愛を去り、能く我性の妄着を滅して無爲の法を悟り、內に所望なく外に所求なく、塵に繫かれず業を結はず、冷々、索々、五慾の樂に對して相感せざる事鉄牛の小蚊に於けるか如く、超然として生死の波上に活步するを得るに至らん、是れ之を成道了達の人といふ也既に涅槃の實地に上る、豈復た流轉の舟に乘して此迷津に再ひ來るの恐あらんや、若し能く此に至らば自殺して即身成佛するも可あり、我性全く盡きて又疼痛を感する者なし、自殺するも自然の死を待つも

彼に於て何かあらん、只未了達の人に向てのみ自殺は惡あり何となれば業因未だ全く滅せざるが故に『我れ自殺して苦海を脱せん』との慾望、更らに一念の執着とありて再び生を此土に引くの恐あれば也、

嗚呼是れ如何に恐る可き教法あるかな請ふ、君此主義を奉じて處世せよ是只君一個の滅亡を急ぐものたるのみあらず君が屬する處の社會も亦從つて一日と雖も立つ能はざる可き也是豈恐るべき自我と社會との破壞に非ずや、佛は斯の濟度を以て拔苦與樂の良法門ありと云はんも、吾人は吾人に俯養大成す可き靈魂と、莊嚴淨達すべき社會とを與へたる神に對して大なる罪惡ありと信する者也、茲に於てか吾人は敢て云はんと欲す佛教に所謂幸福とは精神の死滅を意味し、其所謂幸福に至らしむる濟度は實に疲勞したる靈魂を絞首臺に拘引する無情の獄卒に外ならずと、

二、馬合默と教濟の思想、

兎にも角にも衆生濟度は佛教にありて重要の問題たりし事前章既に論ずる處の如し、而かも『イスラム』にありては嘗て其事在るを問かざる也、『イスラム』の教徒は救濟てふ思想を存せず是れ蓋し彼等に罪障の觀念の無きが故なり、若し强て其之に似たる者を求めば、佛教の教義に於て吾人が見たると同一の自力的救濟ならんか馬氏の所謂『自救』とは何ぞや、曰く献牲、祈禱、巡禮、斷食等是れなり、彼は此うちに自ら滅罪濟度の神祕力ありと信じたり、既に自力を以て救濟の目的を達し得と信ず、其教徒が祖師の倫理的感化の力に依賴する所ありきは自然なりとす、今日尚は回々教ある宗教は有りとなすと雖も而かも祖師の德風として見る可き者一も之無き亦怪しむに足らざる也、

三、耶蘇の救濟

罪惡の大海に沒在するの人類を濟度して能く理想の彼岸に到らしむるの法船は獨り我耶蘇所教の救濟のみ、蓋し基督教にありて救とは寛容天よりも大なる神愛の他力に托して拙劣土隅よりも卑しき我儕をすら尚は且つ捨てず漏さずとの信仰の中に存する也、我は是れ重科常沒の身、而かも一切攝取の天網は遂に漏らす事無し、此攝取の神は實に耶蘇の人格中に顯現し玉ふが故に、基督教の所謂救濟は其教祖の精神と須臾も相離る可き者に非ず、人間の罪惡に沈淪する斯の如く甚だしき者あるにも關はらず、尚は且つ攝取して捨てずとの神愛は一に教祖の精神に於て初めて保證せられたるが故に、之を外にしては到底救濟の恩に預かる道あらざ

る也、耶蘇が吾人々類の爲めに丁寧懇切に盡瘁して示現したる偉大の慈愛は吾人をして彼と神とを愛するの情を禁ずる能はざらしむ

若し人ありて其心耶蘇の教を信じ、其人格を慕ひて神を愛するに至らば、彼の惡意は漸く變じ、非利己的の精神自ら勃然として發生するを覺ぼへん、經に所謂、神を愛すると云ひて其兄弟を憎む者は蓋し之ある可らざれば也、一惡に克ち一善を得其之を爲す力は實に耶蘇の中心に滿つる神の愛より發する者に外ならざる也、斯の如くして積極的更生は來り、全生涯を通じて向上不斷の修練を經益々德に進むを得可き也、是れ只耶蘇との密接なる靈の交通より來る人格的感化に由れり則ち耶蘇の精神に於て神靈と我靈と一體不二の一致を感ずる時救濟の秘義は事實として我曹の內に實驗せらるゝ也、日光を受けて月我らを照らすが如く、神愛を抱て耶蘇我曹を救濟に導く也、此點よりして耶蘇は我曹の救主たるなり、而して我曹が救濟を得て到達す可き究竟の地は「天の父の純全なるが如く、我曹も亦純全」の地に達するを爲す基督の福音也、

佛は濟度を以て吾人の「我性」を滅殺するにありと敎へたるに反し基督は之を以て吾人の本我を無限に發達せしむるにありとなせり、佛は人をして下て木石の如き

ものたらしめんとし、耶蘇は昇て之を神の子たらしむ、佛は世界を以て苦集の火宅となし之を脫離するを以て濟度となし、耶蘇は世界を以て天父の家と思惟し之に住する公民たるに足るの資格を具するを以て救濟の目的なりと敎へぬ、佛は濟度を許るす僅かに出家の沙門に限りたるも耶蘇は此門を萬民の爲めに開けり、蓋し神愛無量無邊にして全人類を悉く攝取して且つ之を滿足せしむるを得るものたるを以て也、

第十一、三敎に於ける靈魂の未來觀

吾人は彼の三敎祖師等しく靈魂の不滅を信じ、且つ肉體の死後必ずや往生すべき未來の世界ある事を疑はざりしを忘る可らず、

一、釋迦の後生觀

佛所說の敎義の如くんば生前能く涅槃を證し金剛不退の地に上りたる者に非ざるよりは、何人と雖も死後輪廻の車に乘ずるを免かれず、轉々又轉々、生を望む執念の滅せざる限りは永劫に變生の苦を脫がるゝ能はずと、是れ全然婆羅門の思想也、六道のうち何れの境趣に生るゝやは前生宿業の如何によりて定まる也、佛敎に在

りて未來とは必ずしも靈界を意味せず實は現世に於ける轉生也)と知る可し

然れど此輪廻の車たる果して遂に破壞するの期ある可きや、はた、假令破壞の期之れなしとするも、人は能く就れの時に於て之を離脱するを得可きか、此疑問にして明白に解釋されざる以上は此輪廻の假定說たる甚だ不完全と云はざる可らず、特とに此の輪廻の車上、所轉の機類一も過去世の宿命を記憶せず、はた、現在の受報が其何の因緣あつて然るかを覺知せざるが故に輪廻は少くとも道德的には何の意義をも有せざる也、彼れ既に過去に於ける造業の意識なし、何を反省し何を悔ひてか奮發悔悟の心起らん、既に自ら懺悔感激するなし、如何んぞ能く改善進步せん、彼は畢竟彼が現在有する人格の地步よりは更らに發達する處無かる可き也所謂受けがたき人身を受げたる時に於て既に然り、況んや人界以下の惡趣に墮落したる時に於てをや、

更らに此敎義は頗る不合理的なりと云はざる可らず何となれば盲目の業(カルマ)は到底靈魂をして其造業の種類に從ひ、宿因相應の人體を指摘し、何の時、果た何の處に於て憑附す可き乎を命令する能はざれば也、

靈魂輪廻の終局は涅槃に到達するにあり、涅槃とは何ぞや無漏寂滅の爲樂地なり、則ち靈魂の殺了と愛欲の斷滅とを意味する者也、之に由りて是を見れば、假令彼れ嘗て此を公然聲言する處無かりしと雖も彼が靈魂觀必至の結論地は則ち一切空的の虛無論なりしや疑ひなし、佛眼を以て之を見る時は永遠無窮の生命界に往生するよりも、我性の差別自覺を打破して無感無識裏に滅了するは却て一層の幸福たりし也誰か之を以て偉大にして多望なる思想と云はんや世界もなく、自然もなく、我もなく人もなく、神もなく、靈界もなく從つて永遠の生命界もなし、若し斯の如き虛無の說法を聽聞して隨喜感嘆、心に大滿足を得ると云ふ者あらば吾人は寧ろ其精神の狂するに非さるやを疑はずんば非ざる也、

二、馬合默の未來觀

馬氏の未來に關する敎義は全く佛說と趣きを異にする者あり、蓋し彼等は未來世に於ても尙肉感的苦樂ありと思惟したりき現世に於ける善根功德の結果として未來の天堂に於て信徒の受くる福報は現世の肉慾的快樂を數層增大したる者なりと爲す、地獄に關しても同じく永遠の肉感的苦痛より成る具體的刑罰なりとす斯の如き後世の觀念は、假令其苦樂の度と色とを說明するに適當なる言語を有せざりし事、一は之が原因なりしとするも而かも要するに人類の空想に外ならざる

也、馬氏も釋氏と等しく後生に於て人の靈魂の限りなき發達の可能を說かず、一は靈魂を虛無坑中の暗黑に投じ、他は之を永久肉欲の奴隷たらしむ、

四、耶蘇の未來觀

個人的生命永續の事實は、基督敎にありて岩の如く嚴然動かす可らざる者となれり、一は耶蘇が肉體の死後其門弟子に遺したる『我曹の主は死したるに非ず生ける也』との活信仰と及び我らの信念即ち『死も遂に神人合一の靈的實驗を破る能はず』との意識とは實に此秘義を證明するに足る者なり、

吾人の死後永遠に亘りて存續す可き未來世界の內容如何に關して基督は嘗て詳細の說明を與へざりき、只三事の明瞭にして敢て疑ふ可らざる者あるのみ、三事とは何ぞや、

一に曰く、現在肉身死滅の後、吾人が移信す可き新世界にありても、神性圓滿の眞相に相近接頻肖し、從て幸福快樂の度を一層高ふする也、吾人の靈魂は尙永々向上脩練して曾て進步の足を休すめざる可き事、

二に曰く、果して死後尙發達進步の事之ある可き者なりとせは、又從て惡人の漸悔改善の曉あるの可能なかる可らざる事、

三に曰く、永遠の究竟地には必ずや無上の幸福なかる可らざる事、則ち圓滿具足の神と圓滿無餘の一致に於ける幸福の心地滿足是れなり、

既に神愛の無量無邊なる遙かに人心憶測の外に有り而かも其神我曹を攝取して捨てずとせば吾人の今之を確信する所必ずしも誤謬に非ざる可きを知る、則ち永遠の彼岸頭に上りては一人一物の差別遺漏なく一切衆生皆悉く神人同和、平等一如の大理想境に入るを得ん、是れ實に吾人基督敎徒が未來に關する確信也、

第十二、三祖所望の最大幸福

佛敎に在りては自家の我性を斷却して寂滅爲樂の虛空に消へ去るを以て最高の法樂と爲し、

「イスラム」にありては肉感的極樂の淨土に往生するを指して最高の福と云ひ然して、

我基督敎に在りては神人永恒の一致より生ずる圓滿無上の大安神則ち之を無上の幸福と云ふ也、

第十三、最高の幸福を獲得するの道、

佛陀は自我を殺了するによりて、
馬氏は祈禱と、斷食と、布施の行とによりて、
耶蘇は神の恩惠と、聖愛との實驗以て三者各自所期の理想境に到達す可きを敎へたりき

第十四、三敎敎徒の德性に及ぼせる祖敎義の影響

一、佛敎徒の道德

佛敎の敎理は人をして五欲の迷境に貪著する愚痴の倒見を改正せしめんとする者なるが故にそが美はしき道德の功果を收め得る事又基督敎にも讓らざるの觀おきに非ず、抑も生死の黑障を排して無漏無生の寶國に入らんと欲する者は先づ自我は是れ畢竟何物ぞと觀じ、心を識り本に達して能く無爲の法を解するを勤めざる可らず、故に曰く

佛言はく人の鐵を鍛ひ滓を去りて器を成せは器即ち精好あるが如く、學道の人心の垢染を除かば行即ち精淨あり、

汝曹比丘須らく先づ自ら得度す可し、其心善の器あるに至りて初めて能く他を度するに足る可き也、

人をして愚あらしむる者は愛と欲とあり智者は此愛欲の火坑を脫して心無縛の大自在を得る也、

佛徒が此等の祖敎を奉じて、克己精進、如何に能く成功したりしかを見れば又實に驚嘆するに堪へたる者あり、鬚髮を剃除して沙門となり、世の資財を棄て、乞求以て足る事を取り、日中一食樹下一宿的の簡單なる生計に安んじ、慈悲忍辱の衣には有緣皆度の大願を繫ぐ、若し夫れ佛徒の慈善事業、療病院、養育院等の設あるを見、はた殺生禁斷戒の嚴なる蚊蟻の小と雖も之が生命を奪ふは出家なる者は勿論一般信徒に向つて尙且大罪也と敎ゆるが如きを見ば如何に親切と慈悲とが該敎中に在りて原働的勢力なるかを知るに足らん然り中央亞細亞の未開殘忍の蠻民を敎化して之れを柔和の民たるに至らしめたる者は之を佛敎的慈悲心の功に歸せざる可らず、我と同一ならざる他の宗門の人を誹謗せず、寛仁大度の德を貴んで曾て憎惡の念を抱かず、異端の邪道に逢ふも刀杖以て之を迫害するが如き事は未だ嘗て

之あらざる也、此の宗教的博愛の思想は又國家的にも寛容の主義として現はれたり、

佛法をして世界萬教門の中特とに一頭崢然として地を拔かしめ時に人をして或は基督教の道德力と同根同實に非ざるやを思惟せしめし處のものも實は此慈悲中心の教義ありしに依らずんばあらず、

然り此等の諸德一見甚だ美なるが如しと雖も而かも實際其眞相の價値を點驗し來れば自ら一種劣等の者たるを示めすを如何にせん、蓋其德行の根底に蟄む處の者は一塊の利己的精神たれば也、則ち無我無心にして己の身を持し、無求無欲にして世に接すると云ふも詮する處は現世此生に冷淡不着にして速かに涅槃の究竟地に近かんどの意趣より一切を割り出だしたる者なるを以て也、故に彼等の德や其眞相に於て消極的なり、受働的なり其德行の程度は如何程人間の理想善に近きたるかに非ずして、實は如何程生死の苦輪に遠かりたるかを證するに過ぎざる也、純粹高尙の愛に至りては佛者の未だ有せざる處否遂に之を有す可らざるものたる也、何となれば愛するが故に之を愛するは其實愛する者に執着する所以にして一層世間と人間とに愛着し更らに益々煩惱業苦の黑障を累ぬる所以なれば也、愛

する事は桎梏なり愛せざるに至るを解脫と云ふ、既に桎梏なるを知りつゝ慈善を行ふは彼等の誤謬に出づるか然らざれば少なくとも他に爲めにする所ありて然るものたらざる可らず、然り愛するが故に之を愛すと云ふが如きは彼等の寧ろ排斥する所たるなり、

佛言く、人の妻子舍宅に繫る事牢獄よりも甚だし、牢獄は散釋の期ありて妻子は遠離の念なし、虎口の患ありと雖も心に甘伏を存す、是れ自ら泥に投じて自ら溺るゝ也、佛の淨戒を持つ者は、販賣貿易し、田宅を安置し、人民奴婢畜生を養ふ事を得ざれ、一切の種植及び諸ろの財寶皆當さに遠離する事恰かも火坑を避くるが如くす可し、蓋し世間一切の苦痛と悲哀とは本と愛着より生ずれば也愛着の源泉枯燥し去らば生死の末流亦從つて盡きん、沙門亦當さに世間の厭ふ可きは淤泥よりも甚だしき者あるを觀じて速かに出離を勸めよ敢て躊躇する事勿れ譬へば牛の重きを負ひて深泥の中を行くに疲れ極まれども敢て左右に顧視せず淤泥を出了して後初めて蘇息するが如し、此愛着の迷門を透得する者は則ち是れ出塵の羅漢なり、

佛教倫理の眞面目は瞭然として此數語に見る可らずや、世界を觀じて牢獄淤泥の

穢土と爲し、妻子眷屬を以て枷鎖沒道の縛繩と爲す、知る可し斯の如き殺我滅愛の倫理主義が入道の人をして徒らに無情冷刻たる者たらしむる寧ろ當然の事たるを、知らんと要せば請ふ下の一實例を讀め、

往昔一人の沙門あり、佛勅を奉じて田宅妻子を棄て、雲水飄然として去る、後久しくして偶ま其眷族所在の地に至る事あり妻女則ち愛兒を伴ひ來り彼等の窮情を訴へて爲めに扶助養育の事を哀願する最も懇切なり、而かも其僧定にありて殆んど耳なき者の如し妻子涕泣號哭し來て哀を求むる事三度僧は尙ほ三昧の目を開かざりき妻女茲に至りて轉た其良人の無情を恨らみたるも尙其愛兒をして餓死せしむるに忍びず試みに其子を執りて之を禪座の膝上に投じて其恩愛の心中に動くを待てり而かも無念無想海中の怪巖は、哮吼巨濤よりも甚だしき妻子の恩愛も遂に之を動かすによし無く、憐れむ可き薄命の妻女は悄然其子を携へて去りぬ、佛此行爲を見て頭を撫し讚嘆三賞して曰く、善いかな此の持戒の人や、是れ即ち眞正のブラーマンなりと、

其根本の敎義彼が如くにして倫理的結果の茲に至る亦自然の數なりと云ふ可し、女人は革囊の衆穢なり近づく可らず、結婚は障道長惡の害事也、避けざる可らずとなす、之あるかな現時にありてチベット、モンゴリヤ、ビルマ、支那等の諸國に於ける婦女子の位置を見よ、はた其家族的生活を以て敢て神聖の物と爲さず、甚だしきに至りては一夫多妻の習慣を見ても却て當然の事として怪しむ處なき是れ豈佛敎々義の惡感化に非ずや、否少くとも、婦女子を以て魔物となし、家族的生活を以て道士の桎梏なりと爲す佛敎の敎義は到底此習慣風俗の道德的惡弊を積極的に警告感化するの力ある事なきは明らか也この日本の婦女子が佛敎渡來前に於て遙かに高位置を人類社會の上に認められたりしは歷史上爭ふ可らざる事實たるを見ても之を知るべき也、

佛敎の敎義を以て倫理道德の基礎と爲さんと欲する者は之と同時に個人道德の廢弛と社會存在の危殆とを期せざる可らず、蓋し、國家と云ひ、祖國と云ひ、家族的生活と云ひ、文明の發達と云ひ、其他社會的に個人的に、吾曹が拂ふ百端の注意は佛敎に於ては全然其價値を失ひ徒らに無用の長物たるに過ぎず、否寧ろ彼等の目的地に達する障碍を爲すの魔物たれば也、何の處たるを問はず佛敎の信順歸回せらるゝ處は、「死」之が先導の師となり、生々の元氣を殺了して漸々萬事を滅亡の大海に沒了消却せしむる者なるを覺悟せざる可らざる也、

馬氏の道德觀も其不條理的なる點に於ては敢て佛に讓らざる也、由來回教の徒は其嚴重にして專橫なる神と內部的交通の感應を有せず、故を以つて神靈より發出する靈的內部の感化に浴するの自覺を缺げり、尤も回教の信仰や其信徒をして艱難苦楚に堪へ、不運と悲哀とを忍ぶの勇氣を持せしむるは事實也、特とに、彼等が其教祖に倣ひて飲食を攝し、就中飲酒と賭博とを厭ふの甚だしきが如きは最も稱す可き事となす彼等は勇氣に滿てり彼等は猛進の前に堅甲利兵の强敵あるを知らざる慓悍の好武人たり、是れ一に其の向ふ處は敵地に非ずして約束の天國にあれば也、否啻に是れのみならず、回教的倫理は又人をして慈愛の心深く、喜憂相憐れむの同情に富ましむ、其布教の地に於ける慈善事業の如きは輓近更らに其隆盛を極むるに至れるも亦事實なり、

此等の諸德一見美なるが如しと雖も未だ以て道德的眞價値を具有する者として之を許す事能はざる也、何とおれば彼等が之を實行するの目的は一に『アラー』よりの報酬を期するにありて敢て愛心自然の涌出にあらざれば也、彼等の道德は其結果として神の恩寵に預からんと欲する巧利的欲望の所行なり、何の道德か之れあらん、彼等既に自力の善行を以て神前に價値ある者となす、世界に於て最も多く『アラー』大神に阿諛し親近し、且つ最も多くの慈善を爲す者は彼等たるが故に、從つて神前に人間として價値を有する者も亦彼等たらざる可らず、彼等が自ら居る事尊大、傲慢不遜の眼を以て一切他の教外の人を蔑視して得々たる所以も亦實に此に存する也、彼等の特質を一言にして表白すれば曰く倨傲『パリサイ』的自負是れあり其宗祖が自個の德品を修養する向上的工夫を等閑に附したるが如く彼等も亦嘗て刻苦己れの人格を練達するの必要を感せざる也、是れ蓋し彼等の教徒は生れながらにして天堂得入の法器たりとの信念を有すれば也、否彼等は啻に天國得入の特權を賦與せられたるのみならず更に他の一個特有の天命を奉する也、何ぞや彼等と信仰を異にする他教門の人を蔑視冷遇するは勿論進んで之に迫害を加へざる可らずとの神敕之れなり、腥血を以て書かゝれし回教の經典『コーラン』のうち宗祖他宗の人を憎惡し之を迫害するを以て各信徒の義務なりとなし則ち命じて曰く、

一年のうち四ヶ月を以て神聖とす、此月に於ては汝曹罪惡を以て汝曹の靈魂を汚かす事勿れ、然れども偶像を拜する者に逢着せば宜しく之を迫害して其何の

月たるに係はらざれ、何となれば彼等偶像の崇拜者は終歳永切斷へず汝曹の讎敵たれば也、

『汝曹其仇を報ゆる勿れ、却て之が祝福を天に禱る可し』等の如きは寧ろ不德の惡行として彼の禁制する所たるあり、彼等傲慢自ら人類中絶對無上の神民なりと信じ基督教徒乃至一切の外教徒を見る甚だしき侮蔑の眼を以てす四海兄弟的博愛の觀念思想の如きは彼等の到底夢にだも知らざる所なりとす之に反して彼等が他宗徒に對する時は之を虐待するには有らゆる手段を施す事を許るさるゝ也、刀杖瓦礫其他百千の迫害的方法は全く其人の撰む所にして曾て一定の制限を設けさる也、元來彼等の望む所は神より愛の溢れ來らん事に非ずして質に嚴罰の降らざらん事にあり、換言すれば神を以て慈悲の本源と爲さずして無情の暴君と爲す也、神の寫象既に斯の如し、彼等の心知らず識らずの間慘忍刻薄の習ひ性となり、遂には復讎迫害等を以て人間の義務ありと思惟するにさへ至れる也

愛の分子の缺くる處に於て、社會的要條の圓滿ならむ事は到底望なる可きに非ず、多數の婦女子は回教倫理の壓制の下に不親切無情刻薄の虐遇と屈辱とを忍はざる可からざる也、回教の國にありて可憐の彼等は僅かに閨房中の器具たるの外何等の價値も認められざる也、多妻主義是認せられて其結婚には毫も道德的意義を有せず徒らに獸慾的肉體の接觸たるに過ぎず『肉感的獸慾』是れ以て『イスラム』的不德の特徴を説明するの語なる可き乎、離婚は何れの時をも撰ばず全く男子の任意也と雖も而かも妻なるものは永久に絶對的に良人の同意なくしては進退するの權理を有せざる也、彼の女の双肩にかゝる責務は萬貫の岩の如しと雖も而かも一舉手一投足の其自由を許されざる也、更らに甚だしき不德義沒人道的なる者を奴隷制度の許容なりとす、過去の歴史上人類の一大汚辱たりし此制度回教國に在りては今尚ほ之を存し之なくしては社會一日も立つ能はざらむとす、固より馬氏は命ずるに奴隷を遇する宜しく親切あるべきを以てしたりと雖とも而かも此制度を撤回する事を敢てせざりしは抑も彼の誤謬ありし也、去る一千八百七十六年トルコ政府は法律を以て「スルタン」國臣民の個人的自主權を保證したりと雖も然れども此法律は實際に於て國民在來の風習を一掃するの力なく其奴隷を解放せざるは更らあり僅かに二三の特權を授與する處すらあらざりし也、

一國民が其精神的生命として尊奉する道德の根原にして既に斯の如しとせば早晩必ずや國民的瓦壞の恐慌を免かれざるべし否今既に土崩の兆雲油然として天

の一角に起れるを見よ人若し「スルタン」帝國現時の非況を目擊せば蓋し思ひ半に過くる者あらむ、曰く後宮に於ける政事家の隱謀、軍人社會に於ける道德的腐敗、賄賂の公行、經濟の紊亂、銀行の破產、回教國に於ける生命の不安、其他汚醜不秩序等是皆回教の教義所產の結果なりとす、見よ彼の宗教の衰頽と共に其國家も漸やくまさに廢滅に歸せんとしつゝあるを、蓋し神政的イスラム國にありて政事と宗教とは非常に密接の關係を有し其おこるや只之と共にせり其亡ぶるも亦之と共にすべきは固より應さに其處たり、

よしや近來支那と中央亞弗利加に於て少しく新氣焰をあげむとするの勢を示す無きにあらずと雖とも世界の大勢は既に定まれり又彼等をして乘ずるの機なからしめんとす、然り彼等の得意の時代は既に去れり、來らんとする新時代にありては回教の元氣既に消滅して又燃ゆる事能はざるべし、神は馬氏の事業を裁判し玉へり、何人かまた此荊蕀より甘露の葡萄を得んと欲するも得べけんや、

三、基督教と道德

世界人類の全體に向て眞正の福祉を與ふる者獨り我基督教あるのみ、其教義の本源より流れ出づる道德的感化は個人若しくは團體の生活上重大顯著なる結果を生じ、更らに有形無形の社會的進步に隱然として原動誘引の勢力たるなり、

蓋し基督教にありては、千萬教理の根本義として人に對する神愛の無量無邊を說く、神人の間に靈交感應の有り得可きは固より論なし、既に神人の交感あり之が全人格に及ぼす感化の力は其智の上に情の上に、はた意の上に無限たるや論を俟たざる也、彼の基督教の徒が義務として實現せんと勤むる理想は一に大聖基督に依りて成就證明せられたる道德的圓滿の域に達する事則ち是れなり、天地に充滿する神の大法たる「至善」を以て對照標的の鏡と爲し、始終不休の向上心に任じて能く懈退する無くんば其至善は必ずや俯行者の道念をして益々堅固に、意嚮をして高潔に、且つ心地をして悲悲良善の源流たらしむる者たるを實驗せずんば非ざる可し、其愛他や必ずしも利己の私心に根するに非ず、其敬虔や必しも畏怖の念に驅られて然るに非ず、是れやがて天地の間に寓せらるる一大意匠の歸趣にして人の賦性本來の所詮遂に此に出でざる可らざる也、故に苟くも人生終局の歸趣を蹈證せんと欲する者試みに耶蘇所指の道に從て俯行せば得入の門頭必ずや遠きに非ざるを悟とりはた眞正の幸福を獲得するの捷徑も亦茲にあるを覺らむ、

此慚悔遷善の道德的精練と之より生ずる平和とを實驗せんと欲す必ずしも佛者

の出家遁世の悲觀を學で妻子眷族並びに社會上一切の關係を斷離するに及ばず、否此等社會的生活の關係と條件とを維持し、其位置と事情とに應じて能く基督敎的精神を發揮せざる可らず、基督敎徒が德を脩め道を成す所は敢て山林の靜所に非ず、生存競爭の熱鬪裏是れ實に彼等の道場たる也、蓋し基督敎の道德的精神は其信從の人を跋舞刺擊して其內的生命が實踐的道德として外に表はるゝ處無くんは止まざらしむ、其信念益々高うして其心情の潔淨と、行爲の善美とは彌よ其度を增加する也、彼れ若し深信篤虔の敎徒たらば善行美德の實は自づから外に結ばれずんばあらざる可し、豈名聞利達の虛榮を期して然らんや只神を愛し人を愛し且つ最高の『善』を愛するの情は自ら斯の如く爲さざらんと欲するも得ざらしむるが故のみ、曾に情に於て然るのみならず、心に受けたる神恩は之を出さずしては止む能はざるの義務的責任心の衝動を感せしむる也、

愛の一字、佛は之を殺了し、馬は嘗て其之れあるを知らざる也、而かも基督敎にありては是れ唯一の標的なり、無二の祝福の力たり、一言にして之を掩へば曰く基督敎は愛の宗敎なり、世界最勝の法門大攝無漏の法網たる所以なり故に耶蘇の曰く

汝曹互に相愛せば人之によりて汝曹の我が弟子たる事を知る

斯の如き內的淸淨力を有する愛の宗敎の存する處には社會的凡百の事情と關係と一として之が感化の光被を受けざるものはあらざる可きなり、結婚の大禮は此に在りて道德的生涯の入門たり、佛者が見て以て愛着の羈絆と爲し、回敎徒が輕視して毫も顧みざる夫婦の一致は此に在りては實に祝ふ可く樂しむ可く貴ぶ可く重んず可き神定の大事にして人倫五常の義皆實に此れより發出すと爲せり、抑も婦女をして家族及び社會の中に適當の位置と價値とを稟有せしめし者世界の聖賢中耶蘇基督を以て初めとす、既に家族的生活の圓滿と幸福とを期す其所謂家庭敎育に於て神聖の意議を有する固より云ふまでもなき也、

國家てふ團體的組織を以て天意に出づる神的秩序と爲し、其自主的獨立の特權を保證する者も亦基督敎あり、佛は社會的組織を蔑視し其祖國をすら厭ふ可く忌む可き牢獄と思惟し馬氏は之を以て盲從的に宗敎の隷屬と爲せり而かも我基督敎は然らず國家をして其存在する所以の目的と、之に伴ふ當然の威嚴と尊貴とを保有せしむる也、個人が善を以て到達の理想と爲すが如く國家も亦善を成就する目的の爲めに定められたる神の方便なり、故に我が基敎徒は社會の爲め祖國の爲めに信義と忠實とを致すは只に社會祖國の目的を成就する爲めのみならず又以て

自己の本分を全ふする所以と信ずる者也、此に於てか吾人は將さに斷言せんとす曰く基督教的精神の勃興活動する處に於て社會が益々福祉を加へ、國家が彌よ隆盛に進むは實に大勢當然の結果と云ふ可き也、

基督教は啻に吾人の靈魂に救濟の平和を與ふるのみならず、眞理の探究に當りても敢て思想に束縛を加へず、理性の判斷に任かせて縱横に馳騁するの自由を得せしむ、彼の藝術科學の如き從つて亦無碍の進歩を爲し得る也、然り其之れあるが爲めに佛教及び回教に比して一層高き文化と開明とを產出したり、人往々にして泰西文明の所益に隨喜し徒らに其皮相の光彩に眩惑せらるゝも而かも其淵源する處實に遠く此にあるの所以を知らざるは抑も亦嘆ず可きの至りに非ずや、皮相の文明を摸倣する必ずしも難からず、然れど根帶を有せざるの花卉美は即ち美なりと雖も遂に能く長時に亘りて馥郁燦爛たるを得ざるなり、

天日の榮光は愛山河を平等に照らし春雨の恩澤は慈艸木を一樣に濕はす、愛を以て立教の基礎と爲すの宗教のみ能く社會的生活の上に平等施一齊的の祝福を與へ、之と共に社會より壓制と不公平とを除却し得る也、四民平等の人權は承認せられて奴隷の制度は破壞せられぬ、癈疾不具の徒、赤貧窮裏の輩と雖も基督教國にあ

りては固有の權理と保護とを受けつゝ有る也、個人の自由と安全と及び其社會上の地位を造る機會とに於て基督教は更らに他の跳れよりも大なる者を有すと云ふ可き也、人爲の階級を以て人格の上下貴賤を判せず經濟的に最下級の人をも尙之を遇するに兄弟を以てす、

如何なる宗教と雖も未だ斯の如き純正の思想を社會に與へたるものは曾て之なかりし也、實に基督教によりて半ば成就せられたる人道の理想は實に人生最上の理想たらざる可らず、佛は其國民の缺望を充たさんと欲するの同情なく、馬は其民を教化するに足るの理想を有せざりき、只耶蘇のみ、啻に不幸なる貧者と困扼者とを慰籍したるのみならず更らに進んで彼らの爲めに其各自の本性中、富貴歡樂何物も及ばざる人格の存在を確しかめたり、基督教は愛を以て一切の人類を抱攝す、其所謂一切のうちには仇敵をすら含む也、博愛の海は洋々として階級と民族の差別を撰ばざる也、基督教の關はる處恰かも日光の地球上面に於ける如く一切の人類に照來せし福音中の福音たる也若し斯教にして果して活潑なる生命の宗教たるに至らば黑奴蠻酋の輩と雖も等しく人道一樣の溫風に浴し、同じく進歩の大海に遊ぶを得ん、

佛教は僅に出家の雲水に適するも之を以て全人類の救ひたらしむる能はず『イスラム』は只東洋に於ける道德文物共に半開の國民に適せんも而かも世界を動かす、大勢力たるを得ず若し貴賤上下の別なく、賢愚大小を論せず上は王公貴紳の顯より下は車夫馬丁の賤に至る迄凡て人類の精神的渴望を滿足せしむるに足る眞福音を要せば來て基督の教中に求むるの外遂に他の途之れなかるべき也、然り基督教は國家の違を問はず人種の別に關はらず全地の萬民皆共に之を仰ぐ可し、一月天に在り、若し能く疑惑の雲を拂つて之に對せば千波萬瀾、皆等しく平等無差別の妙光に照らさるゝを得ん、以信得領の大利益、君請ふ遲疑して其澤に漏るゝ事勿れ、

第十五、三教の中孰れか最も善く其徒弟を教化する力ありや

一、釋尊の教法か

否然らず釋尊氏の道は人をして社會的生活の萬繫累を離れ出家悠々身を行雲流水に委し去らざる可らざらしむ、社會的、政治的弊害を矯正するの難局に當るが如きは彼等が奉ずる教義の許るさゝる處蓋し是等は迷夢一場の兒戲に外あらざれば也、啻だに其教徒をして白眼社會の出來事を冷視せしむるのみならず更らに嫌厭以て極苦の火宅なりと思惟せしむるが故に進んで文明の進歩と道義の發展との爲めに計畫する處無きは勿論其教義に從ふは却て此等の進歩を障害杜絶する所以なりと云ふも亦敢て不當の言に非ざる可き也、

二、然らば『イスラム』は如何

是れまた其任に堪へざるもの、回々教徒が其本國に於て一個の神政的國家を組織し、嚴格莊重の儀式と典禮とを創始したるは事實なり、然れど此れと同時に一種厭ふ可き迷信の習風と排外的自負心とを增長せしむるも亦忘る可らず、彼の教義を奉ずる者にして個人の改善は到底不可能の事なる也、況んや彼の教義必然の結果たる多妻主義、奴隷制度、其他社會の上下に於ける不秩序と不安寧とは牢然として拔く可らざる者あるに於てをや、

三、基督教

前二者に比し大なる感化の力を有する者は此教なり、其到る處未だ曾て良善の功果を結ばずんば非ず、基教國に於ける宗教的道德的の要條は整然として備はり炳然として其光輝の仰ぐ可き者有つて存するを見る、社會の安寧と秩序と、家庭の風

儀、教育の普及、藝術の發達に、文化の進歩に、通商に、貿易に其他百般の事物に就て、之を馬佛兩教所化の邦國と比較し來らば基督教國に於ける宗教的感化の著しき蓋し又思ひ半ばに過ぐる者あるを發見せむ、佛は世界を嫌厭して餘りに遠く之を離脱せしめ、馬は之に愛着して餘りに深く肉慾の夢に耽らしむ、耶は之が中道の正路に座し彼に着せず之れを捨てず、能く世界の主人たらしむる也、

第十六、三教の中孰れか是れ最勝至善の宗教たる可き

論じ去り論じ來りて滔々數千言、吾人が茲に一斷案を下ださんとす亦敢て勿卒の事に非ざる可し、三教の中孰れか是れ最勝至善の宗教たる可き、吾人は此疑問に答ふるに基督教を以て是なりと云ふを躊躇せざる者也、讀者若し沈思耶蘇の人格の高潔絶倫なる、彼の宗教的並に道德的感化の活潑にして正大なる、其教相の眞實無妄にして能く社會若しくは個人存在の眞意義を啓發利導する者たる等の各方面より觀察せば必ずや、天下所有の教法中能く、斯教を凌ぐ者なく從つて吾人の言の欺かざるものなるを覺るに至らん、

第十七、三教教相の變遷

一、佛教の變化

佛教が今日に至りて其立教當初の教相を全然反對の者に變形したるは何人も爭ふ能はざるの事實とす、彼の禮拜恭敬の目的たる本尊を有せざる佛教が、漸々一般俗衆の依信を引くに足る者を以て之に代へんと欲するに至るは寧ろ自然の數と云ふ可し、爾來天竺の人民は彼れの如き虛無的空觀の教義に隨喜滿足する人民にては非ざりし也、生前無神無我の哲理を主張せし佛陀は死後遂に法身常住の如來に化したりセイロンにありては彼が遺骨の一片も無上の神靈ある珍寶として尊重せられたりき、彼れが其下にて四諦八正の妙道を成就したりと傳へらるゝ菩提樹は其小枝すら尙且つ不思議の靈驗ある者として崇拜せらるゝ也、今日にありて佛教は殆んど他の偶像儀式の宗教と相撰ぶ所なき也、念珠の功德、靈水の利益、若しくは靈場の巡禮、堂宇の參拜に冥加の福有りと爲すが如き何ぞ佛の本意に戻るの甚だしきや、彼等の祈禱とは經文秘呪の棒讀的暗誦なり、其呪文たる古代の梵語にして解義難澁僧侶と雖も口之を誦して嘗て其意の存する處を知らざる事往々に

して之あり、否彼等は此の難解の梵音なるが爲めに靈驗顯著の神秘咒と爲すなり、某佛敎の國にありては、祈禱の法輪なる物を製し風をして之を轉廻せしめ以て轉法輪の祖意を得たる者と思惟せり、其愚寧ろ笑ふ可きに非ずや、

佛敎變形の最も大なる者をチベットに於ける佛敎法王たる「ダライラマ」の宗敎なりとす、此法王の人格は其麾下より殆んど神の如き尊敬を拂はるゝ也「ラマ」は佛陀の權現にして地上具體の化神なり佛の無神的哲理に滿足せずして遂に人間を以て其位置に立せしむる一見愚なるが如しと雖も翻て之を思ば一方に抑壓せられたる宗敎心自然の要求は遂に此に出でざるを得ずして出づるのみ、豈又怪しむに足らんや、

特とにチベット、モンゴリヤ、ビルマ、セイロン等の諸國に至りて僧侶の一階級は社會中最も憎む可き腐敗の分子なり、彼等は僧屈に逸居し多數人民の豪血に衣食するに甘んじ、坐臥碌々、俗衆迷信を利用して以て己れが口腹の慾を逞するの具と爲す、燦爛目を眩する袈裟の裏には包むに非道悖倫の腐塊を以てするを常とせり、此北方佛敎に對して所謂南方は自ら趣を異にする者なきに非すと雖も然かも全體に於て多大の變化を來たし原始佛敎の哲學的精神は孰れにゆくも見る可らざる也、原始の單純なる宗敎々義に代ゆるに形式的禮儀と非常なる迷信とを以てせり、諸天善神の群、極樂地獄の思想等は古代原始の佛敎の全く相關知せざる處なり、之を要するに佛陀の敎法の如く其本來の形相を變化したる者は世界の宗敎歷史上未だ嘗て見ざる處なりとす、

二、回敎

佛敎と正反對に其本來の性質を保存する者は「イスラム」也、比較的に餘り重要ならざる二三の變化は免かれず且つ其祖師の如き死後超人的異常の性格を具へたる一種の「神者」たる位を證し、高く天樂無窮の光門に入つて長く神人兩間の中保たりとの信仰起りしと雖も而かも此神化說や必ずしも佛敎に於ける形而上的法身化說の幽玄たるに比すれば又同日の論に非ざる也、何となれば該敎にありては「アラー」大神の如きすらも其實相は敢て絕對無限の靈的自存者を云ふに非ず殆んど吾等人間と同樣の五體と感覺とを有し嚴然として黃金座に兀座する者と寫象せらるゝ故に、預言者馬氏の如き拔群の英傑が死後神化したりとて毫も怪しむに足らず、且つ之を神化せしむる必ずしも困難の事に非ざる也、古來回敎中二三慷慨の志士起つて往々回敎改革の大業を企圖し時に成功の實を擧ぐる者すら又往々にし

て之れおきに非ざりしと雖も而かも長時に亘りて能く勝利を占め得たるは未だ嘗て之れあらざる也之を要するに回教は開宗の當時より今日に至る迄一千四百有餘年間未だ曾て變化若しくは進歩の何物たるかを味ひたる事無き唯一の結晶的宗教なり、

三、基督教の變遷

基督教にありてもグリーキ及び羅馬の二大舊教によりて著しき大變化を蒙りたり、神の愛よりもポープの教權を讃美し、基督の人格と其教義とに勝りて聖母若しくは殉教先賢の肖像を崇拜し弊害百出從て基督教の實相は殆んど滔々たる迷信の濁流中に沒却し去らんとする危殆を示すの時代すら之ありき、而かも幸ひに福音主義ある教會のあるあり能く開教當時の實相を維持し、祖師基督の衣鉢を相傳へて以て今日に至り尙燄々たる活火の光炎天下の何物をも燒き盡くさずんば止まざるの概を示めせり、

第十八、三中孰れか最後の勝利者たるべき

疑ひもなくそが『愛』二字を以て立教根本の骨髓と爲す福音主義のキリスト教たる可きは吾人之を云ふに憚らざるもの也、然り其勝利の端緒は既に開かれたり、基督教の教役者が布教の結果佛馬兩教の國に於て業に無數の改宗者を出だすは事實にして日本に於ても既に十二萬餘の受洗者を有す去る一千九百〇一年中一ヶ年に於て日本は六千九十一人の信徒を增加せり、斯の如き盛況は日本の傳道界が數年來未だ嘗て見ざるの好成績ありとす、日本が全然東洋第一の文明國たると同時に純乎たる基督教國とあり、居然として其美と其雄とを宇內の列强に誇るの日は蓋し又甚だ遠きに非ざる可き也、然らば果して何れの時に於てか能く此目的に達するを預測し得可き某閑人之を數學的に說明して曰く『總計合せて拾三萬人なりし基督教徒は一年間に六千九十一人を添加せり、其增加の百分比例は四、六一なり、然るに日本人口の增殖は年々の平均約五十萬人あるを以て、總人口數四千五百萬人に對する人口增加の同比例は一、一一なり茲に於てか基督教徒增加の比例は日本人口增加の比例の四乃至五倍なりと云ふを得可き也、故に今n年以後に於ける基督教徒增加の重利法的計算の方程式を求むれば

$$n\text{年間ノ增加數} = K \times \left(1 + \frac{\text{步合}^{a}}{100}\right)^{n}$$

あり即ち

$$K'\left(1+\frac{a}{100}\right)^n = K''\left(1+\frac{b}{100}\right)^n$$

∴

日本人口 $45000000\left(1+\frac{1.11}{100}\right)^n$ = 基督教徒總數 $130000\left(1+\frac{4.61}{100}\right)^n$

故に之を「ローガリズム」によりて計算すれば日本國は百七十七、八年後には總て基督教徒たるに至る可し、

以上の計算は之を年割にしたるの結果なり若し之を日割にせば更らに短日月にて事足るの結果を生ず可し、即ち概算百六十年内外にて此勝利の目的を達し得可き也果して然らば日本大帝國は從來の傳道年數四十年を加へて僅かに二百有餘年にして純然たる基督教化の一大美刹と爲る可き也、是れ教會歴史上稀に見る所なりと云ふ可し、

三大世界教 終

24/7/38

明治三十六年七月二十日印刷
明治三十六年七月廿三日發行

三大世界教
(定價三十錢)

發行者　ハンス、ハース　東京市小石川區上富坂町卅九番地
飜譯者　青木律彦
印刷者　中村政吉　東京市京橋區三十間堀三丁目十番地
印刷所　報文社　右同所

87
8